

年報

平成 30 年度（2018 年度）



Oita University of Nursing and Health Sciences

公立大学法人大分県立看護科学大学

平成30年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学

理事長・学長 村嶋幸代

大分県立看護科学大学は、平成30年9月15日に創立20周年記念式典を挙げる事ができました。記念式典、祝賀会、ホームカミングデイ、看護国際フォーラムを行い、本学の歩みを振り返ると共に、使命を改めて認識した時間でした。

ご来賓の方々にお越しいただき、卒業生・修了生が集うことができました。本学を創設し、育てていただきました大分県を始め、多くの方々に、心から御礼申し上げます。

本学の定款第1条には、「大分県における看護学の拠点となる」という本学の使命が明記されています。この使命に対し、本学は、①保健・医療・福祉の人材育成（教育・社会貢献）、②少子高齢化・過疎化・国際化が進む地域社会への施策立案（研究・社会貢献）、③看護学・人間科学の知見を県内企業・起業に生かす（研究・産学連携）の3側面から取り組んでまいりました。

人材育成に関しては、平成30年度末までに1,471人の学部卒業生、200人の修士、19人の博士課程修了生が本学を巣立ち、大分県を始め全国で活躍しています。

また、施策立案に関しては、大分県および大分県看護協会ともタイアップした中小規模病院等看護管理者支援事業を、地域ごとに順次実施するとともに、教員の専門性を活かした取り組みを多数実施しています。更に、企業との連携も着実に進み、グッドデザイン賞の受賞や共同研究に至った例も出てきました。

年報は、これらの足跡をまとめたものです。継続的に年報を作成することによって本学が着実に前進していることが分かります。

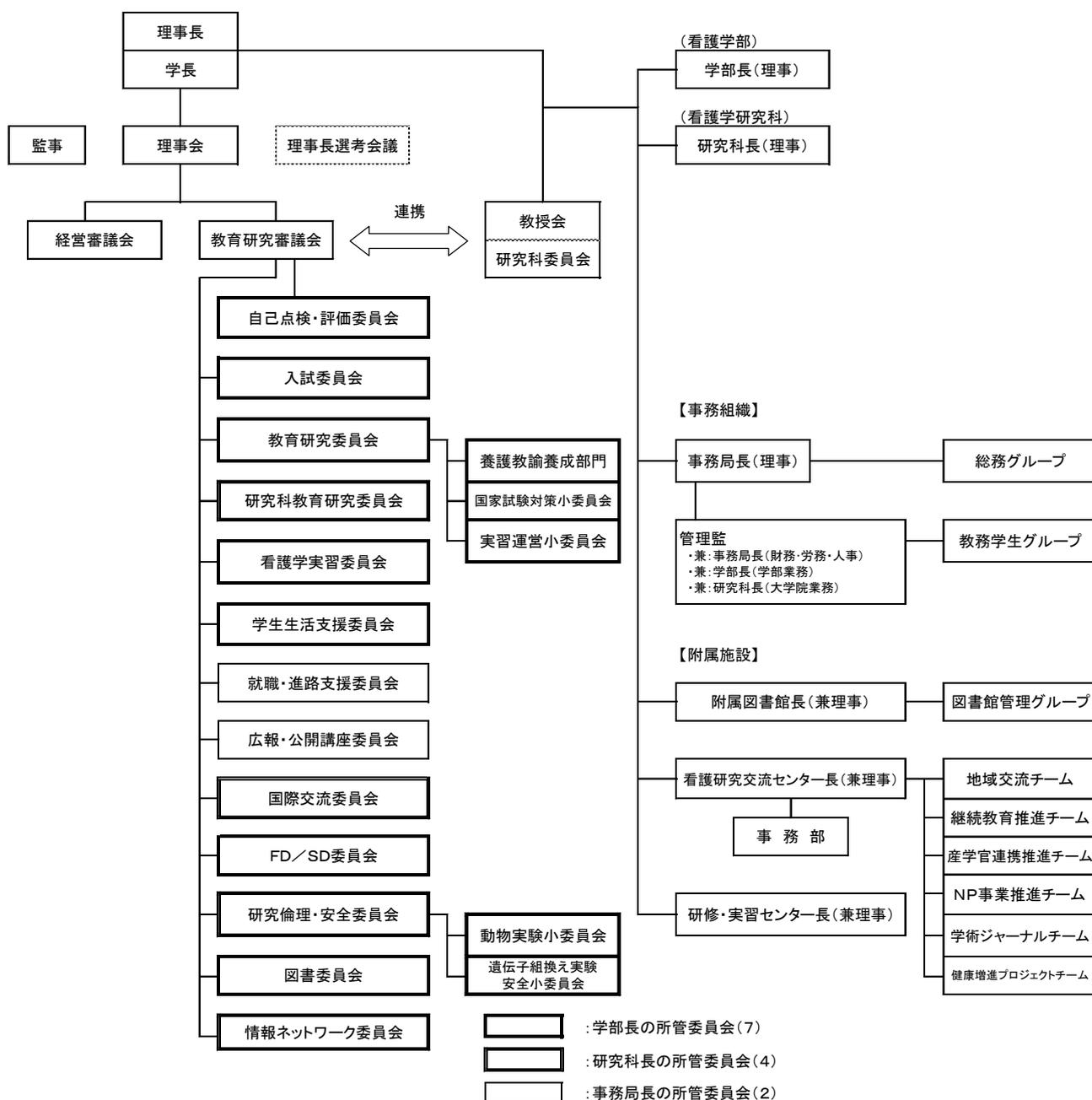
平成30年度は、第三期中期計画の1年目でした。

平成24年に始まった第二期中期計画では、学士課程4年間を通じた看護師の教育と、大学院修士課程における保健師・助産師・ナースプラクティショナー（NP）の教育を骨格としていますが、6年間で充実してきたと実感しています。

この骨格に、更に学士課程における養護教諭1種の教育（選択）と、修士課程の看護管理・リカレントコースで看護管理を専攻した修了生に日本看護協会の「認定看護管理者」の受験資格を付与することが加わりました。各々、平成30年度に初めての資格取得者が出ました。

年報は、自己点検・評価委員会の所掌事項です。本委員会は、PDCAサイクルを回しながら、全学の改善・改革を進める重要な委員会です。年報のスタイルも今後、検討が進められようとしています。平成30年度の年報をご一読頂き、忌憚のないご意見、また、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

法人組織図



平成 30 年度 委員会等構成

委員会名	委員長	副委員長	委 員								担当	
自己点検・評価	影山	石田	吉田	関根	安部(眞)	稲垣	藤内	清末	(高橋(勝))	(衛藤)	藤内	
入試			(非 公 開)									
教育研究	藤内	濱中	吉村	川崎	杉本	森	品川	定金	(清末)	(染矢)	藤内	
研究科教育研究	稲垣	福田	梅野	小野	赤星	影山			(神崎)		稲垣	
看護学実習	藤内	影山	伊東	高野	小野	林	梅野	赤星	福田	桑野	(近藤)	藤内
学生生活支援	林	宮内	関根	田中	岩崎(香)	堀	後藤			(坂本)	(奥)	藤内
就職・進路支援	福田	杉本	小野(治)	樋口	足立	甲斐(博)					(神崎)	清末
広報・公開講座	高野	小嶋	秦	石丸	恵谷	大矢	宿利			(矢部)	(矢野)	清末
国際交流	シャーリー	甲斐(倫)	桑野	山田	恵谷	吉川	丸山			(久保)		稲垣
FD/SD	梅野	関根	安部(眞)	緒方	永松	稗田				(生野)		藤内
研究倫理・安全	市瀬	平野	石田	川崎	草野	岩崎(香)				(衛藤)		稲垣
図書	赤星	石田	定金	シャーリー				(高橋(勝))	(白川)	(工藤)	(斧田)	藤内
情報ネットワーク	甲斐(倫)	品川	恵谷	宿利	渡邊					(矢野)	(染矢)	稲垣

部門・小委員会・ワーキンググループ名	部門長・委員長・リーダー	部門員・委員・メンバー										
養護教諭養成部門	吉村	赤星	草野	佐伯	関根	伊東	小野(治)	秋本			(坂本)	
実習運営小委員会	森	川崎	後藤	吉川	山田	足立	大矢	石丸	永松	佐藤(愛)	中釜	丸山
動物実験小委員会	市瀬	影山	小嶋	定金	岩崎(香)					(衛藤)		
遺伝子組換え実験安全小委員会	濱中	平野	市瀬	甲斐(倫)								
国家試験対策小委員会	杉本	田中	中釜	佐藤(愛)	安部(眞)					(染矢)		
進級試験WG	草野	濱中	佐伯	佐藤(栄)								
大学案内/パンフWG	秦	恵谷	足立	佐藤(栄)	秋本	高野(友)						
英文Web-パンフレットWG	シャーリー	桑野	岩崎(香)	高野(友)								
20周年事業 式典部会	高野	小野	梅野	稲垣	吉田	岩崎(香)				(村嶋)		
20周年事業 記念誌部会	福田	佐伯	伊東	石田	桑野	定金	秦	田中		(村嶋)	(アドバイザー) 市瀬 甲斐	

看護研究交流センター(センター長 稲垣; 副センター長 影山)

チーム名	チームリーダー	メンバー													
地域交流チーム	影山	福田	川崎	稗田	山田	緒方	篠原	矢幡	藤内		(清末)	(高橋(勝))			
継続教育推進チーム	伊東	樋口	後藤	佐藤愛											
産学官連携推進チーム	濱中	伊東	樋口	佐藤(栄)											
NP事業推進チーム	小野	甲斐(博)	濱中	宮内	高野	草野	森	堀	中釜	吉川	藤内	大嶋	(村嶋)	(清末)	(神崎(純))
学術ジャーナルチーム	平野	定金	山田	安部(眞)	秋本	シャーリー	高野(友)			(白川)					
健康増進プロジェクトチーム	稲垣	濱中	赤星	秦	佐藤(愛)	田中	緒方	甲斐(博)	森	安部(眞)	吉川		石丸		

目次

1. 委員会等の活動	1
2. 学内行事	39
3. 教育活動	42
4. 学内セミナー	146
5. 研究・開発、事業助成、業績	147
6. 地域貢献	170
7. 国内・国外研修派遣	190
8. 役員及び審議会委員名簿	191
9. 教職員名簿	193

1 委員会等の活動

1-1 理事会

理事長 村嶋幸代

学内理事 藤内美保、稲垣敦、清末敬一郎

学外理事 門田淳一、小寺隆、高橋靖周

監事 神品實子、福田安孝

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。本年度は 5 回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項、重要な規定の制定または改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。審議後に教育研究審議会等の重要事項の報告を行った。

特記すべき報告および審議事項は以下の通りである。

- (1) 第 1 回：平成 30 年度の組織体制（新規委員会や WG の削減等）、平成 30 年度在学生および卒業生の進路状況、各種委員会規程の一部改正、未来応援基金創設等について。
- (2) 第 2 回：業務方法書の変更、平成 29 事業年度の業務実績、および決算、20 周年事業について。
- (3) 第 3 回：名誉教授の授与、平成 29 事業年度の中期目標期間に関する評価結果について。
- (4) 第 4 回：定年延長選考基準（案）の制定および基準、平成 31 年度予算編成方針、給与規定の一部改正について等が審議された。

今年度の大学評価として研究活動や研究業績に関する課題があることから、来年度も継続して自己点検・評価委員会や FD/SD 委員会の機能強化を推進し、課題解決に向け取り組むことが必要である。今後も中期計画が順調に遂行されているか継続的に審議する。

1-2 経営審議会

議長 村嶋幸代（理事長）

委員 藤内美保、稲垣敦、清末敬一郎、門田淳一、小寺隆、高橋靖周（以上理事）

竹中愛子、千野博之、松尾和行、吉松秀孝

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。平成 30 年度の法人の経営状況について報告し、審議した。

本年度は 5 回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち、法人の経営に関するもの、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規定の制定または改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、

組織及び運営の状況について自ら行う点検および評価などを審議し確定した。また、第 4 回会議では定年延長選考基準（案）の制定について審議し、基準を確定した。

大分県立である本学の役割や機能を十分に発揮できる大学運営の在り方、また運営費交付金が年々減額されていく状況のなかで、外部資金の獲得をさらに推進することを認識し、効果的・効率的な経営に関して継続的に審議する。

1-3 教育研究審議会

議長 村嶋幸代（学長）

委員 藤内美保、稲垣敦、清末敬一郎、赤星琴美、伊東朋子、市瀬孝道、梅野貴恵、小野美喜、甲斐倫明、影山隆之、桑野紀子、佐伯圭一郎、ジェラルド T シャーリー、高野政子、濱中良志、林猪都子、福田広美、吉村匠平、犀川哲典（学外委員）

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行うことである。本年度は 11 回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、学則の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規定等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会・経営審議会で報告された。

特記すべき審議事項は以下の通りである。第 1 回は、新規委員会等の立ち上げにより各種委員会規程の一部改正、大学院特待生授業料免除評価結果、平成 30 年度臨床教授、平成 29 年度理事・入試改革 TG 合同会議の報告等について。第 2 回は、競争的研究費の採択結果、大学入試共通テストに伴う入学者選抜の変更、大学院指導教員等について。第 3 回は、業務方法書の変更、平成 29 事業年度の実績報告、留年生における上級学年科目の履修登録、期限付き雇用職員の無期転換ルール適用、20 周年記念事業について。第 4 回は、名誉教授の選考、学部・大学院の履修規程に付随する様式変更、第 5 回は、平成 30 年度授業料減免。第 6 回は、卒論日程・研究室配置、次年度の学年歴、議事録作成・保管手引き、目的積立金の採択について。第 7 回は、就職推薦書交付内規、卒論生の優秀賞の審査規定、国内派遣について。第 8 回は、ハラスメント防止等の規程、職員給与規程の一部改正、中期決算概要、平成 31 年度予算編成方針、理事長裁量予算枠、院生のコース変更について。第 9 回は、研究の倫理・安全に関する指針改正案、科目等履修生・学部大学院研究科研究生の募集、修士論文審査員、平成 30 年度計画の実施状況と平成 31 年度計画の策定について。第 10 回は、養護教諭養成課程再課程認定に伴う学則別表の変更、学部表彰、ハラスメント防止・対策委員会、勤務実態調査、防災訓練について。第 11 回は、教員の承認、入学者選抜の変更、ハラスメントの防止に関する規定、31 年度年度計画案や予算案について。

次年度も、今年度新たに創設された委員会を含め、各委員会や WG が連携しつつ、大学全体として PDCA サイクルが有効に機能し、円滑な運営がされているか、現状を確認・共有し、改革・改善していく。

1-4 教授会

学長 村嶋幸代

学部長 藤内美保

委員 稲垣敦、市瀬孝道、梅野貴恵、小野美喜、甲斐倫明、影山隆之、佐伯圭一郎、ジェラルド T シャーリー、高野政子、濱中良志、林猪都子、福田広美、赤星琴美、安部眞佐子、石田佳代子、伊東朋子、小嶋光明、川崎涼子、草野淳子、桑野紀子、品川佳満、杉本圭以子、関根剛、平野互、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平、秦さと子、岩崎香子、定金香里、清末敬一郎

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行うことである。

本年度は4回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定、および学生の表彰に関する事項について審議・承認した。平成30年度入学生は83名、卒業生は78名であった。教授会は今後も入学、卒業に関して厳正に審議し、今後も優秀な学生の確保に向けて努力する。これまでの学長賞、卒業研究の優秀賞、学生賞の表彰に加え、今年度は在学途中で表彰する奨励賞を新たに表彰対象とし、2年次後期の進級試験で上位の成績であった学生が表彰された。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

1-5 研究科委員会

学長 村嶋幸代

研究科長 稲垣敦

委員 藤内美保、市瀬孝道、梅野貴恵、小野美喜、甲斐倫明、影山隆之、佐伯圭一郎、ジェラルド T シャーリー、高野政子、濱中良志、林猪都子、福田広美、赤星琴美、安部眞佐子、石田佳代子、伊東朋子、小嶋光明、川崎涼子、草野淳子、桑野紀子、品川佳満、杉本圭以子、関根剛、平野互、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平、秦さと子、岩崎香子、定金香里、清末敬一郎

本委員会は、大学院の教育課程の編成、学生の入学、修了等の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行う。本年度は4回開催し、入学試験の合否判定・進学判定を行った他、修了判定等について審議し、課程修了者の修了を認定した。今年度は表彰および懲戒の審議はなかった。

1-6 自己点検・評価委員会

委員長 影山隆之

副委員長 石田佳代子

委員 稲垣敦、藤内美保、安部眞佐子、関根剛、吉田成一、清末敬一朗、高橋勝三、衛藤美樹子

自己点検・評価委員会は、本学の教育研究水準の向上を図り、かつ本学の目的及び社会的使命を達成するため、大学の自己点検・自己評価に関すること、内部質保証に関すること、年報の編集・発行に関すること、本学の中期目標・中期計画に関すること、および認証評価その他の第三者評価に関することを分掌している。今年度から委員会等の改組に伴い、自己評価委員会から自己点検・評価委員会と改称され、FD/SD に関することは FD/SD 委員会の分掌となった。また、従来の規程ではハラスメント委員会に自己評価委員会をあてることとなっていたので、今年度は過渡的に本委員会がハラスメントに関することを分掌したが、次年度から独立した新委員会の分掌となる。

1) 大学の中期目標・中期計画

平成 29 年度計画の実績報告を取りまとめた。これに対する外部評価の結果を検討し、平成 29 年度中に立てた平成 30 年度計画について、外部評価に基づき修正すべき点はないことを確認した。

平成 30 年度計画の実績報告について、年度内に各種委員会等からの資料収集を開始した。平成 31 年度計画について、各種委員会等の計画を取りまとめる作業を行った。

2) その他の自己点検・評価

平成 29 年度年報を編集し、公開した。平成 30 年度年報の原稿収集を年度中に開始した。次年度以降の年報編集のために電子システムを導入する可能性について検討し、システムの仕様を情報ネットワーク委員会に提案して検討を依頼した。次年度以降の年報の構成が、大学の認証評価に際して活用しやすくなるよう、構成の再検討作業に着手した。

内規である「議事録作成の手引」を改定するとともに、議事録の整備状況を随時確認し、必要に応じて修正を依頼した。

前年度の自己評価委員会では学内規程や委員会分掌等に関する意見・提案を学内の教職員から取りまとめ、項目を整理して理事会に提出したが、これを対応する委員会等に振り分けて検討を依頼した。これへの対応状況については、今年度の年報において記載報告するよう要請した。

地方自治法の改正に伴い公立大学法人大分県立看護科学大学業務方法書の改正が必要となったので、段階的に作業を進め、その一部と関連規程の改正・制定を行った。

3) ハラスメント防止

ハラスメント対策の体制を維持するとともに、ハラスメント相談員の研修会を開催した。本年度の相談員への相談件数は 0 件であった。他大学等のハラスメント防止委員会等に関する規程について情報を収集し、本学規程の改定のために検討を行った。最終的に教育研究審議会において、ハラスメント委員会を当委員会とは独立した委員会として設置することとなった。

次年度の課題として、年報の構成と原稿収集方法を見直し次の認証評価で活用しやすくすることと、年報編集を含む作業の円滑化がある。

1-7 入試委員会

構成員は非公開としている。

入試委員会は、学部の入学者選抜を分掌し、平成 31 年度入学者選抜について大学入試センター試験の実施を含めて統括するとともに、入試関連の広報及び今後の入学者選抜の変更について検討した。大学院入試に関しては、本年度実施分より研究科教育研究委員会の分掌となった。

1) 入試関連の広報活動

広報委員会とも協力して、入学試験に関する広報活動を行った。16 会場で業者主催の進学説明会に参加し、高校生や保護者 426 名の相談を受けた。また 6 月 8 日に、本学において県内高校の進路指導担当者等を対象とした進学説明会を開催し、来場者は 36 名であった。これら以外に、若葉祭及びオープンキャンパスにおいて進学相談コーナーを開設した。

2) 大学入試センター試験の実施

大学入試センター試験（1 月 19、20 日）の本学会場ではトラブルなく試験を実施した。これに先立ち、大学入試センター主催の入試担当者連絡協議会（第 1 回 8 月 31 日、第 2 回 12 月 11 日）、全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（5 月 24～26 日）の他、大学入学者選抜・教務関連事項連絡協議会（6 月 29 日）、公大協主催の入学者選抜に関する研究会（6 月 4 日）に入試委員を派遣した。

また、平成 32 年度からの大学入学共通テスト導入に向けた試行調査（プレテスト）を本学でも 11 月 10 日に実施した。

3) 平成 31 年度入学者選抜

別項（3 教育活動 3-1 平成 31 年度入学者選抜状況）に整理したとおり、平成 31 年度入学者選抜を実施した。入学者選抜に関しては、トラブルなく実施できた。志願者数については、特別入試（推薦）において昨年度より 17 名の減少がみられたが、前期日程においては 65 名の増加、後期日程においては 12 名の増加であった。

4) 2021 年度入学者選抜の変更

前年度の入試改革タスクグループ報告書などをもとに検討を重ね、2021 年度入学者選抜の変更について審議した。特に、学力の 3 要素（「知識・技能」「思考力・判断力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」）について、主体性等をこれまで以上に適切に評価できるよう変更について検討した。決定事項については、「2021 年度大分県立看護科学大学入学者選抜の変更について（予告）」の第一報を 7 月に公開し、3 月末には第二報を公開した。

今後も大学入試センター試験を含む試験の円滑な実施を行うためのチェックを継続するとともに、効果的な入試広報の進め方を検討する。また、2021 年度入試の変更に関して、広報や問合せへの対応を適切に進める必要がある。

1-8 教育研究委員会

委員長 藤内美保

副委員長 濱中良志

委員 川崎涼子、定金香里、品川佳満、杉本圭以子、森加苗愛、吉村匠平、清末敬一朗、染矢哲朗

本委員会は学部学生の教育と教員の研究を効果的かつ円滑に行うために教育・研究関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度も例年通り、毎月（8月除く）定例及び臨時の委員会を計12回開催した。

- 1) 現行のカリキュラムで行われている教育内容について、全研究室および非常勤講師による科目の教育内容を、文部科学省の看護教育モデル・コアカリキュラムの学習目標、日本看護系大学協議会のコアコンピテンシー、国家試験の必修問題などと照らし合わせて、現状認識及び課題などの洗い出しを行った。
- 2) ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、学習成果の評価方法をカリキュラムマップとして作成、可視化し、ホームページにアップすることとした。
- 3) 来年度に向け、教務システムの変更に伴い、従来の紙媒体のシラバスからペーパーレス化を図った。授業紹介はパソコンやスマートフォンから閲覧できる。授業紹介以外の部分は学生便覧と統合し、学生の利便性を図るよう配慮した。
- 4) 努力した学生を認める環境づくり、学生個々が切磋琢磨する環境整備を目指し、卒業生のみならず、在学中の学生にも拡大することとした。
- 5) 成績評価の分布については、4月に平成29年度の科目別評価分布、11月に前期科目の成績分布を学内に公表した。
- 6) 実習運営小委員会は、看護技術習得のための将来構想の検討を行い、入学当初からeラーニングを活用し段階的習得ができるよう科目やその位置づけを検討し、次期カリキュラム改正構築の基盤を固めている。また実習マニュアルの見直しを行い、改善した。さらに、実習センターの寝具の廃棄や実習施設控室のプリンターやWi-Fi環境などの整備を図った。
- 7) 養護教諭養成部門は、教育を開始し4年目を迎え就職活動の支援を積極的に行った。養護教諭実習は継続可能で運営が円滑にできるよう母校実習が可能となる変更をした。再課程認定のための準備、手続きを行い、教育科目の一部を改正した。
- 8) 国家試験対策は、模試や補講の方法を新たに改善した。また卒業研究発表後に昨年度国家試験を受験した大学院生の体験談の時間を設け、模試情報を共有し、大学で勉強するよう各研究室に声かけをした。
- 9) 進級試験は、基本的かつ重要な知識を2年次生で習得するという本来の目的を達成できる方法に見直し、継続している。教員全員が出題することで2年次生に応じた難易度とし、プール問題を確保している。本試験での合格率は86.4%、再試験では100%が合格した。
- 10) 卒業研究は、79名が卒業研究論文、要旨、発表用スライドを全て提出し、12月5日、6日の卒業研究発表会で全員がプレゼンテーションした。卒論発表SGを本委員会メンバーとし、座長や教員による担当質問割り当ての廃止、要旨集の配布方法など効果的・効率的な運営を図った。また、

卒業研究の評価方法、要旨、卒業論文、発表スライドの提出、及びプレゼンテーションによる教員評価から、最も密接に関わり教育支援している指導教員の評価に切り替えるよう検討した。全研究室の原書講読の実態を調査した。卒業式に表彰する優秀賞の在り方について検討した。評価方法の検討および卒業研究優秀賞の名称変更など次年度から改めることとした。

- 11) 総合人間学は、教職員から講師を募集し、8名の講師とテーマを決定した。学生には好評であった。COC+による他大学学生の単位互換制度を導入し Web 受講を可能にしている。講堂から講義室での開催に変更し、SG 担当人数を減らした。
- 12) 平成 30 年度のディプロマポリシーの到達度アンケート、カリキュラムポリシーに関する成果アンケートを実施し、2 年次生と 4 年次生に実施した。昨年度は 4 年次生の回収率が低かったため、調査時期を 1 月に変更し実施した。

今年度は、現行のカリキュラムの教育内容の実態を調査し、今後のカリキュラム改正に向けての現状認識や課題の洗い出しを行った。また、委員内の担当ごとに主体的な学生の育成や教育改革のための方法の見直しを積極的に推進するとともに、効率化も図るようにした。

次年度は、学生の主体的な学習を支援するため更なる環境整備をし、2022 年度の改正カリキュラム検討のための基盤づくりをする。

1-8 1) 養護教諭養成部門

部門長 吉村匠平

副部門長 伊東朋子

委員 赤星琴美、秋本慶子、小野治子、草野淳子、佐伯圭一郎、坂本晴生、関根剛

養護教諭養成課程の運営を担当した。本年度、文部科学省による再課程認定を受けた。その他の活動は以下の通り。平成 27、28、29 年度入学の履修者を対象にした履修カルテ面談、図書整備（学術誌、雑誌、図書）、新入学生全員を対象としたガイダンス、オープンキャンパスでの高校生（保護者）対象の相談会、非常勤講師の時間割（教科書）調整及び土日講義対応、実習校選定業務（大分市教育委員会と連携）、実習校の巡回指導（養護実習Ⅰ、Ⅱ）、平成 29 年度入学者対象の養護実習Ⅰ履修者選考、大学パンフレットへの関連情報の掲載、学年進行に伴う新規開講科目「教職実践演習（養護教諭）の開講、平成 29 年度入学者から開始する大分県内者（大分市の学生を除く）対象の母校実習の開始に伴う教育委員会との連絡調整、大分県採用試験のガイダンス（5 月、12 月）の開催、教員採用試験二次対策講座（実技、場面指導）、九重町での養護実習の実施に向けた九重町教育委員会との協議、教員採用試験一次対策、採用試験終了後の就職支援、私立高校求人情報の提供、教員免許の一括申請である。

平成 27 年度入学生は、12 名が養護教諭一種の免許状を取得した。教員採用試験の受験者は 9 名、一次試験合格者は 2 名、二次試験合格者は 1 名、3 次試験合格者 0 名であった。12 名の進路は、私立高校養護教諭 1 名、大分県非常勤講師 5 名、大学院進学者 3 名、医療機関就職者 3 名。教員就職

率は、66.7%、教員として勤務する卒業生の大分県内就職率は100%であった。

本年度の課題であった再課程認定業務は滞りなく終了した、養護実習Ⅱの運営に関しても、大分市教育委員会、大分県教育委員会、実習校との連携の下、順調に進めることができた。

平成31年度の課題は、実習校の安定確保に向け、母校実習、県内過疎地域での実習、大分市教育委員会と連携しての大分市内での実習、を軌道に乗せること、教員採用試験一次試験、二次試験に向けた学習環境を整備すること、学習指導要領の改訂に伴う必要図書の更新を進めることである。

1-8 2) 実習運営小委員会

委員長 森加苗愛

委員 足立綾、石丸智子、大矢七瀬、川崎涼子、後藤成人、佐藤愛、中釜英里佳、永松いずみ、丸山加菜、山田貴子、吉川加奈子

本委員会は学生の実習に関わる教育を効果的かつ円滑に行うため、演習の運営や実習環境の調整を担う委員会である。本年度の会議は、毎月（8月除く）の定例委員会を計11回（うち、1回はメール会議）開催した。

本委員会の主な役割と本年度の活動は以下8点である。

1) 看護技術修得プログラムの運営

1年次から4年次までを通じ、学生が段階的に看護実践力を修得できるように、看護技術修得プログラムを企画・運営・評価した。今年度はすべての段階の演習内容を見直し、学生が効果的に学ぶことができ、かつ教員の教育活動を考慮し検討していった。第2段階看護技術演習（3年次前期）および第1段階看護技術演習（2年次後期）では、学生が実技演習前に主体的に準備し学ぶことができるようにワークノートを準備し、技術の根拠や手順を自ら思考することができるようにした。また、事例は内容を洗練させて統合した。評価は3～4人でグループを組み、公平に選出した1名が実践してグループ評価とした。評価も＜技術項目＞だけではなく＜全体的取り組み＞を鑑みて合否判定を行うこととした。学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できたと考える。しかし、第1段階看護技術演習では、グループで1名が実践してグループ評価となることに不公平感を感じることや、教員により評価の厳しさが異なるとの意見があがった。オリエンテーションの工夫や教員間での検討など今後の課題としたい。

第3段階看護技術演習（4年次前期）では、学生が主体的・計画的にかつ繰り返し学習する環境の提供としてeラーニングを行い、知識の習得やレポートを通して看護技術の習得を目指すことができた。

第4段階看護技術演習（4年次後期）では、今年度の技術は採血と蘇生法とし、大分赤十字病院の看護師の方の来学により指導を受けた。学生からは臨床で勤務する看護師に直接指導を受けたことによる自信につながる肯定的な意見を多数得た。

今後は、第1段階・第2段階看護技術演習に関しては、昨年度の変更による課題、即ち1名のチェックによるグループ評価の心理的負担感への配慮、教員への指導姿勢の確認・共有などの対策を

検討し、更に評価を行っていく。第4段階では臨床看護師との交流のメリットを考慮し、時期や内容について引き続き検討を行っていくことが必要である。

2) 看護スキルアップ演習の運営

看護スキルアップ演習(4年次後期)は今年度から本委員会が運営することとなった。本演習の実施期間が第4段階実習期間であり、教員の指導体制を工夫する必要があったため、内容を洗練させ事例数を5事例に減らし取り組んだ。看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を統合し、アセスメント能力および看護技術実践能力を養うことをねらいとして事例をとおしてロールプレイを行い、学生の学びと教職員の指導とが円滑に展開されるよう準備・調整・展開した。

実施後の学生からのアンケートでは、ロールプレイ後のディスカッションの充実や教員からの多くの講評を求める声があげられた。本演習の実施時期として、教員の指導体制や参加が難しくなる時期であるが、人間科学系の教員にも指導や講評において協力を依頼し、更に充実した運営を検討することが課題である。

3) 実習関連マニュアルの内容検討および整備

(1) 看護技術習得確認シート

平成30年度の4年次生を対象とした自記式回答のアンケート調査を行った(回答者55名、回収率68.7%)。「AA(必須)」46項目のうち、「単独で実施できる」と8割以上の学生が自己評価した項目数は、35項目(平成29年度は37項目)であった。「A」54項目のうち、「単独で実施できる」と8割以上の学生が自己評価した項目数は、3項目であった。自由記述欄：技術的には「一人で実施できるが、実習では見守りが必要であるため、A・Bの判断がしにくい」との意見があった。本アンケートは学生の自己評価で行っており、正確な看護技術修得確認にならないのではとの意見があり、今後の評価の在り方を将来構想検討においても検討中である。来年度は自記式アンケートではなく、本シートを集計し、看護技術修得状況を確認していく。

(2) 実習ガイドブック

学生の実習記録の保管における注意事項として、Googleドライブの活用上の注意点を検討し方向性をまとめた。また、実習中の感染症の疑いのある際の受診における基本姿勢など、実習ガイドブックに追記すべく項目を検討した。実習マニュアルは昨年度、新しく印刷したばかりであるため、本年度は新たに印刷しなおすのではなく、差し込みの冊子を作製した。学生に説明を行い周知していく。

4) 実習センターおよび各実習施設の環境整備

学生が効果的に看護実践に関する学習ができるように、臨地実習における環境整備を行った。主な点として、大分赤十字病院にポケットWi-Fiを導入し、教員の連絡環境の充実を図った。その他カラープリンターの配置やロッカーの交換等、必要に応じて環境を整えた。引き続き整備を行っていく。今後主な点として、緊急時に備え、実習中の教員の携帯電話の整備の検討が必要であるが、必要台数など来年度引き続き検討していく。

5) 実習関連予算管理

必要に応じて担当者が経費を申請し対応した。298万円の予算のもと活動し3月までに約297万円の支出があった。来年からは、多額の費用が必要な物品の購入等は可能な限り計画的に購入するよう各研究室に連絡し、計画的に支出できるようにしていく。実習室のベッドや医療機器の老朽化によ

る買い替えにより、数年のうちに高額な支出を要する研究室が存在することが確認された。急に高額な支出を申請することにならないよう、教材の買い替えなどは、今後計画的に購入していくことが議論され、小委員会委員が担当することとなった。

6) 実習関連フォルダの管理

今年度は、学生の実習記録の保管における注意事項として、Google ドライブの活用上の注意について検討してきた。来年度はその評価を行っていく必要がある。

7) 実習服、ファイル等の注文・管理

実習服、ファイルや必要物品の注文・管理を担当者が行ってきた。今年度も学生の演習や実習で必要な物を検討して備え、管理していく。

8) 看護技術演習 将来構想検討

2022年のカリキュラム改正に向けて、本委員会が担当する看護技術演習やスキルアップ演習の運営の目的・目標や運営方法のあり方を検討してきた。現在までに看護技術演習は大きく2段階で構成し、e-ラーニングと看護技術習得確認シートを効果的にリンクさせた教育システムについて検討を重ねている。

現在活用しているナーシングスキルを活用し、将来各技術項目の知識習得状況を、4年間で修得時期を定め段階的・繰り返し学習するシステムを検討している。4年間を通し、ナーシングスキルを活用したe-ラーニングを行い、その学年で学んだ技術の知識を再学習してもらうことが目的である。本システムは看護技術習得確認シートを効果的にリンクさせ、看護技術修得の適切な評価にもつながられるように検討を行っている。来年度も引き続き検討を行っていく。

以上の活動をふまえ、今後の課題を以下にまとめる。なお、本委員会は教育研究委員会の下部組織であり、活動内容や来年度の課題に関しては教育研究委員会に報告・審議を行いつつ進めていく。

- (1) 第1段階・第2段階看護技術演習は、方法論として1名のチェックによるグループ評価の学生の心理的負担感への配慮、教員への指導姿勢の確認・共有などの対策を検討し、更に評価を行っていく。第4段階では臨床看護師との交流のメリットを鑑み、時期や内容について引き続き検討を行っていく。
- (2) 看護スキルアップ演習においては、ロールプレイ後の学生間のディスカッションや教員の講評を充実できる体制を検討する。本演習の実施時期として、教員の指導体制や参加が難しくなる時期であるため、人間科学系の教員にも指導や講評において協力を依頼し、更に充実した運営を検討する。
- (3) 実習関連マニュアルにおいては、看護技術習得確認シートの評価アンケートが学生の真の看護技術修得状況を評価できるものとなるよう検討していく。実習マニュアルにおいては、学生の実習記録の保管における注意事項であるGoogleドライブの活用状況について評価を行っていく。
- (4) 実習に関する環境整備については、引き続き担当者が実習環境の整備について観察し適宜対応していく。実習携帯の導入に関しても引き続き検討していく。
- (5) 実習関連予算については、特に多額の予算は計画的に支出していけるように研究室に計画を立てるように周知を行っていく。

- (6) 看護技術演習将来構想検討に関しては、2022年のカリキュラム改正に向け、引き続き検討を行っていく。

1-8 3) 国家試験対策小委員会

委員長 杉本圭以子

委員 安部真紀、佐藤愛、田中佳子、中釜英里佳、染矢哲朗

学生委員と連携して業者模試を7回、学内模試を2回実施した。模試結果は各研究室に情報共有し、指導を求めた。さらに夏休み前と冬の直前期に集中的に学習できるよう各領域の教員に依頼し補習を実施した。他に国家試験ガイダンス2回、今年新たに外部講師による傾向と対策セミナーを7月に実施し、学生の国試対策への動機づけを促した。2019年3月に発表された合格率は、全国（新卒）の94.7%に対し、本学は97.4%であった。

次年度の課題は、学生の国試対策への主体的な学習をさらに支援するため、国試の傾向と対策についての情報提供や動機づけの方法を検討し実施する。

1-8 4) 進級試験ワーキンググループ

リーダー 草野淳子

メンバー 濱中良志、佐伯圭一郎、佐藤栄治

進級試験ワーキンググループの役割は、進級試験問題作成と、学生への周知、進級試験の実施を行うことである。6月5日に2年生を対象に進級試験の目的、概要、出題範囲の説明を行った。7月末に教員へ本試験・再試験の進級試験問題の作成を依頼した。その後、WG内で問題の検討、推敲を行った。2月26日に2年次生を対象に本試験を行い、合格率は86.4%であった。再試験を3月5日に行い、全員合格となった。

現在、本試験問題約400問、再試験問題約400問が集まっている。プール問題数トータル1500問を目指して、問題作成を教員に依頼し、進級試験を実施していく。

1-9 研究科教育研究委員会

委員長 稲垣敦

副委員長 福田広美

委員 影山隆之、小野美喜、赤星琴美、梅野貴恵、神崎正太

本委員会の任務は、大学院研究科の運営および計画に関する事項について審議することである。本年度は委員会を12回開催した。審議及び実施結果は以下の通りである。

- (1) 指導教員の決定及び変更について審議した。
- (2) TAの雇用に関して審議した。
- (3) 大学院生オリエンテーションを開催した。
- (4) 新入生の既習得単位を認定した。
- (5) 新入生の指導教員決定を支援し、進捗状況を調査した。
- (6) 長期履修の新規申請者の審査を行った。
- (7) アドミッションポリシーを満たす学生を入学させるため、また、入試及び教育を関連づけて改善してゆくため、これまで入試委員会が実施していた大学院入試を当委員会の分掌事項とし、問題内容、面接の評価基準を変更し、実施方法を効率化した。
- (8) 3年次生対象の就職・進学ガイダンスで大学院進学について説明した。
- (9) 日本学生支援機構大学院奨学金推薦者選考審査を実施した。
- (10) 大学院説明会のチラシを作成・郵送し、本学で開催した。
- (11) 今年度から導入された本学4年次生対象の大学院博士課程(前期)特別選抜(助産及び広域コース)を実施した。また、合否判定の基準についてシミュレーションをして再検討した。
- (12) 大学院博士課程(後期)進学審査の審査員を推挙し、審査を実施した。
- (13) 入学試験と二次試験(2月2日)の募集要項を作成・郵送し、受験資格等の問い合わせに対応し、問題や面接・口頭試問要領、実施要領を作成し、試験監督・採点・集計・合否判定案作成を担当した。
- (14) 研究中間報告会(8月29日)、研究計画報告会(8月31日)を開催した。
- (15) 今後の留学生の受け入れについて検討し、不足している英文書類を調査した。
- (16) 大学院博士課程(後期)に在籍するインドネシアからの留学生が博士(看護学)を取得したので、修了式を実施した。
- (17) 博士論文提出要領及び要件を検討した。
- (18) 大学院生の研究費の用途について検討し、学会年会費にも使用できるようにした。
- (19) 大学院の広報の強化策として「3年次生が助産学・広域看護学コースの大学院生と語る会」を本学で開催し、広域希望者5名、助産希望者3名、広域・助産希望者2名の計10名が参加した(12月17日)。
- (20) 提出された修士論文1篇の審査委員を推挙し、教育研究審議会に諮った。
- (21) 平成31年度計画や平成30年度計画実施状況の草案を執筆・検討した。
- (22) 大学院特待生授業料減免審査の審査委員を推挙し、審査を実施した。

- (23) 学部シラバスの電子化に伴い、次年度の大学院シラバスの授業内容の部分を電子化することとし、その他の部分を大学院学生便覧と名称変更して配付することとした。
- (24) 学部入試個別試験の総合問題解答の Web 公開に伴い、大学院入試についても検討し、過去問題に解答例を添付することとした。
- (25) 日本学生支援機構大学院第一種奨学金返還免除候補者選考の審査委員を推挙し、審査を実施した(2月15日)。
- (26) 論文レビュー報告会(3月7日)、研究成果報告会(3月6日、NPコースは1月10日)を開催した。昨年度の課題に答える形で、今年の実績報告会は、発表7分、質疑応答3分とし、一会場ですべて実施した。
- (27) 平成30年度の臨床教授を選考し、また、次年度から臨床准教授や臨床講師の称号も積極的に与えることとした。
- (28) 教員の負荷の軽減及び指導の質を維持するため、修士課程の主旨導教員の担当数の上限を3名までとした。
- (29) 非常勤講師の講義の中で、他の専攻の学生が聴講する価値があると考えられる講義をリストアップして学生や教職員に配付し、次年度から関心のある学生が聴講できるようにした。
- (30) 語学の授業は運用上、能力別に開講することとした。
- (31) 昨年度の課題に答える形で、健康科学専攻の受験生確保のために、大分県の理学療法士協会、作業療法士協会、薬剤師会、栄養士会、柔道整復師会、鍼灸マッサージ師会等の理事、関連する専門学校の校長や教員への広報活動を行った。
- (32) 学生の休学、復学、指導教員の変更などの手続きや管理を行い、委員会や教育研究審議会に諮った。
- (33) 平成31年度入学者選抜は、別項(3教育活動 3-2 大学院看護学研究科博士課程(前期)入学試験状況、3-3 平成31年度大学院看護学研究科博士課程(後期)入学試験状況)に整理したとおりに実施した。入学者選抜に関しては、トラブルなく実施できた。志願者数については、博士課程(前期)において昨年度より2名の増、博士課程(後期)においては3名の減であった(2次募集を除く)。新たに実施した特別選抜は1名であった。

次年度は、以下の点に取り組んでいく予定である。

- (1) 受験生確保のための広報戦略を強化する。
- (2) 新たに開始した特別選抜や変更した入学試験の方法について評価・改善する。
- (3) 学位論文の審査の方法や提出要領について検討する。
- (4) 長期履修や休学の制度について検討する。

1-10 看護学実習委員会

委員長 藤内美保

副委員長 影山隆之

委員 赤星琴美、伊東朋子、梅野貴恵、小野美喜、桑野紀子、近藤亜矢、高野政子、林猪都子、
福田広美

本委員会は学部学生および大学院生の実習に関する教育を効果的かつ円滑に行うための活動を行うため、本年度から新規に立ち上げた委員会である。本年度の会議は、毎月（8月除く）の定例委員会の計11回を開催した。

- 1) 新規委員会のため、平成30年度の中期計画の確認、予算関連、分掌事項と担当者、本年度の実施計画について決定した。また、立ち上げ当初4月にアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーと学部実習の内容に関連した学生の能力の積み上げの検討に関する本委員会の当面の重要なミッションについて確認した。
- 2) 第1段階～第6段階の12科目の実習の実習要項の一貫性を図るため、表紙、見出し、項目の記載や順序性を検討し統一化を図った。
- 3) 実習指導者・大学教員交流会を平成23年度から開催しており、今年度から本委員会の分掌事項とした。8月に実習施設3ヶ所の実習施設の看護責任者、臨床指導者と教員で交流し、「カンファレンス」をテーマに研修およびディスカッションを行った。参加者は実習施設3ヶ所から37名、大学教員20名の計57名で、アンケート調査の結果、参加の満足度が高かった。
- 4) 県立病院で実施している実習指導者短期教育プログラムを今年度も4回シリーズで開催し、指導案作成を含む講義を行った。大分県看護協会も同様の講習会を設けたいとの意向があり、次年度大分市と日田市において本学教員を派遣することが定した。
- 5) 基礎・成老実習室Ⅱに設置していた階段椅子の撤去希望が基礎看護学研究室より出され、全学の承認を得て、撤去することとした。
- 6) 次年度の実習日程について、老年看護学実習を従来の5月から9月～11月の専門実習の期間に組み込みたいという希望があり、老年看護学実習も4段階実習であるため成人、老年、小児、母性、精神の実習と同様の期間に組み込むこととした。
- 7) 実習指導体制について担当教員の意見を参考にして検討するため、看護系教員全員にアンケート調査を行った。当該講座（または研究室）のみで実習運営できるかの可能性も含めて各講座で検討したが、次年度は従来通りの体制となり、2022年度の改正カリキュラムにむけて実習段階や単位数、実習目的・目標を検討し、それに応じて指導体制を検討することとなった。成人老年看護学研究室は、次年度から当該研究室のみで実習指導する要望があったものの従来通りの体制の変更願いが出され、次年度は従来通りを基本とすることと決定した。また、総合看護学実習の専任教員数を減らし、担当教員数を増加する提案をし、看護系全体会議で検討した。次年度は従来通りの体制としたが、次年度は実習運営小委員会との合同運営とすることとした。次年度の実習担当教員配置は、担当教員の希望聴取及び研究室での確認を行い、教員配置を決定した。12月に行っている看護アセスメント学実習について、教員の負担等から2月の変更の要望もあったが、カリキュラ

ム改正時にもない検討することとし、現行通りとした。

- 8) 自己点検・評価委員会からの改善・修正を要する検討事項および看護系教員のアンケート結果について、カリキュラム改正に伴う検討事項、次年度検討事項、FD/SD 委員会検討事項に区分して、今後継続検討することとした。
- 9) シラバスに記載されている 4 段階の実習の単位認定について、12 週間を乗り越える力や 2 週間の 1 科目の実習のみの学習効果を考慮し、留年生は 5 科目全てを履修することとしていたが、近年の社会的背景を考慮し独立した単位認定にすることとした。
- 10) 第 1～6 段階実習の目的・目標について、カリキュラム上、学生の能力を積み上げるような実習となっているか、文部科学省の看護学教育モデル・コアカリキュラムの学習目標などを参考にし、過不足はないかなどを評価し課題を洗いだした。

今年度は、新たな委員会としての立ち上げで検討すべき課題が多く、実習体制に関する意見収集、また実習要項の形式や内容の見直しを行った。

次年度は、実習指導体制については、さらに担当教員の意見が反映できるよう透明化を図る。また、2022 年度の改正カリキュラム施行に向けて、実習の学修の在り方を検討し推進を図る。

1-11 学生生活支援委員会

委員長 林猪都子

副委員長 宮内信治

委員 関根剛、岩崎香子、堀裕子、田中佳子、後藤成人、奥梢（1月31日まで）、今村知子（2月1日から）、坂本晴生

学生の大学生生活を充実させるための環境整備をする、学生に必要とされる支援を適宜、提供することを目標に下記の活動を展開した。

学生関連イベントの企画・運営は、全学生オリエンテーション（4月9日）、新入生オリエンテーション（4月10日、4月11日）、コンタクトグループ（4月9日）、全学スポーツ交流会（4月20日）（ドッジビー、全学生・教職員への実況中継）、キャンパスクリーンデー（5月16日）、DV講演会（5月31日）を企画し実施した。新入生オリエンテーションは内容を充実させて実施し、全体として「よかった」「まあよかった」と回答したのは 72.0%、親睦レクリエーションでは 86.6%であった。

学生相談は、各学年担任を中心に学生相談業務を行った。内容は相談（一般相談、対人関係、ハラスメントなどを含む）、学習相談（単位取得、進級に関するもの、成績不振者に面接、1年次の入学直後に既習科目・状況調査、前期前半終了時に学習状況調査を実施、1年次生に対する学習相談の企画、休退学・復学相談と面談（保護者面談を含む）、過年度、休学中の学生支援などを行った。

学生の自主活動への支援は、サークル活動支援、若葉祭における学生支援全般、自治会活動支援などを行った。経済支援は、奨学金による経済支援（日本学生支援機構の奨学金支給など）、奨学金情

報の収集、周知活動などを行った。ホームページに奨学金情報を整理して掲載した。また、若葉祭は20周年記念事業の一環として昨年度から学生と一緒に取り組んで実施し、その後、学生が主体的に取り組めるように支援した。

健康支援は、学生の健康管理支援（集団健康診断、風疹抗体検査（3年次生一部）、個別相談）、学生の保険関係の支援（加入手続き事務、退学・休学者の返還・追加、事故・疾病による入院、退院の補償請求に関する支援など）について保健室看護師を中心に行った。保健室の学生相談件数は734件で、そのうちメンタルヘルスによる学生相談件数は105件であり、メンタルヘルス事例に対応した学生支援が今年度から可能となり、コンサルテーションを医師からは年0件、カウンセラーからは年27件（今年度新規6件）実施した。保健室の活動についてはネット内に保健室年報と保健室活動報告を提示し教職員に周知した。

交通安全の推進については、交通安全指導の実施（自動車講習会4月26日・自動二輪実技講習会7月7日）、通学許可面接（通学許可交付面接、交通事故対応の指導）、学生が被害・加害者となった場合の交通事故対応、駐車場管理（許可シールの交付、無許可利用者・違反者への対応）などを行った。今年度は自動車講習会欠席者のための視覚教材DVDを購入し、終了後欠席者に対応した。

学生生活に関する調査については、学生生活実態調査（質問紙作成、実施、集計、報告書の作成、公開）について実施した。学生生活実態調査の自由コメントについては各部署、担当委員会ごとに整理し、それぞれに対応を検討することを依頼した。また、調査結果について検討し、犯罪被害やアカハラ・セクハラ被害に遭遇した時の相談窓口を学生に周知することとした。

その他、新人教員オリエンテーション（4月3日）、九州地区公立学生部長会議（9月14日）、20周年記念事業（9月15日）を実施した。

学生消防応援隊の活動と位置づけについて、学生生活支援委員会と担当者、学生消防応援隊リーダー、自治会長で話し合いを持った。位置づけは学生生活支援委員会であり、予算については別予算から支援されることとなった。

スポーツ交流会は、次年度、学生主催で実施することを検討したが、学生アンケートの結果と学生自治会の決定により実施しないこととなった。今後も学生の要望に合わせた対応を検討していく必要がある。自治会に対して予算案の作成や予算配分などの指導を行った。今後も自治会が自立してできるように支援していく。保健室の機能強化として、保健室看護師を臨時職員とし、保健室の業務や安全対策のために人数や設置場所の検討を行った。これは次年度も継続課題として検討していく。また、カウンセラーの相談回数は27件と活用が不十分なので、次年度はより活用できるようにしていく。

1-12 就職・進路支援委員会

委員長 福田広美

副委員長 杉本圭以子

委員 足立綾、小野治子、甲斐博美、樋口幸、神崎正太、清末敬一朗

就職支援委員会は、学部生の就職・進学に関わることや就職広報及び就職後のフォローアップ、Uターン支援に関することを主たる分掌事項としている。学生の就職・進学の円滑化と県内就職率 50%を目指して、就職・進学活動を支援し年間計画に沿って以下に示す 1)~7)の活動を行った。昨年に引き続き、就職支援相談員 1 名を配置し、3 年次生全員に就職面接を実施し、学生の就職・進学希望に関する実態を把握し、希望者には適宜相談に応じた。

- 1) 学生の就職・進路状況の確認と支援：卒業生 78 名であり、3 月 29 日現在で、就職決定者 64 名（看護師 58 名、養護教諭 5 名、看護職以外 1 名）、養護教諭非常勤登録者 1 名、進学者 11 名（保健師 4 名、助産師 7 名）、その他 2 名であった。学生に対しては各委員が分担して、学生への個別支援を行い、メールや面談で情報提供した。また、選考試験に備えて模擬面接を 4 回開催し、41 名の学生に実施した。本年度就職推薦を実施している 3 か所の施設の詳細情報を入手次第、4 年次生にメールで周知し、希望者を募集し委員会内で選考した。また、推薦基準（委員会内規）について明らかにし、学内情報共有システムである nekobus 上で学生にも周知した。なお、自己評価委員会委員長より当該委員会宛てに受けた「改善・修正等を要する事項に関する意見」については、当該委員会が就職推薦候補者の決定を行う内容を推薦書交付内規に示し、平成 30 年度第 7 回教育研究審議会で承認された。
- 2) 就職・進学ガイダンスの開催：3 年次生対象に就職・進学ガイダンスを 6 月 4 日、2019 年 2 月 20 日の 2 回開催した。今年度は、第 4 段階実習前の 7 月 11 日に、自らの進路を考える機会とするために進路の講話を実施した（株式会社マイナビ）。自己の看護観構築の必要性と臨地実習の重要性を認識し、病院説明会やインターンシップ参加の動機づけの機会となった。次年度は、教員によるガイダンスを充実させる。2 月開催時には、卒業生 2 名を招聘し就職活動の体験談や入職後の活動状況を話してもらい、4 年次生 2 名にも就職活動の体験談を話してもらった。3 年次生も熱心に聞いており、卒業生や 4 年次生に質問していた。また、将来の転職やUターンに備えて、本学の就職相談室の利用や各都道府県のナースセンター担当者による就職相談の紹介、有料の転職サイトの利用をしないことや、「とどけるん」の配布を行った。6 月と 2 月には、県内のインターンシップの開催状況や参加の仕方について説明し、県内施設インターンシップ参加の促進を行った。
- 3) 県内施設就職説明会の開催：3 月 1 日に主に 3 年次生対象に県内施設就職説明会を開催し、33 施設参加があった。説明会は午前・午後の 2 部に分けて、学生全体へ施設概要を 5 分説明し、その後施設ブースでの個別相談を行った（60 分間）。33 施設には就業する卒業生の参加もあり、個別相談では卒業生の話が聞けて好評であった。
- 4) 県内施設訪問：大分市医師会立アルメイダ病院、国立病院機構別府医療センター、関愛会佐賀関

病院の看護部を就職支援委員会委員が訪問し、卒業生の活動状況を把握した。各施設の新卒者の適応状況の確認、新人教育体制や今後の卒業生の活動への期待やキャリアパスなどの意見交換を行うことができた。

- 5) 各種講座の開催：履歴書の書き方・面接講座は株式会社マイナビに講師を依頼し、4月11日4年次生を対象に開催した。書類作成時期であり熱心にメモを取るなど好評であった。病院選び・身だしなみ講座は、2018年2月13日3年次生を対象に、株式会社マイナビに講師を依頼し、九州内及び大分県内の看護職募集の現状や自分にあった病院の探し方や見学会マナーと身だしなみ講座を開催した。その後の県内施設説明会においてマナーや身だしなみを整え、積極的に質問する姿勢に活かされた。
- 6) 卒業生の県内施設Uターン支援と県内施設在職状況調査：20周年記念式典のホームカミングデイの際に、「大分県内求人情報」の冊子とナースセンターより提供された施設情報の冊子を設置し、卒業生に情報提供を行った。77施設に県内施設説明会募集案内送付時に、本学卒業生・修了生の在職状況調査協力依頼を実施した。38施設から回答があり、就職している卒業生・修了生を確認した。平成31年1月現在の施設在職者数は学部卒業生318名、修士修了者29名、博士修了者3名、認定1名であった。
- 7) 求人数、求人件数、求人訪問対応：求人数（件数）は、全国10,547人（297件）、大分県326人（49件）であり、平成29年度より全国の求人が1,920人（15.4%）減少、大分県が77人（38.96%）増加した。全国及び県内からの求人訪問対応は25件であった。

本年度の県内就職率は53.1%、県外就職率は46.9%であった（平成31年3月29日現在）。今後とも県内就職率50%を確保するための方策として、ガイダンス等の際に積極的に卒業生の招聘を行い、在学生との交流の機会を設ける。また、県内施設に就業する卒業生の状況を確認し、1年次生に情報提供を行う。2025年問題による高度急性期施設の病床数削減等により、看護職員の採用数が減少（本学求人数平成26年度比36.5%減少）しているため、県内の就職情報を大分県看護協会のナースバンクから情報を得ながら、学生に提供していく。

1-13 FD/SD 委員会

委員長 梅野貴恵

副委員長 関根剛

委員 安部眞佐子、緒方文子、永松いずみ、稗田朋子、廣瀬法子

FD/SD 委員会は、教職員の能力開発、教育/研究内容及び教育方法の改善、組織間の連携を推進することを目的に、平成30年度から新設された委員会である。主とする分掌は、①FD/SDのための各種研修会の実施、②授業評価の実施及び授業内容・方法の改善及び向上、③教員の教育、研究などに関する資質向上である。平成30年度の本委員会の活動内容は、以下の1)～8)である。

- 1) FD/SD 研修として、4月2、3日に15名を対象に新任教職員研修を実施した。7月12日にハラスメント相談員研修会を実施し、教職員15名が参加した。7月20日に科学研究費申請の説明会・研修会を実施し、教職員34名の参加があった。10月17日と平成31年1月7日に法務省作成のDVD「同和問題～過去からの証言、未来への提言」を用いて人権研修会を実施し、教職員のべ51名が参加した。10月17日に教育研修としてアクティブラーニングの1つとしてクリッカー利用に関する研修を実施し、教職員16名が参加した。3月11日に大分大学医学部看護学科のシラバス作成の考え方についての研修会（講師は大分大学高等教育センター准教授 鈴木雄清氏）を開催し、教職員41名が参加した。3月14日に次年度の科研費申請に向けた科研費申請書の書き方についての研修会（講師は創世看匠代表藤田比佐子氏）を開催し、教職員36名が参加した。また個別指導を3名が受けた。3月27日に大学における発達障害を持った学生の生活や学習支援についての研修会（講師は大分県教育庁特別支援教育課課長 後藤みゆき氏）を開催し、教職員46名が参加した。
- 2) 学内競争的研究費の活用促進として、4月11日にメールにて学内競争的研究費の募集を行い、奨励研究6件、先端研究6件、プロジェクト研究0件の新規応募があった。5月1日にFD/SD委員会主催の審査会（審査員7名、学長オブザーバ）で審査し、審査結果により助成額を決定した。平成29年度に採択された2年目の研究課題と合わせて、平成30年度は、奨励研究9件、先端研究7件、プロジェクト研究1件への助成を行った。これらの研究成果（進捗状況）は、3月8日のアニュアルミーティングで報告された。
- 3) 科学研究費助成金申請の促進を行うために、全教職員対象に上記1のとおり研修会を実施した。4月19日に新任教員のために、申請にあたり情報提供を行った。申請書のピアレビューは、申請39件のうち13件あった。
- 4) 国内/海外派遣研修の促進のために、4月12日から計5回の募集を行った。海外短期派遣研修に1名を推薦し、国内派遣研修に1名を推薦した。3月8日に研修報告が行われた。
- 5) 授業評価は、本年度から全科目の実施を行った。紙媒体による方法で、1年次生32科目、2年次生32科目、3年次生21科目、4年次生6科目の全91科目であった。担当教員に結果の通知を実施した。
- 6) アニュアルミーティングは、平成31年3月8日に開催し、教職員48名が参加した。学内競争的研究費の応募者による発表16題、一般演題5題、国内派遣研修報告1題が、ポスターを用いて示説で発表された。海外派遣研修報告は、口頭によるプレゼンテーションで行われた。参加者は48名であった。発表の要旨集は、冊子体にして図書館に保管した。
- 7) 平成30年より、大分県内大学等FD・SD合同フォーラム開催に向けての担当者会議が4回開催され、委員長が参加した。2月22日に日本文理大学において開催された第1回大分合同FD・SDフォーラムに委員長と委員2名が参加した。
- 8) 学内全教員へ他機関からのFDに関する情報提供を13回行った。

授業評価の調査方法を、現状のマークシート配布から、webによる収集にできるか検討する予定である。

1-14 研究倫理・安全委員会

委員長 市瀬孝道

副委員長 平野互

委員 岩崎香子、草野淳子、石田佳代子、川崎涼子

外部委員 二宮孝富、西英久

事務局 衛藤美樹子

研究倫理・安全委員会は今年度 11 回開催した。平成 31 年 1 月を除いた各月ごとに教員と大学院生から申請された研究計画書の審査を行った。今年度の申請件数は 115 件、欠番 9 件、審査計画書数は 106 件で、そのうち 90 件が承認された。

昨年度に比べると申請件数は 30 件少なかった。C 判定は 16 件あり、特に大学院生の申請資料の不備が目立った。昨年度に人を対象とした実験計画書を申請者が使い易いように変更し、また、研究計画の申請に関する手引きを申請者が分かり易いようにリニューアルしたが、大学院生の申請者はこの手引きをよく読んでいないようであった。いずれにせよ大学院生の申請書の不備が多く、不採択率が高いため、指導教員に院生が申請した計画書には必ず目を通すように随時アナウンスするようにして、採択率の向上を図りたい。

研究倫理教育に関しては昨年度より日本学術振興会の e-ラーニング (eL CoRE) を導入し、教員全員が受講している。今年度は新任教員や大学院新入生が中心に受講した。来年度は eL CoRE の復習システムを導入し、教員、大学院生全員が受講できるように計画している。

前年度に自己評価委員会が集約した全学の「改善・修正等を要する事項に関する意見」に関する集計結果をうけて、研究倫理・安全委員会では大分県立看護科学大学研究指針の見直し改正、研究不正防止に関する規程類の策定を行った。これらは平成 31 年 2 月の教育研究審議会と 3 月の理事会で承認され、4 月より施行されることとなった。

1-14 1) 動物実験小委員会

委員長 市瀬孝道

委員 影山隆之、岩崎香子、小嶋光明、定金香里、衛藤美樹子

平成 30 年度動物小委員会は 10 回開催した。動物実験研究計画書 15 件の審査を行い、15 件が承認された。平成 30 年度使用動物匹数に関しては平成 31 年度年報で報告する。平成 29 年度の使用動物匹数はマウス 1,115 匹 (市瀬 212 匹、定金 104 匹、吉田 548 匹、岩崎 151 匹)、ラットが 62 匹 (市瀬 49 匹、定金 12 匹) であった。これらの使用された動物のそれぞれの実験おける「自己点検・自己評価」を実施すると共に、動物実験実施報告書を作成し学長に報告した。これら平成 29 年度使用動物の慰霊祭は平成 30 年 6 月 13 日に実施した。

平成 29 年度に公益財団法人日本実験動物学会による外部検証を実施し、外部検証で指摘のあった

本学の研究倫理指針、動物実験規程と実験動物施設利用マニュアルの一部を改正した。

動物実験教育訓練に関しては平成 30 年 4 月 26 日と 27 日に動物実験講習会（市瀬・定金）を実施した。また、平成 30 年 12 月 14 日に実験研究（恵谷）、12 月 21 日に研究の倫理と安全の中で動物を対象とした実験（市瀬）について学部 3 年次生を対象に実施し、31 年 3 月 7 日に人獣共通感染症の教育訓練を外部講師（万年和明氏）によって実施した。

今年度は動物施設の雨漏りを修繕し大雨による雨漏りが改善された。また、自動湿度装置によって施設内の湿度環境改善を整えるようにしたが、梅雨時の高湿度時と冬場の低湿度時の制御が現在の装置では難しいことが分った。来年度はこれらの改善と、これ迄と同様に動物実験の研究計画書を審査し、動物への配慮とよりよい動物飼育環境の推進を図る予定である。

1-14 2) 遺伝子組換え実験安全小委員会

委員長 濱中良志

委員 平野亙、市瀬孝道、甲斐倫明

今年度は、申請は無かった。

来年度は、申請書が提出された場合は、迅速に審査を行う。

1-15 広報・公開講座委員会

委員長 高野政子

副委員長 小嶋光明

委員 秦さと子、石丸智子、恵谷玲央、大矢七瀬、宿利優子、矢部美香、矢野昌哉

1) 若葉祭教職員企画

学生主体の若葉祭は 5 月 18 日、19 日に開催された。若葉祭で当委員会は、教職員と学生のコラボイベントの企画募集とパネルやパンフレット、卒業研究のポスター展示など当日の運営を行った。全体の参加者は 2 日間を通して 560 名で、イベントは 11 企画を開催し、パネルやパンフレット、卒業研究のポスター展示により、大学の教育内容や設備の紹介ができた。イベントへの総参加者数は 1,093 名であった。教職員と学生がコラボしてイベントを行うことで、学生と教職員との距離の近さが、今後本学を受験する予定の高校生などにアピールできたとともに、地域の人々とのふれあいの場ともなった。7 月開催予定のオープンキャンパスの案内チラシ、大学案内パンフレットを配布した。また、全研究室に協力してもらい卒業研究のポスター展示は研究棟や講義棟に 17 枚掲示した。一般の方々や進学希望者にも大学の内容や取り組みが伝わるように配慮した。

2) オープンキャンパス

オープンキャンパスは、7月15日に開催した。事前に、大分合同新聞など新聞社5社に記事を掲載、「ほっとは一と大分」(TOS TV)などで広報した。当日は384名(高校生257名、保護者119名、その他8名、昨年比プラス13名)と多くの参加者があり、本学について大いにアピールできた。講堂での全体説明会では、入試情報の提供や1年次生の合格体験発表、3年次生、4年次生からの在校生メッセージの発表などを企画した。また、模擬授業3講座や、体験イベントなど教職員全員と学生の協力者で取り組んだ。在学生在が相談コーナーや体験イベントを担当することにより、高校生や保護者が在在生と交流する機会となり、入学後のイメージを深める一助となったと思われる。課題は参加者が増えたことで、講堂が満席となり説明が聞き取りにくい、実習棟が混雑し暑いなどの指摘があった。次年度は、午前と午後の2回開催を検討する。

3) 創立20周年記念事業の広報部会の活動

平成30年度は本学創立20周年記念事業の広報部会としても活動した。新聞広告は、西日本新聞(6月20日、9月15日)、大分合同新聞(6月19日、9月9日)に、式典開催終了の記事は大分合同新聞(9月16日)に掲載された。また、20周年記念DVDを作成した。新規にDVD作製したのは10年ぶりである。DVDは大学の今を伝えるツールとして、記念式典と祝賀会で披露し、オープンキャンパスや出前講義等でも活用できるものとなった。また、記念式典の記念品を選定し、大学ロゴ入りバッグと日田杉のボールペンの2品を実行委員会に提案した。

4) 出前講義

高校からの依頼で、大学進学を希望する高校生を対象とした出前講義に講師を派遣した。看護系の准教授、講師、助教各1名を派遣した。大分県立中津北高校(10月12日)、大分県立臼杵高校(6月14日)、長崎県立長崎南高校(10月12日)の3件であった。その際、2019年版大学案内を持参し広報を行った。

5) 大学見学・ミニオープンキャンパス

オープンキャンパスに参加できなかった高校生や保護者からの大学見学等の申し込みに随時対応した。大分県立由布高校(7月12日)と大分県立中津北高校(10月15日)の2校から高校生と保護者、教員等、それぞれ40名が来学した。個別の大学訪問4件には、教務学生グループと大学の概要を説明した後、入試や卒業後の進路についての質問を受け、施設見学等対応した。

6) 創立20周年記念 公開講座

公開講座は、7月28日に本学講堂で開催した。今年度は、創立20周年記念とNPコース開講10周年を記念する公開講座となった。メインテーマを「NPを得て地域のチーム医療がパワーアップする」と題し、日本看護協会理事、医師、修了生3名とハワイでFNPとして活躍する日本人を学外講師として招聘した。参加者は100名であった。受講者の評価は、「大変良い」と「良い」が90%と高い評価を得た。チラシを作成し県下の病院や施設、保健所へ配布した。また、6月の大分県看護協会総会などで早期に配布し広報をした。さらに市報など地域広報に加え、マスコミや行政機関や病院等に参加を呼びかけた。

7) 大学オリジナルグッズの作成

新規にクリアファイル1,000部を作成した。クリアファイルには大学の風景をデザインしており、

大学広報の一つとして活用できるグッズと考える。

8) 大学 HP、Facebook およびマスメディアによる広報

大学 HP の運用を行った。大学のイベント案内（若葉祭、オープンキャンパス、公開講座・講義など）やその実施報告（大学アルバム）など、45 件を掲載した。大学アルバムでは、学生のボランティア活動や地域での社会貢献活動についても随時に公開した。本学公式 Facebook を利用して大学のイベントの告知や活動・取り組みを卒業生、在校生、受験生など一般に速やかに発信し、各研究室と事務局の持ち回りで大学の風景などについて、70 件を掲載した。

教員の研究紹介は、全教員の協力のもと毎月更新し 11 件を掲載した。大学 HP に掲載している大学 Q&A は、年 3 回（4 月、7 月、11 月）更新した。本学進学に関心のある高校生や、入試情報を必要とする受験生などに閲覧時期に合わせて公開した。

9) 大学案内パンフレットの作成と活用

委員会委員 4 名が大学案内パンフレット WG に参加し運営した。業者選考では委員全員が参加し、2020 年度版が次年度 4 月中に納品されるように WG の支援を行った。

2019 年度版の大学案内パンフレット 2,000 部は、出前授業、進学相談時に本学に関心をもつ学生や保護者、高等学校に配布し、本学の認知度の向上や大学生活の具体的な説明などに活用した。若葉祭、オープンキャンパス時には研究棟入り口など目にとまりやすい場所に設置し、自由に持ち帰れるようにした。また、県下の病院や施設などへの配布、地域活動時の参加者への配布等により広く本学が周知され、入学希望に繋がるように広報活動に活用した。次年度からは、健康増進プロジェクトチームの活動の際に受付などで配布し広報してもらうように依頼する。

10) 広報誌「風のひろば」

広報誌「風のひろば」は後援会と共同で年 2 回（7 月 Vol.12、12 月 Vol.13）作成した。内容は、20 周年記念事業等の大学行事の紹介や卒業生インタビュー、教員の研究紹介等を掲載した。広報誌は県内高校、学部生の保護者、同窓生、県内の実習関連病院などに 1,700 部／回を配布した。また、20 周年記念事業の一つ「未来応援基金」の案内チラシと一緒に配布し周知を図った。

11) 活動の課題

平成 31 年度の当委員会の課題は、(1)大学の教育研究活動の状況や、その活動の成果に関する情報を随時ホームページで公開し広報する。(2)イベントの開催情報や学生の諸活動等を、新聞や TV などのメディアやホームページ、広報誌等で発信する。(3)県民（高校生含）、医療職者のニーズを満たすテーマの公開講座を開催する。平成 30 年度に引き続き、大学 HP の管理（大学アルバム、Facebook、研究紹介等）、大学案内の作成、オープンキャンパス、公開講座、出前講義などに取り組む。

1-15 1) 大学案内パンフレットワーキンググループ

リーダー 秦さと子

メンバー 恵谷玲央、足立綾、佐藤栄治、秋本慶子、高野友愛、矢部美香、矢野昌哉

2020年度版大学案内パンフレットについて、昨年度までの内容を基本としつつ「未来創造」をコンセプトに作成に取り組んだ。学部のページでは、学年を重ねるごとに成長する姿がイメージできるような配色の工夫や授業科目の選定を行った。キャンパスライフのページでは明るい大学の雰囲気や伝わるような配色とした。表紙、学部生、学部卒業生、大学院修了生の写真などを入れ替えることで新味を出し、手に取りたくくなるような大学案内パンフレットの作成に努めた。

1-16 国際交流委員会

委員長 ジェラルド T シャーリー

副委員長 甲斐倫明

委員 桑野紀子、山田貴子、恵谷玲央、吉川加奈子、丸山加菜、久保絃子

国際交流委員会が平成 30 年度に行った活動は以下のとおりである。

1) 韓国の蔚山大学校医科大学看護課程交流派遣学生受け入れと交流

7月16日から20日までの5日間、蔚山大学からの交流派遣である学部生6名と同行教員2名を本学に受け入れた。来年度の相互交流の受入体制が検討課題として挙がり、見直しを行った。

2) 本学学生の派遣

本学からは8月20日から24日までの5日間、学部交流派遣として学部生6名を同行教員2名と共に蔚山大学に派遣した。交流の成果を記載したwebページを派遣学生が作成した。また、満足度調査の結果、訪問全体について全員が「とても満足」と回答していた。

3) 第20回看護国際フォーラムの開催

大分県看護協会と共催で第20回看護国際フォーラムを9月15日に、別府ビーコンプラザ国際会議室で開催した。本学の20周年式典との同時開催となり、歴代ソウル大学教授とその家族をゲストとして迎えた。テーマを「看護におけるリーダーシップ」とし、国内から1名、韓国から1名、米国から1名の講師を招聘した。参加者は339名と大盛況であり、参加者アンケートの結果では講演内容について97%、討論内容について98%が「とても満足」「ほぼ満足」と回答しており、高い満足度を示していた。

平成30年度の計画を踏襲した活動を行う予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研究資質向上のために、国際交流の機会と内容を十分に検討する。また、看護国際フォーラム後に参加者アンケートを実施し、看護職のニーズに沿ったテーマを選定し、地域貢献にもつなげる。

1-16 1) 英文 Web・パンフレットワーキンググループ

リーダー ジェラルド T シャーリー

メンバー 桑野紀子、岩崎香子、高野友愛

本年度 4 月より本学英文 Web の改訂作業に取り組み、教職員の方々のご協力の下、Faculty ページをリニューアルし、10 月 1 日に全ページの改訂を終了した。また、次年度に英語パンフレットをリニューアルするため、内容、ページ数、作成スケジュール等を検討した。

また、今後の課題として、英語 Website (学外 Web) に関しては、年度当初にトップページの最新情報を確認・更新掲載すると共に留学生のための情報ページを作成・掲載する。

1-17 図書委員会

委員長 赤星琴美

副委員長 石田佳代子

委員 定金香里、ジェラルド T シャーリー、白川裕子、高橋勝三、斧田智恵、工藤信二

委員会選定及び学生リクエストによって新たに 1,817 冊の蔵書を整備した。また、「図書館だより」(発行回数 2 回<Vol.9 (2018 年 7 月)、Vol.10 (2019 年 1 月)>) の発行、図書企画展示 (企画展示 4 回、特別展示 1 回、ミニ展示 3 回) の実施、教職員の推薦図書を毎月紹介する「教職員おすすめの一冊」を開始し、教職員・学生の図書館利用拡大を図った。図書リユースデー (2018 年 7 月) 開催 <展示冊数 225 / リユース冊数 130 > し、約 60% がリユースされた。

研究・教育がより効果的に行うことができるよう、文献デリバリーサービス「Reprints Desk」、医学映像情報センターの映像配信教育「ビジュランクラウド」を導入した。

「附属図書館除籍細則」の改定を行うとともに、書架狭隘化対策として図書の除籍を実施した。

卒業生・修了生の入館状況を次年度以降も継続的に調査集計し、利用拡大のための方策を検討していくことにした。学内外から利用できる医療情報配信サービス「メディカルオンライン」のトライアルを実施する計画である。

1-18 情報ネットワーク委員会

委員長 甲斐倫明

副委員長 品川佳満

委員 恵谷玲央、宿利優子、渡邊弘己、矢野昌哉、染矢哲朗

本学のネットワーク運用支援、ユーザー支援、メール管理、サイボウズなどによる手続き支援など

を定期的に行う業務を各委員が WG ごとに担当して行なった。経常活動以外の活動として、教務システムの更新をプロポーザル方式による審査で決定し導入した。また、教育用パソコンの更新計画を検討し、年度末での入札準備を進めたが、予算の関係で新年度に入札を開始し、夏には更新を行う計画で進めることにした。とくに、プリンタの運用において、プリント上限を設定し、消耗品の無駄を省き、学生にコスト意識を育てることにした。その他、経常活動以外の活動として、1) 統合認証システム(愛称：看科大 ID) の更新、2) 情報セキュリティ対策のための研修会の定期的実施を計画、3) メディアセンターの PC を撤去し、開学以来、学生用のメディアセンターとしてきた機能が終了した。4) サーバのバックアップを外部データセンターに移行、5) atom サーバの更新を認証サーバのセカンダリサーバである reo に移行、6) 新元号への改元に伴う影響を調査、を行なった。

経常活動以外の活動を含めて、予算が絡むために情報ネットワーク委員会だけの判断ができない内容は教育研究審議会に諮り決定する。しかし、金額が大きいシステム更新や導入については、1年に渡ってコストベネフィットを分析し、大学側が判断できるように情報を整理する作業をこれまでも行なってきた。一方で、サーバのクラウド化を進める方針にしたことで、コストが一時的には上昇することがあり、長期的な判断が必要である。

1-19 看護系全体会議

学長 村嶋幸代

学部長 藤内美保

事務局長 清末敬一郎

構成員 森加苗愛、梅野貴恵、小野美喜、影山隆之、高野政子、林猪都子、福田広美、赤星琴美、石田佳代子、伊東朋子、川崎涼子、草野淳子、桑野紀子、杉本圭以子、平野互、秦さと子、足立綾、安部真紀、石丸智子、大矢七瀬、緒方文子、小野治子、甲斐博美、後藤成人、佐藤愛、宿利優子、田中佳子、中釜英里佳、永松いずみ、稗田朋子、樋口幸、堀裕子、山田貴子、吉川加奈子、佐藤栄治、丸山加菜、今村知子、大嶋佐智子、岸良達也、後藤智美、篠原彩、矢幡明子

4月、7月、12月に年3回の定例会議を開催した。例年、学部および大学院の各実習における計画・進捗状況・結果の報告、予防的家庭訪問実習の計画・進捗状況・結果の報告、看護学実習委員会および実習運営小委員会からの活動報告を行ってきた。ただし、今年度は議題に関する討議時間を十分に確保するため、報告事項は必要最低限とした。

年間を通じて、主に2022年度から開始する新カリキュラムに向け講義や演習、実習のあり方について討議を行った。県立大学である本学の役割発揮に向けて、また将来を見据えた実習指導体制のあり方について議論を行ってきたが、引き続き課題を明らかにし、より良い教育体制を模索すべく、本会議を活かす場としていきたい。

1-20 看護研究交流センター

センター長 稲垣敦

副センター長 影山隆之

メンバー 緒方文子、篠原彩、神崎純子、安部浩

看護研究交流センターは大学と社会の窓口となる機関である。当センターの業務は年々増えてきたため、本年度から副センター長を置くこととした。また、文部科学省の地（知）の拠点整備事業の終了に伴い予防的家庭訪問実習プロジェクトを地域交流チームに一本化するとともに、NPプロジェクトを発展的に解消して当センターNP事業推進チームに一本化した。さらに、国際交流チームも国際交流委員会に一本化して解消し、健康増進プロジェクトは本センターの1チームとした。この結果、今年度より次の6チームが分担して、チーム毎の業務にあたった。次年度からは、6チームの連携を図るため、センター会議を設置することとなった。

1-20 1) 地域交流チーム

リーダー 影山隆之

メンバー 藤内美保、福田広美、川崎涼子、山田貴子、稗田朋子、緒方文子、篠原彩、矢幡明子、神崎純子、安部浩

予防的家庭訪問実習の主たる運営を担い、地域ステークホルダーとの調整と運営会議・幹事会の開催、実習協力者への依頼、実習要項の作成と学生・教員へのオリエンテーション、進行状況の管理（学生・協力者・担当教員の調整）、協力者を訪問しての面談等を行った。特に今年度は、本実習を活用した高齢者の地域見守りネットワークについて地域ステークホルダーと取り決めを交わし、協力者の健康・生活変化が学生から見て気がかりな場合には教員に報告し、大学から地域包括支援センター等に連絡を取ることにについて、協力者の同意を取り付ける手続きを進めた。併せて、本実習の効果検証に関するプロジェクト研究を進め、成果を学術誌・学会で発表した。また、別府市自殺対策計画策定推進事業の一環として同市から委託を受け、こころの健康に関する別府市民意識調査の設計と集計分析を行った。

次年度は看護研究交流センターの人員組織が変わるので、その下で予防的家庭訪問実習をスムーズに進めることが課題となる。

1-20 2) 継続教育推進チーム

リーダー 伊東朋子

メンバー 樋口幸、佐藤愛、後藤成人

継続教育推進チームと名称を改めて3年目となった。県内の看護の質向上にむけて、県内施設や看護協会が実施する研修会に多くの講師を派遣した。ホームカミングデイについてはチームメンバー3人とともに、企画運営を行った。具体的には本学同窓会四つ葉会の会員および、大学院修了生との連絡方法の検討などの課題に対して取り組んだ。特に本年度は20周年開学記念式典日と同日にホームカミングデイを開催し、卒業生、修了生等と在校生が交流できるような企画を行った。

1-20 3) 産学連携推進チーム

リーダー 濱中良志

メンバー 伊東朋子、樋口幸、佐藤栄治

1・2年次生にHallow（自由科目：看護とものづくり）の受講内容を説明、また学年掲示板にも掲示し、参加学生を募った。学内より1年次生2名、2年次生1名が履修し、自由科目として単位を取得した。

平成30年12月7日、大分銀行 宗麟館 5階大会議室にて行われた「九州知的財産活用リレーセミナーin大分」にチームメンバーが1名参加した後、チーム内で次年度の学内体制の整備に向けた検討を行った。

平成31年2月12日、レンブラントホテルで開催される「東九州メディカルバレー構想推進大会」にチーム内から4名参加し、県内外企業と情報交換を行った。

現時点で、学内外の産学官連携の体制が脆弱であるので、次年度以降、学内外の体制づくりを強化する。また、「産学官連携推進チーム」についての学外関係各位への広報活動を行う。

1-20 4) NP 事業推進チーム

リーダー 小野美喜

サブリーダー 甲斐博美

メンバー 村嶋幸代、藤内美保、高野政子、濱中良志、宮内信治、森加苗愛、草野淳子、中釜英里佳、堀裕子、吉川加奈子、大嶋佐智子、神崎純子

平成30年度のNP事業推進チームの主となる以下の1)～5)の活動計画にそって活動を行った。

1) 社会が求めるNP像に見合う学生を育成し、NP資格認定試験合格とともに県内外に配置する

①例年通りのカリキュラムの展開と質担保のための段階的な試験を行った。1年次生には12月

27日に口頭試問、2月28日に進級試験を実施した。6名が受験し6名が進級となった。2年次生には実習前試験を実施（6月10日OSCE試験）した。7名が受験し6名が合格した。また1月31日の修了試験では5名が受験し全員合格した。いずれの試験も学生が到達基準に満たない場合は、チーム員で協議し、再試験の実施等も含めて教育の質の担保を図った。日本NP教育大学院協議会のNP資格試験（平成31年3月3日）に5名全員が合格した。以上の課程を経て3月18日に老年NPコース5名が修了し、県内3名、県外2名の就職となった。

2) NP修了生の継続教育の実施

継続教育のため、メーリングリストを活用して適宜、学習支援につながる情報発信（学会情報、研修案内など）を行った。平成31年2月16日は修了生が中心となって九州NP学術集会を大学で開催し、大学がバックアップを行った。約100名の参加者があり、講演や研究報告など、研究的な知見の情報共有ができた。

3) 実習施設連携・特定行為研修

実習前後の実習施設合同会議（6月、2月）を開催し、実習施設の実習指導者と大学教員との連携体制が強化できた。実習終了後の会議では、今年度初めての取り組みとして、全体会議の後に「病院施設」と「診療所・老人保健施設」の臨地別の分科会を行った。類似した環境の中での指導の在り方について具体的なディスカッションができた。また、「特定行為に係る看護師の研修制度」を組み込んだカリキュラムを展開したことから、研修を査定するため外部委員4名を含めた特定行為管理委員会を年間3回開催した。第1回（6月28日）は研修計画の妥当性を評価し、第2回（11月27日）は中間評価を行い、第3回（2月19日）は、研修の修了判定を行い、老年NPコース5名の研修修了を認定した。

4) NPに関する研究活動を行い、NP大学院教育の特徴を社会に向けて発信する。

平成30年度はCOC+事業に申請し、「地域医療に貢献する看護の魅力」をテーマに、大分県内3ヶ所でNP修了生による講演活動を行った（大分市、臼杵市、日出町）。参加者は高校生、保護者、看護職者、多職種など多様であり、3ヶ所で総計約100名が来場参加した。また、チームメンバーが日本NP学会等の各学会でNPの活動や成果を公表した。

・11月23日(金) 日本NP学会第4回学術集会（宮城）

・12月14日(土)・15日(日) 日本看護科学学会（愛媛）交流集会

5) 日本NP教育大学院協議会、日本NP学会事務局運営

日本NP教育大学院協議会の事務局として、全国9大学院のNP教育機関の連携と組織強化を図った。また、日本NP学会事務局運営も行っていたが、平成31年（2019年）4月から外部機関に事務局を移行するため、業者の選定また委託手続きを行った。

次年度の課題は、NP教育開始から10年を迎え、NPカリキュラムの見直しと学生の学習環境を整えるための検討を行うことである。

1-20 5) 学術ジャーナルチーム

リーダー 平野 互

メンバー ジェラルド T シャーリー、定金香里、安部真紀、山田貴子、秋本慶子、高野友愛、
白川裕子

看護科学研究編集委員会ならびに査読委員の事務を行ったほか、「看護科学研究」16 巻 2 号（2018 年 11 月発行）、16 巻 3 号（2018 年 12 月発行）および 17 巻 1 号（2019 年 3 月発行）の審査・編集・発刊に関する実務を行った。

年間目標である年間 3 号の発刊および年度内 3 号の発刊を達成した。

編集事務に関しては、編集委員会の議論に基づいて、投稿規定や査読関連文書の改訂、整備を行った。

今後も投稿論文を増やすための努力が必要であり、広報活動と同時に事務作業の効率化のためのさらなる改善を編集委員会と事務局が一体となって進めていく。

1-20 6) 健康増進プロジェクトチーム

リーダー 稲垣 敦

メンバー 濱中良志、赤星琴美、佐藤愛、秦さと子、石丸智子、田中佳子、森加苗愛、甲斐博美、
堀裕子、稗田朋子、吉川加奈子、安部真紀、樋口幸、桑野紀子、丸山加菜、緒方文子、
篠原彩

今年度の学外事業への協力、研究活動、啓発活動等は、以下のとおりであった。

【事業協力】

- Smart Life Project（厚生労働省）
- 大分県運動機能向上専門部会（大分県）
- 大分県リハビリテーション協議会（大分県）
- 地方創生大学等連携プロジェクト支援事業（大分県、大分大学）
- スポーツ救護ナース及び救護員の養成、フォローアップ、派遣事業（大分県スポーツ学会、大分県理学療法士会、大分県作業療法協会、大分県柔道整復師会、大分岡病院、西別府病院）
- 別府大分毎日マラソン大会（九州陸上競技協会、大分県、大分県教育委員会、大分市、大分市教育委員会、別府市、別府市教育委員会、毎日新聞社、RKB 毎日放送、OBS 大分放送 2 月 3 日大洲運動公園）
- 姫島村健康づくり事業（姫島村健康推進課、姫島村診療所 8 月 6 日、3 月 25 日姫島村離島センター）
- おおいたスポーツ交流フェスティバル 2018（大分県教育委員会、津久見市教育委員会、SC おおいたネットワーク、NHK 大分、OBS 11 月 23 日津久見市総合運動公園）

- 第 24 回ゆふいんスポーツレクリエーション大会（大分県教育委員会、NPO 法人ゆふいんチャレンジクラブ、11 月 3 日湯布院スポーツセンター）
- FUN+FITNESS-2018（大分県教育委員会、SC おおいたネットワーク、OBS、1 月 20 日トキハ別府店、2 月 9 日トキハインダストリー佐伯店、3 月 2 日パークプレイス大分）
- 2018 森林セラピートレイルランニング大会 in 野津原（大分市、野津原商工会 3 月 17 日）
- 第 33 回ななせの里まつり（大分市、野津原地区商工会 11 月 4 日みどりの王国）
- 世代間交流健康づくり事業（大分市社会福祉協議会、①7 月 21 日、②11 月 10 日多世代交流センター）
- 第 45 回富士見が夏まつり（富士見が丘連合自治会 7 月 21-22 日ふじみん公園）
- 第 7 回森林探検ウォーキング（富士見が丘連合自治会 3 月 30 日ふじみん公園）
- 第 8 回フォーラム（大分県スポーツ学会 6 月 16 日別府ビーコンプラザ）
- 第 10 回学術大会（大分県スポーツ学会 12 月 16 日アイネス）
- 2019 ラグビーワールドカップ（大分県、大分県ラグビー協会）
- 2020 横浜スポーツ学術会議（日本スポーツ体育健康科学学術連合、日本体育学会、ICSSPE）

【研究】

- 離島住民の健康寿命と食習慣：大分県姫島村について（第 77 回日本公衆衛生学会総会 10 月 25 日郡山）
- 介護予防運動機能向上標準プログラム（大分県版）の性別、年代別、家族構成別の効果（日本体測定評価学会第 18 回大会 3 月 2 日札幌）
- 血圧に影響する温泉入浴の要因（卒業研究）
- ストレスの低減をもたらす温泉入浴の要因（卒業研究）

【人材育成、啓発】

- 研修会等：大分県スポーツ学会第 9 期スポーツ救護講習会（8 月 25-26 日 J:COM ホルトホール大分 80 名）、第 7 回スポーツ救護スキルアップ研修会（別府ビーコンプラザ 6 月 16 日）、姫島村健康づくり事業研修会（姫島村離島センター 8 月 6 日第 1 回 25 名、3 月 25 日第 2 回）
- 健康・体力チェック：本学若葉祭（5 月 17-18 日本学 538 名）、本学オープンキャンパス（7 月 15 日筋肉を計ろう！ 98 名）大深度地熱温泉と上野エリアウォーキング in 大分市（5 月 27 日大分いこいの道 23 名）、世代間交流健康づくり事業（大分市社会福祉協議会、7 月 21 日多世代交流センター 100 名）大分トリニータホームゲーム（7 月 25 日大銀ドーム 583 名）、若葉会サロンについて（9 月 22 日富士見が丘公民館 45 名）、第 24 回ゆふいんスポーツレクリエーション大会（11 月 4 日湯布院スポーツセンター 283 名）、第 33 回ななせの里まつり（11 月 4 日みどりの王国 992 名）、おおいたスポーツ交流フェスティバル 2018（11 月 23 日津久見市総合運動公園 224 名）、FUN+FITNESS（1 月 20 日トキハ別府店 256 名）、FUN+FITNESS（2 月 9 日トキハインダストリー佐伯店 399 名）、FUN+FITNESS（3 月 2 日パークプレイス大分 416 名）、2018 森林セラピートレイルランニング大会 in のつはる（3 月 17 日県民の森）、第 7 回森林探

検ウオーキング（3月30日ふじみん公園）

【広報・メディア】

- NHK WORLD – JAPAN 「Medical Frontiers Special - Search for Superfoods in Oita -」取材協力（9月16日・配信中）
- 姫島村 CTV：姫島村健康づくり事業研修会
- 大分県スポーツ学会第10回大会：大分県立看護科学大学「健康増進プロジェクト」の活動について（12月16日 J:COM ホルトホール大分）
- 地方創生大学等連携プロジェクト支援事業成果報告会：出前健康・体力チェック！（1月29日九州電力大分支社）
- パネル展示：活動紹介（若葉祭5月17-18日本学、オープンキャンパス7月15日本学、創立20周年記念式典9月15日別府ビーコンプラザ）
- 本学 HP：①地域・社会貢献、②大学アルバム2018「健康・体力チェック」等14回
- パンフレット：本学パンフレット2018（p.40）
- パンフレット：「めじろん元気アップ体操」（市町村に13,700部配布）
- 大分県庁 HP：めじろん元気アップ体操&同ビッグ4パンフレットPDF版
- YouTube・大分県庁 HP：めじろん元気アップ体操動画再生回数144,929回（-3月11日）

【その他】

- 和太鼓サークル設立支援（9月10日、15名）
- 女子柔道部設立支援（11月28日、3名）
- 別府大分毎日マラソン大会救護学生ボランティア派遣（2月3日大洲運動公園6名）

今年度から、本プロジェクトは看護研究交流センターの下部組織となったため、予防的家庭訪問実習の効率化に伴い、昨年までのセンターの事業を請け負った。また、別府大分毎日マラソン大会や地方創生大学等連携プロジェクト支援事業など新しい事業にも参加し、姫島村の調査結果がNHK WORLD – JAPANの番組制作に貢献できた。一方、学内でも和太鼓サークルや女子柔道部の設立を支援した。来年度は、これまで醸成してきた県や地域との関係性を重視しながら学生とともに活動を継続してゆき、最終的な目的である既存の資源を活用した地域住民の健康増進システムの構築を模索していく。また、2019ラグビーワールドカップや2020東京オリンピック／パラリンピックにも協力して行きたい。

1-21 衛生委員会

1号委員 清末敬一郎

2号委員 角匡幸

3号委員 赤星琴美

4号委員 佐伯圭一郎、高橋勝三

オブザーバー 奥梢（1月31日まで）、今村知子（2月1日から）

事務局 衛藤美樹子

衛生委員会は、職場の労働災害及び健康障害を防止し、職員の安全及び健康の保持増進を図るために活動を行っている。本年度は、計8回の委員会を開催し、健康診断結果の把握や職場巡視等を行った。

1 職員の健康管理

- (1) 定期健康診断を4月18日に実施した。健康診断結果を確認し、精密検査の必要がある職員に当該精密検査受診を勧奨した。
- (2) 労働安全衛生法に基づくストレスチェックを5月14日から25日に実施し、集団分析結果から健康リスクの確認を行った（65名受検、受検率86.7%、前年度比3.8%増）。
- (3) インフルエンザ予防対策として、予防接種希望者を募り、11月7日に学内接種を行った（希望者27名）。
- (4) 有機溶剤を使用する実験室の作業環境測定を5月16日と11月7日に実施し、その評価の報告を行った。
- (5) 夏季休暇の取得促進のため広報を行い、取得状況を教育研究審議会等に報告した。

2 健康増進活動支援事業

昨年度に引き続き、教職員の健康管理への意識向上を図るため、職場ウォーキングラリーを開催し、教職員29名が参加した。

3 職場巡視

12月21日と1月22日に学内を巡視した。その結果、講師控室ロッカーや研究室の冷蔵庫の転倒防止措置が不十分であることを確認し、措置を行った。また、棚やキャビネット類の上の段ボール箱については、地震の際に落下の恐れがあるので、移動を指導した。

1-22 評価委員会

委員長 稲垣敦

委員 藤内美保、梅野貴恵、清末敬一朗

本委員会は、学内申し合わせルールに従って理事長・理事以外の常勤教員の年間活動に関する評価を行い、理事長に報告する。本年度は、前年度の方法を踏襲して教員に資料提出を依頼した後、所定の方式で評価を行い、その結果が適切であることを合議で確認し、教員に評価結果を示した。評価結果に対する教員からの異議申立てはなかった。次年度は評価方式について検討する予定である。

1-23 20周年記念事業実行委員会

【事業内容】

1) 創立20周年記念スローガンの募集

創立20周年記念スローガンを募集した。10編の応募があり、投票の結果、「未来のキミたちへ～播いた種が花咲くときに～」が採用された。

2) 創立20周年記念ロゴマークの募集

創立20周年記念ロゴマークを募集した。若葉祭のテーマである「結」をモチーフにしたロゴマークが採用された。

3) 創立20周年記念学園祭（若葉祭）

学生部会及び若葉祭実行委員会が実施

4) 記念植樹

6月19日の開学記念日に、香りの広場において教職員が豊後梅を植樹した。

5) 新聞広告

1月31日、6月20日、9月15日の西日本新聞朝刊、6月19日、9月9日の大分合同新聞朝刊に広告を掲載し、創立20周年事業のPRを行った。

6) 懸垂幕の掲示

管理棟正面玄関横の壁面に懸垂幕を掲示した。

7) 創立20周年記念公開講座

広報部会が実施した。

8) 創立20周年記念誌の作成

創立20周年を記念し、大学のあゆみ等を掲載した記念誌を刊行した。

9) 創立20周年記念式典、祝賀会、看護国際フォーラム、ホームカミングデー

9月15日、ビーコンプラザにおいて、招待者、卒業生、在学生及び教職員等約550名出席の下、記念式典等を開催した。

(1) 記念式典

フィルハーモニアホールにおいて、学長式辞、知事挨拶、来賓祝辞の後、関係機関及び実習施設

等に対する感謝状の贈呈、名誉教授称号授与、スローガン及びロゴマーク募集の優秀者の表彰を行った。

また、アトラクションとして、学生による TAKIO ソーラン（鐵心太鼓と共演）を上演した。

(2) 祝賀会

レセプションホールにおいて、招待者、卒業生、在學生及び教職員等 175 名出席の下、祝賀会を行った。

(3) 看護国際フォーラム

国際会議室において、招待者、卒業生、在學生及び教職員等 339 名出席の下、「看護におけるリーダーシップ」をテーマに講演会及び総合討論を行った。

(4) ホームカミングデイ

31 会議室において、卒業生、在學生及び教職員等 50 名出席の下、ホームカミングデイを行った。

10) 未来応援基金の創設

創立20周年記念を契機に、未来を担う学生を応援していただけるよう、学内外から広く寄附金を募り、それを原資とする「未来応援基金」を創設した。

1-23 1) 式典部会

部会長 高野政子

委員 稲垣敦、梅野貴恵、小野美喜、岩崎香子、吉田成一、高橋勝三

9月15日に別府ビーコンプラザのフィルハーモニアホールにおいて、招待者、卒業生、在學生及び旧教職員、現教職員 550 名出席の下、記念式典、祝賀会、パネル展示を企画運営した。

(1) 記念式典

学長式辞、知事挨拶、来賓祝辞、来賓紹介の後、関係機関及び実習施設等に対する感謝状贈呈、名誉教授号授与、国際看護学研究室の元教授 4 名とソウル大学看護大学校への感謝状・記念品授与、キャッチフレーズ及び 20 周年記念ロゴマークの作成した学生の表彰を行った。

また、アトラクションとしては、学生有志による TAKIO ソーランと鉄心太鼓の共演を上演した。

(2) 祝賀会

祝賀会は、ビーコンプラザ内のレセプションホールで 175 名が参加して開催した。参加者は旧交を温めることができ満足していただけたと考える。

(3) パネル展示

パネル展示は、ビーコンプラザの1階エントランス等に、大学院、委員会活動、個人研究などを紹介する28台のパネルを掲示した。

1-23 2) 記念誌部会

部会長 福田広美

委員 石田佳代子、市瀬孝道、伊東朋子、甲斐倫明、桑野紀子、佐伯圭一郎、定金香里、秦さと子、田中佳子、村嶋幸代

20周年記念式典の開催に際し、20周年記念誌の作成を行った。記念誌は、祝辞、沿革、寄稿、資料の構成とした。寄稿は、大分県知事等の祝辞10名、卒業生・修了生28名、海外教員6名、国内協力員12名、計56名から頂いた。また、学内教職員により10周年記念以降の教育、研究、地域社会貢献等を中心に沿革の作成が行われた。記念誌は、20周年記念式典当日の参加者595名ならびに大学関係機関へ250部郵送による配布を行った。

1-23 3) 基金部会

部会長 村嶋幸代

委員 藤内美保、稲垣敦、清末敬一郎

未来応援基金規程を策定し、パンフレット、振替払込書を作成した。12月発行の「風のひろば」の発送に併せて未来応援基金関係資料を同封した。また、大学HPにも専用バナーを設けた。

次年度より、ご厚志いただいた基金の活用を始める。

1-23 4) 広報部会

部会長 高野政子

委員 小嶋光明、秦さと子、石丸智子、恵谷玲央、大矢七瀬、宿利優子、矢部美香、矢野昌哉、清末敬一郎

1) 広報活動

(1) 創立20周年を広報するために大学正面に掲示する懸垂幕を検討し、実行委員会に提案した。新聞での式典開催の告知は、西日本新聞（6月20日、9月15日）、大分合同新聞（6月19日、9月9日）に、式典開催終了の記事は大分合同新聞（9月16日）に掲載された。

(2) 20周年記念DVDを作成した。DVDは大学の今を伝えるツールとして、記念式典と祝賀会で披露し、オープンキャンパスや出前講義等でも活用できるものとなった。

2) 記念品の大学オリジナルグッズの作成

記念式典で配布する記念品を選定し、大学ロゴ入りコングレスバッグと日田杉のボールペンの2品を実行委員会に提案した。

3) 広報誌「風のひろば」

広報誌「風のひろば」は年 2 回のうち、12 月 (Vol.13) に、20 周年記念事業の記念式典開催報告の他、大学行事の紹介や卒業生インタビュー、教員の研究紹介等を掲載した。広報誌は県内高校、学部生の保護者、同窓生、県内の実習関連病院などに 1,700 部/回を配布した。また、20 周年記念事業の一つ「未来応援基金」の案内チラシと一緒に配布し周知を図った。

1-23 5) 国際部会

部会長 ジェラルド T シャーリー

委員 甲斐倫明、桑野紀子、山田貴子、恵谷玲央、吉川加奈子、丸山加菜、久保紘子

大分県看護協会と共催で第 20 回看護国際フォーラムを 9 月 15 日に、別府ビーコンプラザ国際会議室で開催した。本学の 20 周年式典との同時開催となり、歴代ソウル大学教授とその家族をゲストとして迎えた。テーマを「看護におけるリーダーシップ」とし、国内から 1 名、韓国から 1 名、米国から 1 名の講師を招聘した。参加者は 339 名と大盛況であり、参加者アンケートの結果では満足度が高かった。

1-23 6) 学生部会

部会長 林猪都子

委員 宮内信治、関根剛、岩崎香子、堀裕子、田中佳子、後藤成人、奥梢、坂本晴生

学生部会は、若葉祭を 20 周年記念事業として取り組んだ。学生が運営する若葉祭実行委員会の組織再編成と運営マニュアル作成指導を 1 年かけて取り組んだ。20 周年記念事業の特別企画として、予防的家庭訪問実習の発表、風の広場の芝刈り (20th)、大分市および大分県の保健所と共同で自殺予防対策 (大分市) とエイズ啓発活動 (大分県) の展示を行った。若葉祭当日は学年対抗リレーなど平日開催にも関わらず、盛り上がりが見られ、有意義な 2 日間であった。

9 月 15 日の 20 周年記念式典にむけては、全学年に対して事前オリエンテーションを実施した。当日の学生の参加状況は素晴らしく、学生にとって記念に残る 1 日となった。

1-23 7) 同窓会部会

部会長 後藤成人

委員（同窓会役員） 田中佳子、足立綾、佐藤愛、宿利優子

大分県立看護科学大学の20周年記念事業の開催に向けて、同窓会の役員や看護研究交流センターのチームメンバーと協力して、20周年記念事業への同窓生の参加の呼びかけ、同窓生からの開学20周年のお祝いのメッセージをパネルにして展示するなどした。20周年記念事業の開催に合わせて同窓会の臨時総会も行い、20周年記念事業全体を通して43名の同窓生が参加した。

1-23 8) 総務部会

部会長 清末敬一郎

委員 高橋勝三

20周年記念事業実行委員会の事務局として、毎月実行委員会を開催し、各部会と連携を取りながら、記念式典や記念誌発行等の関連事業を実施した。

2 学内行事

2-1 学年暦

前期	後期
4月 6 入学式 9 全学オリエンテーション 10,11 新入生オリエンテーション 10 2～4年次生授業開始 10～17 前期履修登録 11 健康診断 12 1年次生授業開始 20 全学スポーツ交流会	10月 1 後期授業開始 1～9 後期履修登録
5月 7～6/5 地域看護学実習, 在宅看護論実習(4年次生) 16 キャンパスクリーンデー 18,19 若葉祭 21～25 老年看護学実習(3年次生)	11月 23 特別選抜試験(推薦・社会人) 29 卒業研究要旨提出締切(4年次生) ～30 成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ, 小児看護学実習, 母性看護学実習, 精神看護学実習 (3年次生)
6月 13 学生大会 19 開学記念日 18～7/6 総合看護学実習(4年次生)	12月 4 卒業研究論文提出締切(4年次生) 5,6 卒業研究発表会 7～21 看護アセスメント学実習(2年次生) 24 冬期休業開始
7月 9～13 初期体験実習(1年次生) 15 オープンキャンパス 18 大学院特別選抜 21 夏期休業開始 20～8/2 小児看護学(保育所)実習(3年次生)	1月 7 冬期休業終了 8～21 基礎看護学実習(1年次生) 18 大学入試センター試験準備 (2,3,4年次生休講) 19,20 大学入試センター試験
8月 25 大学院入学試験	2月 2 大学院入学試験(2次募集) 17 看護師国家試験 25 一般選抜試験(前期)および特別選抜 試験(私費外国人留学生) 26 進級試験(2年次生) 28 後期授業終了
9月 5 夏期休業終了 6～ 成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ, 小児看護学実習, 母性看護学実習, 精神看護学実習 (3年次生) 15 創立20周年記念式典 15 ホームカミングデイ 15 看護国際フォーラム	3月 1 春期休業開始 12 一般選抜試験(後期) 18 卒業式

2-2 オープンキャンパス

オープンキャンパスは、7月15日に開催した。事前に、大分合同新聞など新聞社5社に記事を掲載、「ほっとは一と大分」(TOS TV)などで広報した。当日は384名(高校生257名、保護者119名、その他8名、昨年比プラス13名)と多くの参加者があり、本学について大いにアピールできた。講堂での全体説明会では、入試情報の提供や1年次生の合格体験発表、3年次生、4年次生からの在校生メッセージの発表などを企画した。また、模擬授業3講座や、体験イベントなど教職員全員と学生の協力者として取り組んだ。在学生在が相談コーナーや体験イベントを担当することにより、高校生や保護者が在和学生と交流する機会となり、入学後のイメージを深める一助となったと思われる。課題は参加者が増えたことで、講堂が満席となり説明が聞き取りにくい、実習棟が混雑し暑いなどの指摘があった。次年度は、午前と午後の2回開催を検討する。

2-3 公開講座

公開講座は、7月28日に本学講堂で開催した。今年度は創立20周年記念とNPコース開講10周年を記念する公開講座となった。メインテーマを「NPを得て地域のチーム医療がパワーアップする」と題し、日本看護協会理事、医師、修了生3名とハワイでFNPとして活躍する日本人を学外講師として招聘した。参加者は100名であった。受講者の評価は、「大変良い」と「良い」が90%と高い評価を得た。チラシを作成し県下の病院や施設、保健所へ配布した。6月の大分県看護協会総会などで早期に配布し広報した。さらに市報など地域広報に加え、マスコミや行政機関や病院等に参加を呼びかけた。

2-4 第20回看護国際フォーラム

大分県看護協会と共催で第20回看護国際フォーラムを9月15日に、別府ビーコンプラザ国際会議室で開催した。本学の20周年式典との同時開催となり、歴代ソウル大学教授とその家族をゲストとして迎えた。テーマを「看護におけるリーダーシップ」とし、国内から1名、韓国から1名、米国から1名の講師を招聘した。参加者は339名と大盛況であり、参加者アンケートの結果では満足度が高かった。

2-5 海外の大学との交流

韓国の蔚山大学校医科大学看護課程交流派遣学生受け入れと交流：

7月16日から20日までの5日間、蔚山大学からの交流派遣である学部生6名と同行教員2名を本学に受け入れた。来年度の相互交流の受入体制が検討課題として挙がり、見直しを行った。

本学からは8月20日から24日までの5日間、学部交流派遣として学部生6名を同行教員2名と共に蔚山大学に派遣した。交流の成果を記載したwebページを派遣学生が作成した。

2-6 若葉祭（大学祭）

若葉祭は、学生が自分たちの姿と「風の広場」のモニュメントのふたばとを重ね、ふたばが若葉になって成長していくことをイメージし、「若葉」のお祭りとして、「若葉祭」と命名している。今年度は20周年という事もあり、20年間の時代をつなぎ、人と人、大学と地域をつなぐ意味でテーマを「結」とし、学生全員が参加できるように平日に開催した。また、20周年記念事業の一環として、予防的家庭訪問実習の発表、風の広場の芝刈り（20th）、大分市（自殺予防対策）や大分県（エイズ対策）の展示、サークル紹介などを実施し盛り上がりを見せた。

2-7 創立20周年記念式典

本学創立20周年を記念する中心式典として、9月15日に別府ビーコンプラザで開催し、招待者、卒業生、在学生及び教職員等合わせて約550名が出席した。フィルハーモニアホールでの記念式典では、学長式辞、知事挨拶、来賓祝辞の後、関係機関及び実習施設等に対する感謝状の贈呈、名誉教授称号授与、スローガン及びロゴマーク募集の優秀者の表彰を行った。アトラクションとして、学生によるTAKIOソーラン（鐵心太鼓と共演）を上演した。続いてレセプションホールにて祝賀会を開催し、175名が出席した。その後、国際会議室において、看護国際フォーラムを開催した（2-4参照）。並行してホームカミングデイを開催し、卒業生、在学生及び教職員等50名が出席した。

3 教育活動

3-1 平成 31 年度看護学部入学者選抜状況

1)概要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学 部	学 科	入学定員	募 集 人 員				
			一 般 入 試		特 別 入 試		
			前期日程	後期日程	推 薦	社会人	私費外国人留学生
看護学部	看護学科	80 人	40 人	10 人	30 人	注1) 若干名	注2) 若干名

注1) 社会人の「若干名」は推薦の30人に含める。

注2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の40人に含める。

入学者選抜試験の概略

(単位：人)

区 分		志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
						計	県内 (%)	男性 (%)
特 別	推 薦	67	67	30	2.2	30	30 (100.0)	1 (3.3)
	社会人	0	0	0	—	0	—	—
	計	67	67	30	2.2	30	30 (100.0)	1 (3.3)
一 般	前 期	182	173	47	3.7	38	19 (50.0)	4 (10.5)
	後 期	166	62	16	3.9	12	6 (50.0)	0 (0.0)
	計	348	235	63	3.7	50	25 (50.0)	4 (8.0)
合 計		415	302	93	3.2	80	55 (68.8)	5 (6.3)

試験教科等

区 分		教 科	試 験 期 日	出 願 期 間
特 別	推 薦	総合問題、面接	平成 30 年 11 月 23 日 (金)	平成 30 年 11 月 1 日 (木) ~11 月 7 日 (水)
	社会人			
一 般	前 期	総合問題、面接	平成 31 年 2 月 25 日 (月)	平成 31 年 1 月 28 日 (月) ~2 月 6 日 (火)
	後 期	総合問題、面接	平成 31 年 3 月 12 日 (火)	

2)特別入学試験

① 推薦入試

大分県内の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。

② 社会人入試

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人入試を実施した（年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」により実施）。ただし出願者はなかった。

3)一般入学試験

平成 31 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに「総合問題」と「面接」により実施した。

日 程	教科名	科 目 名	教科・科目数	
前 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）	4 教科 6 科目	
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ・数学B』		
	理 科	「物理」、「化学」、「生物」、「地学」から 2 科目を選択		
	外国語	『英語』（リスニングを含む）		
後 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）	4 教科 4 科目 または 4 教科 5 科目	
	地 理 歴 史 公 民	「世界史A」、「世界史B」、「日本史A」、 「日本史B」、「地理A」、「地理B」、 「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」『倫理、 政治・経済』から 1 科目を選択		3 教科 3 科目 を選択 または 3 教科 4 科目 を選択
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ』、 『数学Ⅱ・数学B』から 1 科目を選択		
	理 科	「物理基礎」、「化学基礎」、「生物基礎」、「地学 基礎」から 2 科目を選択 または 「物理」、「化学」、「生物」、「地学」から 1 科目 を選択		
	外国語	『英語』（リスニングを含む）		

3-2 平成 31 年度大学院看護学研究科博士課程（前期）入学試験状況

1)看護学専攻

概要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。今年度より、修了後、県内で活躍を希望する優秀な本学学生を確保すべく特別選抜を広域看護学コースおよび助産学コースに設置した。

①特別選抜

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	実践者	広域看護学コース	若干名
			養成	助産学コース	若干名

試験の概略

(単位：人)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県 内 (%)	男 (%)
修士課程	1	1	1	-	1	1(100.0)	0(0.0)

試験科目等

試験科目	試験 期 日	出 願 期 間
小論文 面接	平成 30 年 7 月 18 日 (土)	平成 30 年 5 月 28 日 (月) ~6 月 8 日 (金)

②一般選抜

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	研究者養成		3名
			実践者 養成	NPコース	10名 (うち5名は 地域枠)
				広域看護学コース	5名
				助産学コース	10名
				看護管理・ リカレントコース	2名

試験の概略

(単位：人)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県 内 (%)	男 (%)
修士課程	42	42	29	1.4	26	15(57.7)	2(7.7)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成30年 8月25日(土)	平成30年 7月30日(月)～8月3日(金)

③一般選抜（二次募集）

概要

8月に実施した試験の結果、研修者養成、NPコースについて合格者が定員を下回ったため、1月に再度募集を行った。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	研究者養成		1名
			実践者 養成	NP コース	5名(うち3 名は地域枠)
				広域看護学コース	若干名

試験の概略

(単位：人)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県 内 (%)	男 (%)
修士課程	6	6	4	1.5	4	3(75.0)	1(25.0)

試験科目等

試験科目	試験 期 日	出 願 期 間
総合問題 面 接	平成 31 年 2月2日(土)	平成 31 年 1月7日(月)～1月11日(金)

2)健康科学専攻

概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材(看護職及び非看護職)を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等を対象に募集した。ただし、8月の募集では志願者がいなかった。

①一般選抜

募集人員

研究科名	課 程 名	専 攻 名	募 集 人 員
看護学研究科	博士課程(前期)	健康科学専攻	2名

試験科目等

試験科目	試験 期 日	出 願 期 間
総合問題 面 接	平成 30 年 8月25日(土)	平成 30 年 7月30日(月)～8月3日(金)

②一般選抜（二次募集）

概要

8月に実施した試験の結果、志願者がいなかったため、12月に再度募集を行った。結果1名が受験し、入学した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	健康科学専攻	2名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成31年 2月2日（土）	平成31年 1月7日（月）～1月11日（金）

試験の概略

（単位：人）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内 (%)	男 (%)
修士課程	1	1	1	0.5	1	1(100.0)	0(0.0)

3-3 平成 31 年度大学院看護学研究科博士課程（後期）入学試験状況

1)看護学専攻

概要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に募集したが、出願者はいなかった。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 口頭試問	平成 30 年 8 月 25 日（土）	平成 30 年 7 月 30 日（月）～8 月 3 日（金）

審査の概略

（単位：人）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内 (%)	男 (%)
博士課程	1	1	1	0.5	1	0(0.0)	0(0.0)

2)健康科学専攻

概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に募集したが、出願者はいなかった。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	2名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 口頭試問	平成30年 8月25日(土)	平成30年 7月30日(月)～8月3日(金)

3-4 平成31年度大学院看護学研究科博士課程（後期）進学審査状況

1)看護学専攻

概要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、本学大学院博士課程（前期）を平成31年3月修了見込みの者を対象に、学科試験（該当者のみ）、特別研究に関する発表及び出願書類を総合的に評価して選抜した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	若干名

審査の概略

（単位：人）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内 (%)	男 (%)
博士課程	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	0(0.0)

審査科目等

試験科目	試験期日	出願期間
学科試験 特別研究	平成30年 8月22日（水）	平成30年 7月12日（木）～7月20日（金）

2)健康科学専攻

概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、本学大学院博士課程（前期）を平成31年3月修了見込みの者を対象に、学科試験（該当者のみ）、特別研究に関する発表及び出願書類を総合的に評価して選抜したが、志願者はいなかった。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	若干名

審査科目等

試験科目	試験期日	出願期間
学科試験 特別研究	平成30年 8月22日(水)	平成30年 7月12日(木)～7月20日(金)

在学生の状況(平成30年4月1日現在)

学生総数 429名(学部生338名、院生91名)

(単位:人)

学	生 数				
	計	県内	県外	男	女
1年次生	89	62	27	6	83
2年次生	90	54	36	12	78
3年次生	79	48	31	4	75
4年次生	80	48	32	10	70
計	338	212	126	32	306
割合(%)	100.0	62.7	37.3	9.5	90.5
大学院博士前期(1年次生)	34	25	9	6	28
大学院博士前期(2年次生)	33	17	16	6	27
大学院博士後期(1年次生)	6	6	0	2	4
大学院博士後期(2年次生)	5	2	3	1	4
大学院博士後期(3年次生)	13	8	5	3	10
計	91	58	33	18	73
合計	429	270	159	50	379

3-5-1 生体科学研究室

1 活動方針

学部では、本学の教育理念の一つである「看護に関する専門知識・技術の習得とともに、科学的根拠に基づく問題解決能力などを養う」に沿って、人体の仕組みを解剖学的・生理学的・生化学的に理解し、その破たん状態（病気）の本質を十分理解する看護師を育成する。大学院においては、疾患の基礎となる生理学を細胞内のレベルまで深く掘り下げて理解し更に発展させることができる研究者および実践者を育成する。4年次生の卒業論文の作成の補助を行いながら、教員自身の研究を推進させる。その成果は、学会発表を国内または海外において年に1回以上行う。ある程度、成果がまとまったら、論文としてその成果を発表する。

2 教育活動の現状と課題

昨年度の課題として、学生が疾患を学ぶ際にも、生理学的背景を念頭に置いて学習する習慣をつけることが出来ていないことがあったが、生理学の講義の終了後に、特定疾患を用いて病態生理学に関する演習を行うことにより、生理学の意義を理解することが出来るようになった。課題は、人体の各臓器が神経および血管で繋がっていることを理解していないことである。大学院でのNP教育の解剖生理学・病態生理学の講義において、学生の能力の差が拡大し例年の講義では難解に感じる学生がいることが課題であったので、病態生理学における各学生が担当する疾患の数を削減した結果、深く疾患の病態生理を理解できるようになった学生が多くなった。課題は、就労学生が多いために、学習時間の確保が困難で、目標に達しなかった学生がいたことである。

3 研究活動の現状と課題

論文として発表することが課題であったが、昨年は論文で報告することができた。課題は、4年次生が卒論のテーマを理解することが困難で、研究の進行が遅いことである。

3-5-2 生体反応学研究室

1 活動方針

生体反応学研究室では教育活動に関しては、病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目の教育を担当している。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の薬理作用や病原微生物による生体反応を理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育を行っている。活動に関しては、外部の競争的研究費を

獲得し、積極的に英語の研究論文を海外の学術雑誌に発信していくことを目標にしている。

2 教育活動の現状と課題

平成 30 年度は平成 27 年度カリキュラムにおける生体反応学概論、生体反応学各論、微生物免疫論：1 年次生、生体薬物反応論 I：2 年次生、生体薬物反応論 II：3 年次生の講義と健康科学実験（血液検査・ラットの解剖・基礎微生物学実験）を行った。生体反応学概論と生体反応学各論では今年度より講義資料を学内ネットに上げて学生が何時でも使用できるようにした。薬理学と免疫微生物学では既に講義資料を学内ネットに上げている。学生には、解剖学や生理学と共にこれらの病理学、薬理学、微生物学が看護実践を行ううえで十分に理解しておくことの重要性を認識させ、講義を進めることが重要であると考え。しかし、基礎科目の解剖、生理、病理、薬理、微生物学の成績は看護の科目の成績に比べるとよくない。講義の進め方の工夫や講義の欠席者への対処が今後の課題である。

3 研究活動の現状と課題

例年と同様に今年度の卒論生 6 名を教員 3 名で、2 人ずつ指導することができた。生体反応学研究室の教員は外部の競争的研究費や学内の競争的研究費を獲得しているものの研究論文が少ない。研究業績（特に英語論文）は科研費等の競争的研究費獲得にも繋がるため重要である。積極的に英語論文を投稿して競争的研究費を獲得してゆくことを目指している。

4 その他

「夏休み子どもサイエンス 2018」（8 月 5 日、共催：大分大学、本学、大分県理科・化学教育懇談会 他）

4 年次生：北村遙佳、野田裕美、福原真実、帆足菜々香、吉住渚

大分大学で行われた上記イベントに 4 年次生が指導員として参加した。「色が変わる不思議な花」という実験テーマで、4 回に分けて、小学 4 年生～6 年生とその父兄、計 149 組に対し実験を行った。

3-5-3 健康運動学研究室

1 活動方針

科学的なものの見方や考え方などを学び、個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する。また、実際に運動を通して体を動かすことの楽しさを体感すると共に、健康・体力を増進するための運動量、運動強度を確保する。そして、自分に合った運動を見つけ、運動習慣を身につける。

さらに、ボランティアを通して様々なことに気づき、考え、今後の人生に活かす。

2 教育活動の現状と課題

学部の授業では、看護系の講義や実習を視野に入れ、社会と学生のニーズに配慮しながら、授業を構成している。特に、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れを考慮して、体験と科学的知見に基づいた教育を進めることを意識している。

1年次は健康運動ボランティア演習から始まる。この科目名には、活動を特徴づけるボランティアという語が使われているが、形態的にはサービス・ラーニングであり、教育と社会貢献の側面を半分ずつ有する。例えば、無償で人のために働く体験を通して、人間は何のために生きるか、自分はどうかを考へることを期待している。また、地域や社会のために人々と協力して何かをすることで喜びを感じ、人間としてごく自然な暖かい感情を育むこと、地域や社会の構成員としての自覚を確認し、相互に支え合うという意識を醸成することも期待している。このように、社会貢献活動を通して、生きていく上で大切な何かを自分で発見する授業である。

大学に入学すると身体活動量は低下し、特に一人暮らしになると、食事や休養の量、バランス、リズムが崩れ易い。これにより、体力の低下、ストレス亢進、自律神経活動の低下、肥満が懸念される。そこで、できるだけ実習を入れて体を動かす機会を増やすことを心がけている。1年次の健康運動では運動強度と運動量の確保のために、行動変容理論等を活用している。

また、2年次後期の健康運動学演習では、生涯スポーツにつなげるため、学生が自分の健康課題を見つけ、主体的に目的や目標を定め、自分に合った運動メニューを作成して毎週実施し、効果判定のための目標に合った計測を実施することで、科学の実証性やEBNを意識させた。また、授業時間の初めには、運動継続のためのヒントとして、行動変容理論を解説した。

大学院に関しては、可能な範囲で実習を入れ、体験を通して理解できるように努めた。

3 研究活動の現状と課題

今年から教授が理事、研究科長、センター長、監理官を兼任することになり、益々研究時間の確保が難しくなった。以前に慶應義塾大学と共同で実施した姫島村に関する共同研究は単年度の事業であったため、報告書では集計結果しか示せなかったが、最近このデータを再解析した結果、新たな知見が出てきたので学会で発表している。今年はこの研究に注目したNHKの取材を受け、NHK WORLD-JAPAN「Medical Frontiers Special - Search for Superfoods in Oita -」という海外向けの番組を通して、大分県の魅力を世界に発信することに貢献できた。近い将来、新しい知見をまとめて投稿したいと考えている。

3-5-4 人間関係学研究室

1 活動方針

本学の建学の理念の一つである「心豊かな人材の育成」を念頭に活動している。人と喜びや苦しみを分かち合うとともに、自他の独自性及び個別性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成し、教育活動を展開している。大学院教育においては、大学院生自身が、課題の設定から、研究方法を確定、調査（実験）の実施、資料解析、論文の作成を、主体的に行うことができるよう、個別にゼミを開催し、指導を行っている。

2 教育活動の現状と課題

人のこころに関する基本的な知識の習得、集団レベル・個人レベルでの人間関係の理解、対人援助技術の理解および体験を促す学習環境を構築することを目的として、教育活動を展開している。理解が表面的なものにとどまることのないよう、時間外課題を提示し添削して返却する、学習したカウンセリングスキルを実践する機会を提供する、ペアワークなど、事前に構成化されたアクティブラーニングの機会を積極的に取り入れている。学生が受け身にならず、放置されることもなく、教員のマネジメントの下に主体的に授業に参加する機会が十分に保障されていると理解する。

養護教諭養成課程の運営も担当しているが、養護実習Ⅰ、Ⅱ、教職実践演習の運営、教員採用試験への対応、進路ガイダンスの実施、県内実習体制の環境整備、文部科学省提出文書の作成などにより、相当の負担が発生している。まずは、どの時期に、どのような業務が発生するのか、その業務はマニュアル整備により分担可能な業務かなど、業務の精査が必要となるが、そのことに着手できていないという状況がある。完成年度を迎え、本学における養護教諭の養成が、本学の教育理念、ディプロマポリシーと整合性を保ちながら展開しうるのかについて検討も必要となってくる。

3 研究活動の現状と課題

研究室担当講義における教育実践を、京都大学で開催されている大学教育研究フォーラムで発表した。研究活動に関しては、大学院修士課程における課題研究や修士論文の指導（4名）、博士課程の学生（4名）の指導がメインになっている。母性衛生（印刷中）1篇、看護教育学学会誌（印刷中）1篇、看護理工学会誌（2019）。博士課程の学生を中心とした大学院生の指導と養護教諭養成課程の運営の両立が今年度の課題になる。

3-5-5 環境保健学研究室

1 活動方針

環境保健学研究室は、広義の意味での「環境」と健康との関係を科学的に理解するための基礎的事項と健康予防対策の考え方についての教育を行っている。いわゆる環境問題に代表される科学と社会の関係を理解するためには、自然科学的側面だけでなく、社会科学的側面、とくに倫理的側面、社会心理的側面は重要になってきており、これらの最新の動向を理解できるようにトピックスを取り上げ、掘下げる方法もとっている。一方、看護コアカリキュラムの教育項目に放射線が明記されたことで、本学が開学以来実施してきた放射線教育が他の看護系大学の参考になることが期待される。その一環として、看護教育者を対象にしたトレーナーズトレーニングを文科省事業として実施してきた。平成30年度で終了したので、引き続き、研究室独自の主催で看護教育者の放射線教育を進める。大学院教育では、放射線教育以外に、広域看護学コースの学生を対象に、「環境保健学特論」を教授している。最新の英語原著論文を活用することで、環境と健康に関する知見の原典に戻って、情報が知識となっていくまでのプロセスを理解できるよう配慮した講義を行っている。

2 教育活動の現状と課題

環境保健の基礎が多分野な内容を含むために、1～2年次生の段階では教育が難しい点がある。しかし、基礎からの勉強だけでなく、社会問題のようなトピックスから導入して、その背後にある様々な問題を理解するためには基礎的な知識が必要であることを知ることは勉強のモチベーションになる。さらに、3年次の演習「環境疫学・生物学演習」でアクティブに関わる授業は、問題意識を高めるとともに理解を深めることにつながる。作成したレポートをすべての学生に対して個別に指導することでより効果の高い演習にしていくことが必要である。

3 研究活動の現状と課題

放射線研究と環境保健の基礎をテーマに研究を続けている。福島事故や医療における放射線被ばくで問題となるがんリスクについては、環境省の研究費を獲得して、マウスを利用した放射線発がんの仕組みに絡む線量率効果の実験研究を研究室全体で取り組んできた。環境省の研究費が終了したことで、今後は九州内の大学研究者と共同研究の形で行う動物実験研究や細胞レベルの研究を進める。さらには、CT診断や放射線療法に関する臨床研究を大学院の研究指導の中で実施している。

4 その他

看護教育者を対象にしたトレーナーズトレーニングを文科省事業として実施してきた。平成30年度で事業は終了したので、引き続き、研究室独自の主催で看護教育者の放射線教育を平成31年度から同様のやり方を継続して進める。

3-5-6 健康情報科学研究室

1 活動方針

科学的根拠に基づいた看護実践の基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。

特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

2 教育活動の現状と課題

本年は、助教の離任から新任助手の着任まで9か月の間、メンバーが1名少ない状況を経験した。学部教育では、演習については例年通りの良好な到達水準を維持することができ、疫学・保健統計学に関する教育については授業内容の精選や小テストとフィードバックの改善などで学生の理解も評価も若干の改善をみた。しかし、統計学については専門家の教員が不在の状態で進行する部分が多かったため、順調と言えない部分もあった。また、卒論などの研究指導についてもメンバーが少ないことの影響はあったと考える。メンバーが3人に戻った今後、さらに教育内容と方法の改善を進めたい。

大学院教育においては、統計学の専門家が不在という状況で、生物統計学関連の教育に関する改善は進んだとは言えないが、おおよそ昨年と同水準の教育を維持できたと評価する。昨年度から検討している改善策を今後さらに検討し、実施していくことが必要である。

3 研究活動の現状と課題

新任の助手を除く2名は従来からの研究テーマを継続的に発展させて、それぞれ成果を業績として公表する段階に達している点で、順調と評価する。ただし、新たな研究テーマについての展開はこの1年はみられず、個人としても新メンバーも含めた研究室全体としても新たなテーマを探索する、看護領域との共同研究テーマを推進するという前回もあげた課題に対応していくことを必要としている。

3-5-7 言語学研究室

1 活動方針

言語活動の四技能である Speaking, Listening, Reading, Writing をバランスよく伸ばすことを念

頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション (Speaking, Listening) に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるように、CALL (Computer Assisted Language Learning: コンピューターを用いたウェブ学習システム) による TOEIC 対策英語学習プログラムを実施している。

2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション (Speaking, Listening) を練習する。1年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題 (Food, Shopping, Home, その他)、2年次生の講義内容は、看護英語である。各話題について3~4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換するなどの言語活動を行う。また、1年次生前期の授業では、CALL 学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL 学習を行なう。1クラスを2グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声 CD で確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてることが課題となり、次週には実際に暗唱 (含む筆記) できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数 100 万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生 (1~4年次生、大学院生) が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALL システムによる TOEIC 対策のための英語学習、学習期間前後の TOEIC IP 試験を実施している (前期: 1年次生必修。後期: 全ての学生を対象に希望制にて実施)。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

CALL システムについては、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月のオープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際に CALL システムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索し

ている。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

3 研究活動の現状と課題

米国ナースプラクティショナー（Nurse Practitioner: NP）制度の創設に尽力されたフォード博士へのインタビューから、今後の NP の方向性を検討するための示唆をまとめた論文を日本 NP 学会誌に投稿し、学会員へ提供した。今後は、卒論生の研究成果についても関連学術誌へ投稿する予定としている。

3-5-8 基礎看護学研究室

1 活動方針

本学の教育理念に基づいて、基礎看護科学講座の1領域として、「看護」「人間」「健康」「環境」の4つのメタパラダイムについて原理原則を習得させることを研究室の活動方針としている。教室員は常勤職員4名、非常勤職員1名の計5名である。職位と年齢構成との関係もよく、それぞれが個性を生かしながら、4年間での看護師教育の充実を教室員全員の共通目標にしている。様々な志望動機を持つ学生に対して、看護専門職について理解させ、将来の進路に対しても方向づけができるように、教材の準備には時間を割いている。学生の基礎看護技術の習得不足を改善するための反復学習システム環境の充実を目指して取り組んでいる。また各学期の終わりには実習室やリネン類及び備品等の整備を十分に行い、授業が効率的に進められるように配慮をしている。また大学院に関してはより高度で専門的な看護学とその関連領域の科学を保健・医療・福祉の視点から捉え、より広い知識と見識をもって社会に貢献できる看護の専門職の人材を育てることを目標に教室員全員が結束して努力している。

2 教育活動の現状と課題

今年度の1年次生は昨年度と同じ83名であったが、実習施設の受け入れ開拓や学内演習のグループ編成等にも配慮しながら、効果的な学習ができるように努めた。また臨地実習指導等で教室員が不在になる場合にも、不在を補えるように全員が卒業研究すべてに知悉し、多くの時間を費やして指導した。初期体験実習や基礎看護学実習などの実習要項の検討などを十分に行い、学生の学習効果を第一義とし、初学者である学生に看護師という専門職について理解させ、将来の進路に対して、より具体的なイメージや方向づけができるように教材の準備や精選に教室員全員で取り組んでいる。しかし、臨地実習指導で教室員が不在になることを避けるために、生活援助論や医療技術論等を前期に圧縮して実施し、さらに1年次生、2年次生の同時展開を改変することができず、今年度も1日4コマを週2日間、連日実施となっていた。このことによる教員の疲労軽減や授業効果等の検討が十分

ではなく、次年度への課題として残されている。

3 研究活動の現状と課題

研究室全員がそれぞれの研究課題に向かって鋭意努力を続けて、常に論文投稿を目標にして取り組んでいる。科学研究費だけではなく、その他の外部資金にもできるだけ、応募するように努めている。5名それぞれの研究分野は現在、異なっているが、今後、可能な限り、全員が共同研究できるように領域を広げ、関連分野を模索しながら、研究室全体で取り組めるような研究体制の構築が課題である。

3-5-9 看護アセスメント学研究室

1 活動方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的としたカリキュラムを実施している。看護の基盤となる人間科学講座で学修した内容との接続を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点で根拠に基づくアセスメントができることがねらいである。看護アセスメント学研究室の担当科目は、1年次、2年次の履修科目が多く、基礎的な理論や科学的な見方、クリティカルシンキングなど、エビデンスを追及する姿勢とともに、看護への関心、喜びなど感性を高め、専門領域に繋げるという教育的役割があると考えている。現在教授している具体的な科目は、看護疾病病態論Ⅰ、看護疾病病態論Ⅱ、ヘルスアセスメント、看護アセスメント概論、看護アセスメント演習、看護アセスメント学実習である。看護疾病病態論Ⅰ、看護疾病病態論Ⅱでは、主要な疾病の理解や病態の理解、さらに「ヘルスアセスメント」においては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる基礎的能力を身につける。看護アセスメント概論、看護アセスメント演習は、看護過程の展開の基礎的能力が身につくことを目的とし、講義および演習を組み合わせて、知識の習得を段階的に行っていく。事例を通して個人およびグループワークにより看護過程の展開をする。2週間の看護アセスメント学実習では、受け持ち患者と関わり、初めて実際の患者に対して看護過程の展開を行うことを通し、自己の課題を明確にし専門看護学領域の基盤とする。

大学院教育においては、フィジカルアセスメント学特論、看護アセスメント特論、基盤看護学演習など、根拠に基づくアセスメント、臨床推論能力を高めることを方針とする。

2 教育活動の現状と課題

学生の学びの達成度を評価しつつ、授業の目標、授業構成、授業方法などの見直し改善を行っている。看護疾病病態論やヘルスアセスメントなどフィジカルに関する科目はメカニズムが押さえられるように工夫し、筆記試験は過去問による断片的で暗記の知識にならない学習を意図し、試験問題は

学生に返却し、毎回新たに試験問題を作成している。さらに看護アセスメント概論、看護アセスメント演習など、人間の見方を身体以外の心理、社会面まで統合して人を包括的に捉えることの重要性を教授している。また看護アセスメント概論、看護アセスメント演習、看護アセスメント学実習では、看護過程の理論を活用し、患者を理解し、よりよい看護実践ができることを目標としているが、看護過程の展開自体が主眼とならないよう指導が必要な場面もある。前年度の看護過程の演習では、理論的根拠や思考のプロセスに課題があった。そこで、演習の仕方やフィードバックの仕方に改善を加え、患者の状況や症状がイメージできるよう DVD の視聴をしたのちに、看護過程の展開をするなど工夫を行った。さらに看護アセスメント演習のグループワークでは特にグループメンバーが皆で病態のメカニズムについてディスカッションできるよう教授法を工夫した。また、実習を含む看護過程の科目の評価をルーブリック評価に切り替えた。

なお、看護アセスメント学実習直前の突発的なイベントにより、看護系教員から実習サポート体制の協力を得た。また実習目標の変更や実習時間の変更などの臨機応変な対応を行い、学生の学習が円滑にできることを主眼におき実習運営を行った。

課題としては、病態の理解、症状のメカニズムの理解のさらなる強化が必要である。今後は、人間科学講座の教員とも連携をとりながら、重要な知識やメカニズムの理解の積み上げや統合ができるような授業の工夫が必要と考える。

3 研究活動の現状と課題

卒業研究や課題研究の指導により、各分野の研究の幅を広げている。それぞれの教員が、自己の専門的研究領域で研究を推進している。3名は科学研究費を取得し、研究をそれぞれ遂行して研究発表を行った。今後はこれらを、論文投稿し積極的に公表していく。

3-5-10 成人・老年看護学研究室

1 活動方針

成人・老年看護学の学習は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護援助論・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人・老年看護学実習の各教科を設定している。概論では成人老年領域の発達段階や保健に関すること、理論について学び、援助論では専門的知識を習得するとともに、実践する力を養うために、ディスカッションやグループワーク、ディベート等を設け、学生が思考する学習方法を取り入れた。さらに成人・老年看護学演習において、健康段階の特徴をとらえられるように、急性期・慢性期の模擬事例へのケアについて考え学びを深め、ロールプレイを通して学生自身が看護の模擬体験をする機会を取り入れるよう取り組んでいる。また、大学院では老年 NP コースを運営し、NP 論、老年 NP 論、老年アセスメント演習、老年薬理学演習、老年 NP 実習 I II III と講義・演習・実習の構成の中で教授している。老年 NP という新しい看護の役割につい

て責任をもった自律性のある高度実践看護師の育成に取り組んでいる。

2 教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、学習範囲は非常に広範囲にわたっている。代表的疾患を持つ対象者の生活と看護を理解するための理論を主体的に学習し思考を深められるように科目を構成し、卒業時の成果につながっている。しかし、幅広い年齢層の対象理解や多様な疾病とその治療方法や援助方法の理解を学生が主体的に学習する必要があり、それを助けるために、ナーシングスキル等の e ラーニングを活用した学習の導入を試行している。大学院では特に遠距離学生が学べる体制づくりが必要であり、学生との通信ネットワークを用いた対応などフィードバックを強化することが今後の課題である。

3 研究活動の現状と課題

成人・老年看護学では認知症や糖尿病などの慢性期疾患看護、急性期疾患看護、NP の活用成果に関するものなど幅広く各教員のテーマによる研究を行っている。引き続き、国内外での研究成果の公表を強化することが課題である。

3-5-11 小児看護学研究室

1 活動方針

小児看護学の教育活動は、2年次生と3年次生に専門看護学として、対象とする小児に関する小児保健と小児看護の特殊性を理解でき、実習後には小児と家族への関心を深め、隣地で看護実践する能力を身につけることをねらいとしている。そのため、講義では小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、演習では小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学実習では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族の関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができることを教育や指導をしている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。小児看護学研究室の研究活動に関しては、学外や学内の競争的研究費を獲得し、研究論文を積極的に学術雑誌に投稿することを目標にしている。

2 教育活動の現状と課題

2年次前期に10コマ1単位で行う小児看護学概論、2年次前期に2単位20コマの小児看護援助論と15コマの小児看護学演習を行った。2年次前期の概論では、小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課

題を学ぶ。学生が自分自身の「子ども観」をレポートし、自己の子ども観を認識するように工夫している。3年次前期はより小児看護の専門的な講義と学内演習を通して、学生は多くの小児に関する学びを深める。3年次後期は、それまで学んだ専門的知識を臨地実習で実践し、看護場面に知識を応用する。学生が初めて対象である小児とその家族に出会い、小児看護とは何かを悩みつつ、看護職あるいは子どもの成長を支援する大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長するようにカリキュラムを構成している。

近年の学生は、兄弟姉妹も少なく周囲に子どもがいない、また子どもに接したことがないという学生が少なくない。講義では視聴覚教材を多用して、子どものイメージを持つことができるように配慮している。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時間に質問に答え、学生の疑問を残さないようにしている。学生は出席重視を伝えており欠席は少なく意欲的に受講していた。

3 研究活動の現状と課題

小児看護学研究室では、小児看護の中でも小児がん看護の研究や、小児保健分野の予防接種関連の研究や幼児後期の食行動と保護者の食育意識の研究、また、小児在宅医療に関連した医療的ケアの研究を軸に取り組み、学部4年次生には課題を提案し協働した。平成30年度は、継続している学外の研究費助成金を基に、小児の訪問看護師に対して行った介入研究を学会発表等で発信した。大学院では、地域保健師コースと助産学コース、管理・リカレントの学生6名を担当し指導した。今後は、学会発表等の活動と論文投稿することを継続し、大学院で実施している小児NP教育活動に関連する研究を系統的に行うことが課題と考えている。

4 その他

ボランティア活動：糖尿病サマーキャンプ（Young Wing Summer Camp）は、糖尿病をもつ子どもを対象とするキャンプで、学生10名が県内の大分大学、別府女子短期大学等の学生や医師、看護師等と協働して運営に参加した。キャンプの活動は、同じ病気をもつ子どもの仲間づくりや、病気の正しい理解や自信を持たせるという目的がある。学生は5月から、8回の事前ミーティングをもち企画や役割を担い、8月16日～20日まで活動を支援した。教員1名がキャンプに1日参加して学生を支援した。

3-5-12 母性看護学研究室

1 活動方針

母性看護学では、学部教育において、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶこと

を目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護援助論Ⅰ、母性看護援助論Ⅱ、母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

2 教育活動の現状と課題

母性看護学の講義時間数は平成 27 年度カリキュラムによって 10 コマ減少した。母性看護学演習に講義内容を含めて知識の充実に努めたが、母性看護学実習において、事前学習や知識の習得が足りないことが課題であった。今年度は母性看護学演習に TBL を取り入れて、妊娠期の異常と産褥期の看護についての演習を強化した。また、実習前に課題を学生に提示し、学生は学習内容を各自整理してから実習に望んだ。

また、実習期間中に各施設における分娩や産褥婦、新生児などの経験値が異なるとの課題があがっている。今年度は分娩例数が昨年度よりもさらに少ない施設があり、今後に向けて実習施設を開拓する必要がある。

3 研究活動の現状と課題

母性看護学研究室は、睡眠や生活活動量を用いた研究、産後ケアに関する研究、父性に関する研究、性教育、受胎調節、家族計画に関する研究に取り組んでいる。今年度は大分中村病院の医師、看護師、理学療法士とともに「産後骨盤底症状に関する調査」の共同研究に取り組んだ。来年度は研究成果の報告を行い、産後 1 ヶ月、6 ヶ月、12 ヶ月の縦断調査を行っていきたい。

3-5-13 助産学研究室

1 活動方針

大学院助産学コースは、高度な判断力と実践力をもつ自律した助産師を育てることをめざしている。助産師が専門職として社会に対して果たすべき役割について理解し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術、またリプロダクティブ・ヘルスを推進するために他職種との連携・協働、社会資源の活用能力を身につけさせるための教育を展開している。特に、模擬事例を用いたシミュレーションや体験型の演習、段階的 OSCE を取り入れた技術試験などの教授方法を実施している。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけることを目指し、個別面談や他学年を交えた発表や交流の機会を設けディスカッションの場としている。

研究活動は、各教員のテーマを深め研究力をつけること及び卒業研究、課題研究の指導をととし

て、学会発表や論文投稿を行い、助産学領域全般の研鑽を積むこととしている。

2 教育活動の現状と課題

大学院助産学コースの助産学専門科目は、主に昼間に教育を実施している。学生は、夜間に共通科目を履修しており、1年次の前期は昼夜にわたって講義・演習があることから課題の重複や体力・健康面の維持なども含めて教員は支援している。段階的 OSCE により臨地での多重課題に混乱する場面は減少しているが、学生個々の対人対応能力や学習量にもよるため、個別に応じた指導を実施している。2年次生は、4月に分娩介助の OSCE（再 OSCE3回）を実施したのち、5月から7月にかけて11週間の実習を行い、個人差はあるものの実習目標を概ね達成できた。今年度は、扁桃腺炎や熱中症の症状で1～4日欠席が4人、持病の頭痛悪化で夜間救急受診し自宅安静で6日欠席した学生が1名いた。昼夜を問わない実習であるため、心身の疲労を含めた体調管理を全教員で引き続き支援していきたい。2年次後期には、地域で生活する母子の支援や助産所助産師の自律した助産ケアの実際を経験し、助産師としてのアイデンティティの基礎を形成することできた。課題研究は指導を受けながらまとめ、全員提出し成果を報告したが、指導教員の指導の受け方等社会人としての態度に課題のある学生もあった。今後、関連学会等で発表または投稿する予定であるため支援していく。今後は、現在実施している段階的 OSCE の評価を行い、大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させるための方略を検討しながら、引き続き教育内容を修正し、カリキュラム全体を見直していく。

3 研究活動の現状と課題

教員全員が学内外の研究費を獲得し、各自の課題を探究し続けており、関連学会等で発表、投稿している。卒業研究は、教員の研究テーマとは直接関係しないものの助産学の発展の基礎となる研究を行なった。課題研究は、主または副指導教員として指導に携わり、共同研究者として関連学会で発表、論文投稿し成果を残している。過年度修了生の論文を投稿するべく継続して支援していくことが課題である。

4 その他

大分県母性衛生学会事務局として通年で活動した。

3-5-14 精神看護学研究室

1 活動方針

学部教育の基本目標は、1)精神科領域だけでなく他のさまざまな場での精神看護、2)対象者の社会

参加・自己実現や生きにくさに焦点を当てた看護、3)看護師自身の特徴や治療的人間関係に留意した看護、及び 4)医療のみならず保健・福祉サービスとの連携を意識した看護について、学生が習得できることである。そのために、講義・演習・実習が一連の流れとして接続するよう、研究室内で連携しながら授業構成をしている。卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮し、4名の学生を担当した。教員の研究については、それぞれの専門領域を生かしつつ、行政や病院と協働で研究を推進できる体制の構築を図っており、複数の協力フィールドの開拓に向けて働きかけた。

大学院では、精神看護学特論、メンタルヘルスト論、看護政策論、看護コンサルテーション論などを担当している。広域看護学コースの精神看護学特論は、国家試験出題範囲にとらわれず、保健師の地域・職域精神保健活動の実際に必要な内容を扱っている。それ以外の科目は、大学院各コースの共通科目に指定されている単位が多いので、履修者全体の関心とニーズに対応する授業内容を目指している。

2 教育活動の現状と課題

学部の教育内容について、国試の出題基準をふまえた見直しを図り、心の健康と疾患、精神医療・精神看護の歴史と現状、治療的環境と看護の役割、社会と精神看護の関係などに関する例年の内容の中で、防衛機制や法制に関する内容を強化した。学生がイメージできるよう視聴覚教材を多用し、具体的な事例や参考資料を用いながら、アクティブラーニングを実現できるよう努めている。演習では、紙上事例演習の課題をブラッシュアップし、体験的学習、実習施設や家族会・NPOのスタッフによる活動紹介などの基本構成を維持しつつ、続く実習への準備性を高めるようにした。各実習施設と緊密に連絡をとりつつ、病棟実習と障害福祉サービス事業所での実習を前年同様の比重で展開した。卒業研究では、学生の関心・能力と計画の実現性をすり合わせ、卒論完成後も国試に至るまで支援を続けた。

大学院生では月2回程度のゼミで、文献抄読、研究計画やデータ分析に関する討論を行い、院生のトレーニングを行った。審査が長引いていた博士論文1点と、修士論文1点が合格となった。

3 研究活動の現状と課題

大学院生や学外の病院・企業・自治体と協働して、自殺予防、交替勤務と睡眠、精神障がい者のリハビリテーション、コミュニティでの看護教育、環境心理学等の領域で研究活動を展開した。自殺予防に関しては、大分市・豊後大野市の住民調査データに基づく論文を作成し、投稿中または投稿準備中である。交替勤務者の夜勤時眠気に関する調査論文が掲載され、続報を投稿準備中である。看護師の勤務時の眠気に関しては、新たに科研費を獲得したので、活動量測定機材を購入し、次年度の調査に向けて基礎検討を開始した。コーピング特性簡易評価尺度思春期版の作成に関する論文を公表した。予防的家庭訪問実習を通じて初年度に学生が学んだことに関する英文論文が、*Public Health Journal* 誌に掲載された。WHO Euro が公表した騒音と健康に関する新ガイドラインの評価に関する検討会（環境省から騒音制御工学会への委託事業）に参加し、睡眠等の心理社会影響に関するレ

ビューを行った。精神科病院と協働して進めている、精神障害者の社会参加に向けたリカバリー支援心理教育（IMR）の効果評価についての研究成果を学会発表し、論文が掲載された。患者の拘束に関する看護者の意識調査も、日本精神科看護協会の大分県支部推薦を受け、学会で発表し、論文が掲載された。また精神科病院スタッフによる九州精神医療学会での研究発表を支援した。

4 その他

複数の学会の役員および編集委員として、学術活動に貢献した。また、日本精神科看護協会大分県支部の役員として、県内の精神科看護師への教育や研究の支援を行った。大分アクションフォーラムの実行委員として、様々なアディクション（嗜癖）問題を抱える当事者や家族の支援を行った。リカバリー支援心理教育（IMR）の普及として、精神科病院デイケア以外に県内の精神科クリニックでの導入を支援した。大分県、大分市、豊後大野市、別府市、日出町の自殺対策連絡協議会等に参画し、各地域の自殺対策計画の策定と推進に協力した。

3-5-15 保健管理学研究室

1 活動方針

学部教育では、学生が看護管理学や在宅看護論等の講義、演習、実習を通して、マネジメントや在宅看護について理解を深める教育を重視した。学生が、地域で生活する在宅療養者や家族に看護を提供できるよう各科目では、学生の主体性を引き出す教育を心がけた。

大学院教育では、看護管理・リカレントコースをはじめ、多様なコースの学生へ看護管理学に関する教授を行った。看護管理特論では、学生が、看護管理演習や課題研究を通して、講義で得た知識を活用しながら、演習や研究に取り組み、実際の現場でマネジメントスキルを高められるようにした。

2 教育活動の現状と課題

学部教育の看護管理概論では、学生が実習等の経験を振り返りながら、看護管理についての基礎知識について理解を深められるようにした。在宅看護論では、講義に加え、終末期の事例について演習を行った。学生は終末期の在宅療養者に対する看護について、ロールプレイを通して学びを深めた。在宅看護論実習では、学生が学内で学んだ内容を応用し、自ら考えて看護を提供できるよう、隣地指導者の協力も得ながら教育を行った。また、大学院教育では、マネジメントの理論や分析について討論を含めた教育を行った。学部と大学院の教育について、学生が、各学年で行われる教育を積み重ね、知識と技術を高められるよう、今後も創意工夫を行っていくことが課題である。

3 研究活動の現状と課題

学部の卒業研究については、5名の学生に保健管理学研究室の教育に関連したテーマで研究指導を行い、成果を得た。学生が主体的に研究に取り組めるよう今後も教育を行っていく。大学院の研究では、担当教員が各学生へ指導を行った。看護管理学や在宅看護論等に関する研究成果が得られ、学会発表を行った。今後は論文の公表を行う。

3-5-16 地域看護学研究室

1 活動方針

学部では、看護の対象を個人から集団、地域へと視野を広げ、看護の活動の場を地域に拡大し展開できる看護職の育成をめざしている。地域全体を包括的に捉え、生活の場での看護や生活に目を向けた看護職育成への社会的要請を反映し、すべての看護職者の基礎的知識として「地域看護」の思考を持った看護師を育成する。大学院教育では、少子高齢社会における生涯を通じた健康づくりの支援や、産業・学校を含む地域全体を対象として活動できる保健師の育成をめざしている。また、社会変化に対応し、新人期から困難事例に対応できる能力、新たな取り組みを企画立案できる保健師を育成する。

2 教育活動の現状と課題

学部では、4年次前期の地域看護学実習において地域の健康問題を踏まえた活動内容が理解できるよう、実際に学生が実習を行う市町村の既存の資料を基に、地域看護診断を行ってきた。昨年度は、コミュニティ・アセスメントの考え方を活用し、3年次後期の地域生活支援論で実習地のデータにアクセスする演習を取り組み実習と連動した学習を強化した。

大学院の実習は、学生・教員・自治体（企業）が一体となって行っており、テーマ設定の場面から、学生の関心のあるやりたいことと、実習地が直面している「現代進行形の健康課題」などについて打ち合わせを行って、一緒に考え、実習に臨むなどの工夫を凝らして実習テーマを決定している。この形式で5年目となり、初年度に学生がかかわった課題に期間を経て別の学生が取り組む事例が生まれ、保健師がかかわる事業の発展の過程を学ぶことができ、県内の保健師活動の積み上げに学生実習が連動できる可能性がみえてきた。今年度は2年生8名のうち5名が県内で保健師として採用された。県内への保健師採用募集人員と比較した保健師需要には現在の定員数では十分とは言えないが、次年度も県内保健師活動と連動した実習を行い、県内に定着する保健師育成をめざしていくことが必要である。

3 研究活動の現状と課題

学部では、4年次生の卒業論文、大学院生の実習を「日本地域看護学会」、「日本公衆衛生看護学会」、「日本公衆衛生学会」等の学会での発表や全国の大学院修士課程保健師養成の学生との交流会を持つなど、活発に研究活動も行っている。修了生の課題研究においても、学術誌投稿中および「日本公衆衛生学会」での発表を行った。次年度も継続して課題研究や実習の成果を学会発表や雑誌投稿していきたい。

3-5-17 国際看護学研究室

1 活動方針

国際看護学では、世界の人々を看護の対象と捉え、1) 地球規模の保健医療に関する課題について理解し、その直接的・間接的要因や、課題に対する地域／グローバルな規模での対策について学ぶこと、2) 日本国内でも急速に多様化する対象者の文化・社会的背景に着目し、文化に配慮したケア (Transcultural Nursing) について学ぶことを目的としている。科目は、国際看護学概論、国際看護比較論、国際看護学演習で構成し、講義と演習のつながりを意識して組み立てている。グローバルヘルスの課題や対策の背景は複雑であるため、複眼的な視点を持ってもらえるよう留意している。また、グローバルヘルスの現状と課題に関する最新かつ包括的な情報は、国際機関のホームページ等から得ることができるため、信頼できる情報源から英語で情報を得る力も身に付けられるよう配慮している。

大学院では、国際看護学特論などを担当している。国際看護学を学部で学ぶ機会がなかった受講生が多いため、グローバルヘルスの基本的な枠組みや視点を伝えるとともに、受講生の研究テーマに沿い、ニーズに対応した内容を目指している。

2 教育活動の現状と課題

学部の講義では、看護の対象を日本のみならず世界に広げて考えることができるよう努めている。世界中に存在する保健医療における格差、世界の中で見た日本の保健医療の特徴など、看護に関するグローバルな視点の獲得を目指している。開発途上国における感染症のパンデミック等、実感をもって理解しづらい内容については、WHO等の国際機関がホームページ上で提供している視聴覚教材や、具体的事例を活用している。また、開発途上国での看護実践や、国内臨床現場での在留・訪日外国人に対する看護実践についても学べるよう、外部講師を招聘している。今後も学部の講義・演習が卒後の実践に役立つ内容となるよう、工夫を重ねていく必要がある。

大学院の講義については、大学院講義として基盤となる内容を整理し、その上に受講生の研究テーマに沿った内容を積み上げられるよう準備する必要がある。

3 研究活動の現状と課題

学部生の卒業研究では、3名の学生を担当し、日韓の比較研究や、在留外国人母親に関する質的研究、英語文献研究を行い、成果を得た。学生と共に、今後学会等で発表の機会を得ることが課題である。日韓の比較研究については、今後ディスカッションを深め、英語論文として発表できるよう発展させる必要がある。今年度8月から日本人教員2名体制となり、それぞれの研究テーマを深め、国内外の学会等で発表していくことを目指している。

4 その他

大分県国際交流プラザ、JICA デスク大分から国際交流に関するイベントをご紹介いただき、学生・教職員に発信している。

3-6 学部科目

人のこころの仕組み

1 年次前期

吉村匠平

外界の対象や自分自身を認識する存在として人間の機能の特徴、2年次前期「行動療法と発達心理」の理解に必要な学習心理学の基本的知識について、講義時間内の小実験・動画視聴、ペアによる話し合い活動を通して、修得する機会を提供した。毎時くじ引きによる座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを積極的に取り入れ、学生間の交流を心掛けた。時間外学習の機会として、毎時講義終了後にショートレポートの作成を求め、次回授業時に返却した。講義に先立って評価基準を学生に開示し、学習到達状況を個別に確認できる環境を構築した。

コミュニケーション論

1 年次前期

関根剛

本講義は、1 年次生にコミュニケーションの基礎となる、行動観察や自己理解、プレゼンテーションなどの講義を通じて、情報の「受信」「理解」「発信」という構造で解説を行ない、プロセスレコード理解につながるよう配慮して行った。また、講義終了後、質問・感想を提出させて学生の講義の理解を確認するとともに、次回、質問に回答して講義理解を深めたりしている。

また、構成的エンカウンターグループにより体験的にコミュニケーションの重要さと自己理解の機会を持たせた。さらに、「受信」として行動観察、「理解」として文化、「発信」としてプレゼンテーション、手話、「受信—理解—発信」を総合的に理解するためにプロセスレコードの講義を行った。

講義展開においては、討議や演習を多く取り入れた。また、授業理解や、それぞれの価値観や考え方の違いを感じさせるために、クリッカーを用いた即時フィードバックする方法を導入した。

評価は、試験及びレポートにて行った。

英語 I -A1

1 年次前期

宮内信治

英語の音声については、発音記号と発声法を確認し、練習させてその定着を図った。講読では、20 世紀のエッセイ、文学、哲学を題材にした英語名文集をテキストとして用いた。併記されている日本語訳を参考に、その解釈に至る基本的な文法の理解を深め、添付の音源 CD を活用してス

ムーズな音読の習得を目指して練習させた。学んだ英文を帳面に書写し、次回講義までに音読暗唱でできるようにすることを課題とした。講義後半で、易しい英語で書かれた書籍を自ら選択して読む多読を実施した。英語を通して世界に通じる教養を体得できた。

英語 I – B 1

1 年次前期

Gerald T. Shirley, Yume Takano

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

環境保健学概論

1 年次前期

甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央

環境保健学概論は環境保健の基本的な考え方や、環境中に存在する様々な有害因子と健康影響との関係を理解するための方法を中心に講義をしている。健康影響として環境保健上注目されるがんを中心に取り上げ、環境との関係について最新のトピクスと関係づけて講義を行うことで、環境リスクという概念の理解を助けるような講義となるように努めた。

健康情報学

1 年次前期

佐伯圭一郎

保健統計・疫学領域から内容を厳選し、保健統計指標の意味と現状、EBN の基礎となる疫学の基本的な考え方を中心に講義を進め、「健康情報処理演習」において演習課題を組み込んで、理解の定着と応用力の向上を図った。

内容に対する興味関心や満足度が低いという昨年度の授業アンケートの結果を踏まえ、授業の中で具体例を増やして看護との関連を示すことや、小テストおよび演習課題の内容を整理して基礎的な部分をしっかりと理解するように計画した。その結果、授業アンケート結果については改善

がみられるものの、昨年度と同難易度の筆記試験に関しては平均点の若干の低下がみられた。来年度に向けて、評価の基準を再検討するとともに、学生の興味関心を維持したままで、ある程度深い理解を助けるよう教授法の改善を続ける必要がある。

健康情報処理演習

1 年次

品川佳満、渡邊弘己、佐伯圭一郎

看護職に必要な ICT（情報通信技術）のスキルや知識について教授した。各種アプリケーションの操作、データ管理、Web 技術、画像処理、データベースの利用等については、実際にコンピュータを使った演習により技術の習得を図った。コンピュータやネットワークを安全に活用するために必要な情報セキュリティや個人情報の取り扱い等の情報モラルに関すること、看護師が医療現場で扱う病院情報システムについては、講義形式で教授した。また、「健康情報学」、「生物統計学」で学んだ講義内容の理解を深めるために保健統計・疫学・統計データの分析を演習に組み込んだ。

統計処理で利用するソフトウェアについては、プログラミング言語であることから十分な習得が難しい部分があったため、次年度については、演習時間を増やし対応する予定である。

生体構造論

1 年次前期

濱中良志、岩崎香子

現状においては、人体の構造（解剖学）について、1 年次生は意味づけをしないで丸暗記する傾向にあり、短期記憶にとどまっていた。そのため、**active learning** の一環として、1 年次生を 12 グループに分けて、基礎看護学研究室・看護アセスメント学研究室の協力を得てチューターを一人ずつ配置し、事例シートを通して人体の構造（解剖学）事例シートを通して人体の構造（解剖学）に関する議論を教授した。

生体機能論

1 年次前期

濱中良志、岩崎香子

現状においては、人体の機能（生理学）について、1 年次生は、莫大な量を処理すると感じていたため、理解するべきところを単純暗記に切り替えて学習する傾向にあった。そのため、**active learning** の一環として、1 年次生を 12 グループに分けて、基礎看護学研究室・看護アセスメント学研究室の協力を得てチューターを一人ずつ配置し、事例シートを通して人体の機能（生理学）に

関する議論を教授した。

健康運動ボランティア演習

1 年次

稲垣敦、吉川加奈子

教員から学生に相応しいボランティアイベントを募集した後、学生に 29 のイベントを提示して希望調査を行って調整し、各学生が 3 つのボランティアを体験し、ボランティア参加毎にレポートを作成した。また、救命救急法の講義と実技を受け、日常の救急場面に対応できる知識と技術を身につけた。

自然科学の基礎

1 年次前期

甲斐倫明、小嶋光明、岩崎香子、定金香里、吉田成一、佐伯圭一郎、恵谷玲央

自然科学の基礎は看護学を専攻する学生の基礎教養として生物、物理、化学、数学の基本的事項を講義している。高校までに十分に習得できなかった項目を学ぶと同時に自然科学の考え方を理解できるように努めた。講義の終わりに確認の小テストを行い、学生の理解度を把握しながら講義を進めた。

大学ナビ講座

1 年次前期

藤内美保、安部眞佐子、石本田鶴子、甲斐倫明、影山隆之、関根剛、濱中良志、南保昌孝、村嶋幸代、吉村匠平

1 年次早期に開講することで、大学で学ぶために、リテラシーと呼ばれる身につけておくべき基本的な事項および技術を習得することを目的とした。内容は、「大学とはなにか学ぶこと考えること」「アルバイトリテラシー」「メモ・ノートの取り方」「大学カリキュラムの方針・考え方」「図書館利用法」「大学の授業と試験の受け方」「伝える技術 1：文を書く、レポートを書く」「伝える技術 2：話す、プレゼンする」「伝える技術 3：質問する、議論する」「メディアリテラシー：新聞・報道、インターネット活用」の 10 回の内容とした。早めに知りたい内容が多かったという学生の意見を反映し、今年度は 4 月、5 月に集中して実施した。今年度は本科目の意義やオリエンテーションを第 1 回目に行ったことで、昨年欠席者が複数いたが、今年度の欠席者はいなかった。また、最終レポートでは、学生の感想は大学での学習や生活に役立つ内容とおおむね好評であった。

次年度は、4 月 5 月に講義を集中したことで、5 限まで過密な時間割となったため、早期に講義

が必要な内容を判断し、学生の負担にならないスケジュールを組むよう配慮する。また、担当する教員で評価会議を開催し今後のナビ講座について検討する計画である。

看護学概論

1 年次前期

伊東朋子

看護とは、の導入に始まり、対象としての人間の理解、看護の歴史的変遷および看護活動の場と看護職の役割などについて、10 コマで概括的に理解させた。自らの看護に対する姿勢を考えさせることを目的に、毎回、看護に関連したミニレポートを課し、講義の理解確認と日常生活の中で考えていることを記載させた。

生活援助論

1 年次前期

秦さと子、石丸智子、田中佳子、伊東朋子、岸良達也

対象者の安全、安楽に配慮した技術展開ができることを目指して授業展開した。そのために、人体の構造・機能や物理学的知識等を踏まえて看護技術の基礎知識について講義形式で教授した。演習では、援助対象の状況を提示することで、講義により得られた知識や考え方を活かして、学生間で考えながら課題を解決するように展開した。技術修得のための支援として、演習時間内の直接指導、個人学習のための動画提示、希望に応じて課外での指導を実施した。演習中は課題について学生間で話し合い、工夫する姿がみられたが、事前学習などにより講義・演習時間をより効率的に使うことが期待される。技術試験では、手順通りに展開することに気をとられて対象への声かけや説明が不足する傾向であった。技術修得状況の評価方法は継続課題である。

初期体験実習

1 年次前期

伊東朋子、秦さと子、石丸智子、田中佳子、岸良達也、桑野紀子、後藤成人、佐藤栄治、今村知子、後藤智美、矢幡明子、山田貴子、吉川加奈子、衛藤泰秀

7 月 9 日～7 月 13 日に実施した初期体験実習 **Early Exposure** は看護とは何かを考え、自ら、看護の力を身につけようとする自立性を育むために、早い時期に学外に出て、看護の現場を体験することで、その後の学習の動機付けとキャリアパスを視野に入れた自分の将来像に多様性をもたせることに力点を置いている。3 日間の臨床実習と外部講師の講話から構成されている。学生の進路希望の 1 つでもある助産師や保健師、養護教諭による講話も取り入れた。実習中、体調を悪くす

る学生もなく、実習の目標は達成させることができた。実習施設が市外地にある施設では移動のための時間や交通費等の問題もあり、再度、通学方法や実習施設の検討を行う必要がある。

健康論

1 年次前期

福田広美、平野互

健康の概念と健康に対する考え方や意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活体験を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう、健康日本 21 などの取り組みを交えながら講義を行った。

予防的家庭訪問実習（1 年次）

1 年次

藤内美保、影山隆之、緒方文子、篠原彩

今年度から単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。各チーム担当教員と学生に対するオリエンテーション（4 月 12 日）で、本実習の理念・目的について時間を取って説明し、その後チーム間で前年度の活動について情報交換する機会を設けた。1 年次生は 2～4 年次生とともに 4～6 名から成る 80 チームを構成し、各チームが 1 名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した。1 年次生は特に、協力者とのコミュニケーションと、在宅高齢者の生活・人生の全体像を捉えることを主眼とした。学生は一人当たり年 4 回以上訪問することとし、学生に責任のない事情で予定が変更になって 4 回訪問できない場合は、代替学習（協力者に手紙を書く、入院先を見舞う、等）で補った。年度末に訪問回数不足が問題となる学生はいなかった。看護研究交流センターからメルマガを月一回程度配信し、諸連絡や他チームの情報紹介の機会とした。学生の年度末レポートからは、本実習を通じて地域の高齢者や他学年とのつながりを感じ、実習の目的をほぼ達成できた様子がうかがえた。訪問日程や訪問準備についても意見が出ていたが、チーム毎に計画的に対処できる内容なので、次年度オリエンテーションの際に確認を促すこととする。なお次年度は、学生からみて協力者（高齢者）の健康・生活上の変化が気がかりな場合は、教員と相談の上、大学から地域包括支援センターや民生委員へ連絡を取りサポートのネットワークを構築できるよう、あらかじめ協力者の同意を得るシステムを開始する。

言語表現法

1 年次前期

松田美香

人と人がお互いの意思を伝え合い、理解し合うために有効な手段である『ことば』について理解を深めることを目的に、講義を行った。単位認定者数 77 名であった。

韓国語

1 年次前期

劉美貞

ハングル文字と発音と書き方を覚え、基礎的な文の構造を学びながら、簡単な会話のやりとりも試みる講義を行った。単位認定者数は 66 名であった。

哲学入門

1 年次前期

西英久

医療従事者の立場から、「人間とは何か」という哲学の根本的問いを考察する講義を行った。単位認定者数は 76 名であった。

法学入門(日本国憲法)

1 年次

二宮孝富

日本国憲法について、歴史的意義・基本原理をふまえ、特に人権に関する諸問題を学び、市民としての基本的な法的素養を身につけることを目的に、講義を行った。単位認定者数は 70 名であった。

スポーツ救護

1 年次前期

稲垣敦

受講者は、大分岡病院で開催された大分県スポーツ学会主催の第 9 期スポーツ救護講習会に一

般受講者と共に 2 日間 (J:COM ホルトホール大分 8/25-26) 受講した。認定試験に合格した者は、スポーツ救護士のライセンスを取得し、看護師免許を取得後、学会に届け出ればスポーツ救護ナースのライセンスに変更される。

人間関係学

1 年次後期

吉村匠平

心理学における「人格、性格」概念の理解について、実体論的理解（類型論、特性論）と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。自他を状況論的に理解するために求められる態度としてカウンセリングマインドについて学習する機会を提供した。毎時くじ引きによる座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを積極的に取り入れ、学生間の交流を心掛けた。時間外学習の機会として、毎時講義終了後にショートレポートの作成を求め、次回授業時に返却した。講義に先立って評価基準を学生に開示し、学習到達状況を個別に確認できる環境を構築した。

カウンセリング論

1 年次後期

関根剛

本講義は看護に必要なカウンセリング理論およびコミュニケーションスキルを解説し、ロールプレイによりスキル修得を目標として行った。カウンセリング理論は、認知行動療法、精神分析、来談者中心療法の代表的な 3 つのアプローチについて解説し、DVD 教材によって視聴覚的な理解を促進した。また、危機介入として、患者の PTSD および医療者の惨事ストレスについて解説した。カウンセリング理論も看護にどう応用して考えるかという点についても触れることで、看護と遊離しないよう配慮した。コミュニケーションスキルは、解説 3 回とロールプレイ 3 回を実施した。ロールプレイは、学生 4 人をグループとして話し手、聞き手、観察者として役割を担当させるほか、討議課題を与えるなど、学生自身が講義に積極的に関与できるような内容を心がけた。また、ロールプレイ課題も、昨年と順序を入れ替え、目的を明確にするなど、理解しやすくなるよう改善した。なお、講義展開においては、コミュニケーション論同様、クリッカーを用いた即時フィードバックする方法を導入した。評価は、試験及びロールプレイのレポートにて行った。

英語 I - A 2

1 年次後期

宮内信治

前期と同じ教科書のうち、未習のテキストを用いて日本語訳を介した文法理解、テキスト音読と書写、課題としての音読暗唱を行った。また、教科書にないテキストとして、シェークスピアのソネット、新渡戸稲造『武士道』を使って同様の演習を行った。日本人とはいかなるものか、という問いに答える英語を通して、いわゆる「国際人」といわれる人に求められる思考の一端に触れさせた。講義後半では、前期と同様、多読活動を行った。

英語 I - B 2

1 年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

生物統計学

1 年次後期

佐伯圭一郎、渡邊弘己

EBN の基盤となり、看護研究を遂行する上で必要とされる統計学の基礎知識を身につけることを目標に授業を行った。単なる手法の理解だけでなく、確率論から推測統計の考え方を整理して理解できるように計画し、小テストやレポート、健康情報処理演習の中で行われる演習課題を組み合わせた。ポイントをしぼり、繰り返し学習を行うように指導したため、筆記試験結果からみて学生の理解度は向上していると評価するが、科目自体への興味関心や満足度は授業アンケートからみても前年度より改善しているとは言いがたい。11 月に着任した渡邊助手のアイデアを取り入れ、次年度に向けていっそうの改善をはかる予定である。

生体代謝論

1 年次後期

安部眞佐子

生化学と栄養学の教科書を用いて講義をした。生体構造論と生体機能論がより深く理解できるように、低分子から高分子へと物質の基本的な役割を抗議した。酵素、ビタミン、ミネラル、情報伝達、遺伝子発現へとすすみ、エネルギー代謝を生化学での細胞内の反応として説明し、さらに個体レベルで空腹摂食 サイクルの臓器の代謝について講義した。栄養学では、食品の特性の理解、食事バランスガイドのなりたち、食事摂取基準について説明した。毎回講義中に学生が教科書を読んで前回のふりかえりをして要点をレポートとして作成し、4 段階の評価を行い、返却してテスト対策ができるようにした。

生体反応学概論

1 年次後期

市瀬孝道

生体反応学概論では病理学総論の講義を行った。病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い内容の教科書（カラーで学べる病理学）を選択し、更に教科書を分かりやすく整理したプリントとパワーポイントも使って講義を進めた。本年度よりこれらの資料をネコバスに上げて学生が何時でも使用できるようにした。講義内容は以下に示すとおりである。

退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

生体反応学各論

1 年次後期

市瀬孝道

生体反応学各論では系統別に発生する疾病（病理学各論）についての講義を行った。病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。本年度よりこれらの講義資料をネコバスに上げて学生が何時でも使用できるようにした。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器疾患、皮膚・感覚器疾患。

微生物免疫論

1 年次後期

吉田成一、松本昂

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標とした。

講義内容を、着実に習得すべき内容に整理したが、講義後の復習を適切に行わないことに起因する、理解度が低い学生が存在しており、試験直前ではなく、各回講義後の復習が重要であることを周知する必要がある。

試験の平均点は、例年と同程度であったが、最高点は低下し、最低点は上昇していた。今後、最低点のさらなる向上を期待し、最高点についても例年通りの水準以上になるよう、履修者が意欲的に学習に取り組む興味をもてる講義内容としたい。

なお、履修者（再受験該当者を含む）89 名中、83 名が単位を取得し、例年より単位取得率は高かった（なお、単位未取得者のうち 2 名は、試験を受験しなかった）。

健康運動

1 年次後期

稲垣敦

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、学生がしたことのないような多くのレクリエーション、ニュースポーツを行い、また、バドミントンを行なった。行動変容理論を活用し、運動強度や運動量の確保にも配慮した。

看護理論入門

1 年次後期

伊東朋子、秦さと子、石丸智子、田中佳子、岸良達也

看護理論入門は 2 段階(基礎看護学)実習とも関連した科目であり、よりよい看護を行うために看護理論があることをわかりやすく理解させるために、12 名の主な理論家について学習をすすめた。また今年度は 2 段階(基礎看護学)実習での記録用紙を学生に考えさせる目的で形式を指定せずに、フリーペーパーとしたので、特に 2 段階(基礎看護学)実習前に、事例をもとに記録用紙を考えさせる時間を取り、学習内容を発表させながら、それを中心に展開した。2 段階(基礎看護学)実習への橋渡しとして、実際の臨床現場における看護理論の考え方を強調した。グループワークによる学習内容ではあったが、発表会の内容からみても、2 段階(基礎看護学)実習への学習効果が出ていた。

基礎看護学実習

1 年次後期

伊東朋子、秦さと子、石丸智子、田中佳子、岸良達也、藤内美保、石田佳代子、山田貴子、後藤智美、今村知子、永松いずみ、大矢七瀬、佐藤栄治、宿利優子、足立綾、吉川加奈子、衛藤泰秀

平成 31 年 1 月 8 日～1 月 21 日に実施した。1 年次前期の初期体験実習では同行実習により看護の役割や具体的な看護実践について見学、体験させたが、基礎看護学実習は入院患者 1 名を受け持つ本格的な実習として、初めての学習となる。そのため、実習施設の看護部長による講話でも、再度、実習に対する動機づけをさせ、自己の看護師像を形成させながら学習意欲を高めるように目的を位置づけた。学生の構成メンバー、担当教員との関係性を十分に検討し、実習配置を決定した。冬季という実習時期のため、インフルエンザ予防や体調管理についても指導した。インフルエンザに 1 名も罹患することもなく終了し、目的は達成できている。

看護疾病病態論 I

1 年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子

各系統別の重要な疾患に関する疾患の概念、症状・検査・治療など解剖生理学に立ち戻って理解することを目標にしている。消化器疾患、呼吸器・感染症疾患、循環器疾患、血液・造血器疾患を行った。

内容の精選を行い、ポイントを絞るとともに、基本的知識の獲得と自ら調べ学習するアクティブラーニングを導入している。アクティブラーニングは、病態探究演習を 1 コマ設定し、事例を提示して、病態やメカニズムを論理的に考え小グループでディスカッションする試みをした。次年度は、アクティブラーニングにおいて、教員のファシリテートの在り方を検討する必要がある。

看護疾病病態論 II

1 年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子

各系統別の重要な疾患に関する疾患の概念、症状・検査・治療など解剖生理学に立ち戻って理解することを目標にしている。脳・神経疾患、内分泌・代謝疾患、腎・泌尿器疾患、運動器疾患、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚疾患、生殖器疾患を行った。内容の精選を行い、ポイントを絞るとともに、基本的知識の獲得と自ら調べ学習するアクティブラーニングを導入している。アクティブラーニングは、病態探究演習を 2 コマ設定し、看護アセスメント学実習で経験した疾患事例について、小グループで、病態やメカニズムを論理的に考えでディスカッションし、発表会を行う試みをし

た。今後は、疾患に基づく教授内容の他、症状別のメカニズムの理解を深める教授法を検討する。

社会学入門

1 年次後期

大杉至

社会学の巨匠たちが社会をどうとらえてきたかを概説し、それぞれの論者によって、様々な社会のとらえ方があることを理解し、社会を見る目が豊かになるように講義を行った。単位認定者数は6名であった。

文化人類学入門

1 年次後期

足立恵理

医療分野を含む現代的なテーマや事例の検討を通して、自他の複雑で多様な人間のあり方を見直す視点を獲得し、日常や医療の現場に応用する力をのばすことができるように講義を行った。単位認定者数は75名であった。

教職概論

1 年次後期

伊東朋子、吉村匠平、関根剛、赤星琴美、麻生良太、堀本フカエ、横山秀樹

専門職としての教員の基本的な心構え、教職の意義、教員の役割、職務内容などについて学び、職業としての教師が、どのようなものであるのかについて各自のイメージを作り上げる機会を提供した。講義の内容についてお互いの意見や疑問を討論し、一つ一つについて自分の意見や考えがもてるようにすることを通して、教師としての構えや教師としてのありようについて考える機会を提供した。

行動療法と発達心理

2 年次前期

吉村匠平、関根剛

1 年次の学習心理学の考え方を応用した行動変容技法である行動療法について講義を行った。特に看護師として生活習慣の変容をターゲットとした解説および、自分の行動改善プログラムの作成を行わせ、夏季休暇中に実践・レポートを提出させることで、より具体的に理解を深めさせるよ

う企図した。評価は試験および行動改善プログラムのレポートによって行なった（行動療法）。言語発達、運動発達について、受講者がお互いに意見を交流しながら講義を進める形をとり、長い時間をかけて進化した結果として現在の人間の姿があることについて考える機会を提供した。講義後半では、広汎性発達障害を中心に、障害をスペクトラムという視点でとらえることの重要性、サポートの視座などについて、演習形式を取りながら講義を進めた（発達心理）。

英語Ⅱ－A 1

2 年次前期

宮内 信治

原書 *Word Power Made Easy* を用いて、英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識を習得しつつ、性格描写、医療職者などを表わす語彙を学び、その派生語についても習得させた。各講義の次週に単語小テストを行い、学習確認と評価に活用した。期間内に、教員が指示した教科書内の原文について音読暗唱の課題を与え、評価した。1 年次に引き続き、多読活動に取り組ませた。

英語Ⅱ－B 1

2 年次前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

環境保健学詳論

2 年次前期

小嶋光明、甲斐倫明

環境保健学詳論は生活の中で遭遇する身近な環境因子（物理的因子、化学的因子、生物的因子）が及ぼす健康影響についての基礎知識を講義している。熱中症などの身近な健康影響を例にして、その予防策を学生に発表してもらうことにより、問題の把握、予防や管理のあり方を考えることができるよう配慮した講義を行った。

生体薬物反応論 I

2 年次前期

吉田成一

生体薬物反応論 I は薬理学総論、末梢神経系作用する医薬品および生活習慣病、感染症に用いる医薬品に関する講義を行う科目である。学習範囲が絞られているため、理解度が高い学生が多い状況であった。しかし、一部学生にとっては、既修得科目の知識と本講義内容の医薬品に関する知識を統合することが難しいためか、学習範囲が広いと感じ、理解度が低くなると思われる学生が今年も散見された。

試験の平均点は、例年より上昇し、最高点は同程度、最低点は上昇していた。今後、最低点のさらなる向上を期待し、平均点、最高点についても例年通りの水準以上になるよう、履修者が意欲的に学習に取り組み、理解を深めることができる講義内容にするとともに知識の定着のため、復習を促したい。特に処方内容を理解するために、講義で使用した処方箋に関する復習を徹底したい。

なお、履修者（再受験該当者を含む）95 名中、81 名が単位を取得した（なお、単位未取得者のうち 1 名は、試験を受験しなかった）。単位取得率は例年通りであった。

健康運動学

2 年次前期

稲垣敦

ボディメカニクスの導入として人間固有ともいえる二足歩行を取り上げ、その後も生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、運動の重要性や健康との関連性を講義した。また、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても講義し、運動療法についても概説した。さらに、厚生労働省「健康づくりのための身体活動量基準 2013」等に準拠したエネルギー消費量の計算や身体活動量の測定実習も行なった。

医療技術論

2 年次前期

秦さと子、石丸智子、田中佳子、伊東朋子、岸良達也

対象者の安全と安楽を優先するとともに、検査の目的や治療の効果が最大限に達成されるように支援する方法の習得を目指して授業を展開した。演習では、対象と医療職者の安全確保の重要性を実感できるようなシミュレーターの選択や独自で作成するなど教材の工夫を行った。技術修得のための支援として、演習時間内の直接指導、個人学習のための動画提示、希望に応じて課外の指導を実施した。昨年度、滅菌操作における「清潔区域」と「汚染区域」を区別した技術展開が課題であった。そのため、滅菌操作を必要とする事例課題によるグループ演習時間を増やした。理解す

る機会は増えたが、今後も反復学習の支援が必要である。

ヘルスアセスメント

2 年次前期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、後藤智美

ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察およびアセスメントに主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメント能力が身につくことが目標である。講義と学内実習は、連続の時限ではなく間隔を設けて実施し、学内実習前に講義の復習をして臨むようにした。試験は、筆記試験と実技試験を実施した。最終の演習は、「地域高齢者演習」とし、既習の知識・技術を活用し、地域の高齢者のボランティアグループに協力を得て、学生がフィジカルアセスメントの計画から実施を行なえる機会を設定した。フィジカルアセスメントの実技試験の在り方の課題を整理し、技術能力がさらに身につくための教授の工夫を行う。

看護アセスメント概論

2 年次前期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、後藤智美

看護過程の展開の基礎的能力を身につけることを目標にし、看護過程の概要、看護過程と基礎理論、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価について教授した。工夫していることは理論と事例の具体を連結させ、学生が 1 人で看護過程を展開できるよう事例による個人ワークも取り入れている。実習経験が少ない学生のレディネスを考慮し疾患事例の DVD を視聴させ、映像として対象者をとらえることができるように工夫している。学生の個人ワークの記録をさせ、ルーブリック評価で学生自身及び教員が到達度を確認できるようにした。

また、学生個々に個人レポートのコメント及び共通する課題を提示しフィードバックした。

次年度も、個々の看護過程展開能力がアップするよう継続検討していきたい。

看護アセスメント演習

2 年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、後藤智美

看護過程の基本的知識を活用するために、5~6 名からなるグループで、ディスカッションしながら事例による看護過程を展開させた。看護過程を展開するために作成された事例の DVD を視聴させた。病名や発達段階、性別、それぞれ異なる看護診断が導けるような事例を選定した。中間発

表会と全体発表会をグループに分けて行った。昨年度課題であった病態を踏まえた理解の強化について、ドコデモシートに付箋を貼りメカニズムを深め病態関連図を完成させるグループディスカッションは効果があり、グループ間で競争意識も働き、発表会では質疑応答が活発化した。次年度も、グループダイナミックスがさらに活性となるよう継続していきたい。

予防的家庭訪問実習（2年次）

2年次

藤内美保、影山隆之、緒方文子、篠原彩

今年度から単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。各チーム担当教員と学生に対するオリエンテーション（4月12日）で、本実習の理念・目的について時間を取って説明し、その後チーム間で前年度の活動について情報交換する機会を設けた。2年次生は他学年学生とともに4～6名から成る80チームを構成し、各チームが1名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した。2年次生は特に、協力者の生活を把握し、在宅生活を維持するために必要な条件を考えることを主眼とした。学生は一人当たり年4回以上訪問することとし、学生に責任のない事情で予定が変更になって4回訪問できない場合は、代替学習（協力者に手紙を書く、入院先を見舞う、等）で補った。年度末に訪問回数不足が問題となる学生はいなかった。看護研究交流センターからメルマガを月一回程度配信し、諸連絡や他チームの情報紹介の機会とした。学生の年度末レポートからは、本実習を通じて協力者の生活を具体的に考え、他の授業とのつながりを意識しつつ、実習の目的をほぼ達成できた様子がうかがえた。訪問日程や訪問準備についても意見が出ていたが、チーム毎に計画的に対処できる内容なので、次年度オリエンテーションの際に確認を促すこととする。なお次年度は、学生からみて協力者（高齢者）の健康・生活上の変化が気になりな場合は、教員と相談の上、大学から地域包括支援センターや民生委員へ連絡を取りサポートのネットワークを構築できるよう、あらかじめ協力者の同意を得るシステムを開始する。

成人看護学概論

2年次前期

小野美喜、森加苗愛

成人期に生じる多様な健康問題と対象への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける成人期の位置づけと特徴を、発達課題・行動、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識や中範囲理論を教授した。中範囲理論の講義では、事例を取り入れて講義を展開し、看護実践における理論が何かをイメージし易いように工夫した。また、小テストや学生の実習体験を活かした小グループディスカッションを適宜実施し、学生の思考を深めて発言できる講義につなげた。今後も更に学生の思考力や主体性を伸ばすことを支援する工夫を行ってい

くことが課題である。

老年看護学概論

2年次前期

小野美喜

老年期に生じる健康問題の特徴と高齢者への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、慢性疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る対象への看護援助に必要な知識を教授した。また、高齢者の機能低下と QOL に関する意見交換を実施し、学生の参加度が高められた。引き続き来年度も継続していきたい。

成人看護援助論

2年次前期

小野美喜、森加苗愛、堀裕子、中釜英里佳、佐藤栄治

成人期にある対象の特性をふまえ、系統的に特徴のある健康障害について、急性期、慢性期、回復期、終末期の看護援助方法を教授した。教授方法は、各教員がハンドアウト資料と教科書を用い、グループワークや学内実習をとおしてがん患者へのケアや周手術期看護を実践的に学ぶことができるようにした。今後は、更にグループディスカッション等を組み込み、学生が主体的に学び、発言できる講義内容となるように工夫をしていきたい。

小児看護学概論

2年次前期

高野政子、草野淳子

本科目では、小児看護の特質と概要、および小児の成長と発達を理解することを目的としている。基本的概念として小児看護では、小児保健や福祉の保育の視点や、小児医療の動向を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容は次の通りである。1)小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2)子ども観の変遷と子どもの権利、3)日本の母子保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、4)小児の栄養、5)小児の成長と発達総論、6)小児の形態・機能的発達、7)小児看護で用いる理論などを講義した。最終回は、学生の子ども観レポートを発表して共有することで、各個人の子ども観を意識できるように動機づけを行った。

母性看護学概論

2 年次前期

林猪都子、梅野貴恵

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることを目的として教授した。リプロダクティブヘルスケアはグループワークを取り入れて、自主学習を進め、発表会で学びを共有した。

社会保障システム論

2 年次

平野互

在宅医療や福祉・介護と保健・医療の統合が重要視される今日の看護職にとって、社会資源に関する理解は不可欠である。講義時間数の制約もあり、今後の他の科目での講義の展開に備えて、社会保障の全体像が把握できるよう講義内容を整理し、特に他の講義で触れることの少ない福祉を中心に講義を組み立てた。まず社会保障制度の意義と構造を論じ、次いで医療・保健システム、福祉制度の全体像を理解するために、所得保障、医療保険、医療法、感染症対策に引き続き、母子・児童、高齢者、障がい者を対象とする個別的な保健・福祉政策について講義した。

出席者の受講態度は良好であったが、出席者が固定される傾向が続いた。期末試験の成績は良好であったが、過去問を使った試験対策だけで乗り切る学生が少なくない。科目の性格上、知識の伝授を主目的とせざるをえず、演習を取り入れた双方向授業などの工夫の余地が少ないため、学習意欲の向上という課題が残る。

音楽とこころ

2 年次前期

小川伊作

クラシック音楽、ジャズ、フォークソングの 3 つのジャンルの音楽を取り上げ、多様な音楽に触れることを通して、「音楽とは何か?」、「音楽の意味するもの」について、そして音楽と人間との関係についてふりかえる機会とし、もって音楽についての理解を深める講義を行った。単位認定者数は 35 名であった。

美術とこころ

2年次前期

澤田佳孝

便利さを重視する現代社会においては、とかく失われがちな、人が生まれながらに持っている物を作る力、表現する心・工夫する能力などを、描く体験を通して復活させ、自己を表現することの楽しさ、感じたこと・考えたことを形に表すこと(造形表現)の歓びを理解する講義を行った。単位認定者数は26名であった。

保健ボランティア

2年次

藤内美保

保健医療に関するボランティアを体験し、その経験を通じて、保健医療現場におけるボランティアの意義について理解を深めることを目的としている。学生自らが、保健医療に関わるボランティアを探し、参加手続きをとり、体験し、参加レポートを記載するなど、自主性や行動力の向上につながっている。保健関連の学会運営のボランティア、健康づくり支援の活動、福祉関連の活動など、様々な場で幅広く活動していた。看護の知識や技術が活かせるような活動を推進する必要がある。

養護概論 I

2年次前期

赤星琴美、小野治子、堀本フカエ

学校保健活動を担う養護教諭の基本理念、教育職員としての養護教諭の基本原則などについて教授した。具体的には、養護についての本質や基本的概念、養護教諭の沿革と健康課題の変遷、保健室経営と学校保健活動などについて、既存の資料や図書館におかれている本・資料などを用いてディスカッションを行い、学びを深めた。さらに、養護教諭の職務と果たすべき役割、子どもを取り巻く環境とその解決の支援について、現職の養護教諭を講師として招き、学びを深めた。

教育学概論

2年次前期

鈴木篤

教育に関する本質的理念について、これまでに受講者が有してきた経験や理解を問い直すこと

を通して、①教育についての基礎理論・思想を理解するとともに、②教育の歴史的発展過程を理解し、今後の変化についての見通しを持つことを目的として、講義を行った。

生徒指導

2年次前期

長谷川祐介、吉村匠平、関根剛

教師として生徒指導を行う上で理解すべき考え方（法制度を含む）や理論、実践のための方法などを理解するとともに、学校で実際に生徒指導を行うための実践能力の基礎を養うことを目的に講義を進めた。

教育相談

2年次前期

中島暢美、飯田法子、河野伸子

学校教育における教育相談の意義や役割について理解し、不適応とは何か、適応障害とは何かについての理解を構築させた。また、受講者各自が体験したことなどを課題化して、どのような対応が必要か、どのような組織との連携が必要かなどを、グループで話し合わせた。

英語Ⅱ－A2

2年次後期

宮内信治

前期に引き続き同じ教科書を用いて英語語彙増強学習を行った。医療職者を含む実践者や科学者を表わす語彙とその派生語を学習した。毎週単語小テストを行い、教科書原文を用いた音読暗唱を課題にして、それぞれ評価した。講義後半では多読活動を実施した。

英語Ⅱ－B2

2年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their

fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

放射線健康科学

2 年次後期

甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央

放射線健康科学は現代医療に必要不可欠な放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理、生物・健康影響、その防護についての基本的な事項を講義している。また、医療における放射線利用についても紹介し、医療における放射線問題の重要性を理解できるように配慮した。医療における放射線利用に対する基礎知識を同時期に実施している健康科学実験（自然放射線の測定、診療用 X 線装置の散乱線の測定を通して放射線の量的な理解）と合わせて理解できるように努めた。

健康運動学演習

2 年次後期

稲垣敦

学生が自分の健康課題を見つけ、主体的に目的や目標を定め、自分に合った運動メニューを作成して 15 週間実施した。また、この最初と最後に各自の目標に合った計測を選んで実施し、前後の値を比較して効果判定を行い、考察した。さらに、授業のはじめに運動継続のための行動変容理論の講義を行った。

健康科学実験

2 年次後期

濱中良志、岩崎香子、安部眞佐子、市瀬孝道、吉田成一、定金香里、甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央、稲垣敦

健康科学実験は基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは 11 テーマからなる実験を行った。1) 人体解剖学実習（担当者：濱中良志、岩崎香子、安部 眞佐子）、2) 組織学実習（担当者：濱中良志）、3) 血液検査（担当者：定金香里）、4) 基礎微生物学実習（担当者：吉田成一）、5) ラットの解剖（担当者：市瀬孝道、吉田成一、定金香里）、6) 測定誤差と変動（担当者：甲斐倫明）、7) 放射線（担当：恵谷玲央）、8) 染色体異常（担当者：

小嶋光明)、9)呼吸循環器系持久力(当者者:稲垣敦)、10)心電図(担当者:岩崎香子)、11)食物栄養学実習(担当者:安部眞佐子)

看護アセスメント学実習

2年次後期

藤内美保、石田佳代子、伊東朋子、山田貴子、後藤智美、石丸智子、岸良達也、後藤成人、佐藤栄治、秦さと子、宿利優子、田中佳子、中釜英里佳、堀裕子、矢幡明子、吉川加奈子
サポート教員:梅野貴恵、小野美喜、高野政子、森加苗愛、足立綾、今村知子、小野治子、佐藤愛、甲斐博美、稗田朋子、丸山加菜

病院実習において1名の受け持ち患者を持ち、看護過程を展開する基礎的能力を身につけることを目的にした。県立病院8病棟、大分赤十字病院7病棟、大分大学医学部附属病院4病棟の計19病棟に6~7名の学生を配置した。今年度は特別な対応が必要な出来事があり、学生の精神的な安定のため、看護系教員の多くの教員(11名)のサポート体制を得て実施することができた。実習開始を2日間延期し、実習期間中の実習目標の変更や実習時間の短縮などの対応をとった。実習指導者の配慮ある実習指導により学生は実習目標を到達した。1名の学生には補習実習の対応を行った。時間短縮により、アセスメントで思考する時間的な余裕があつて良かったという声もあつた。

次年度は、思考するための時間の確保とベッドサイドでの実践のバランスを考慮した臨地の病棟実習時間の検討が必要である。

老年看護援助論

2年次後期

小野美喜、森加苗愛、甲斐博美、堀裕子、宿利優子、佐藤栄治

老年期の身体、心理、社会的機能の特性をふまえ、老年期に代表的な障害や疾病をもつ高齢者およびその家族への看護援助方法を各教員がハンドアウト資料と教科書を用いて教授した。特に認知症や加齢による合併症を持つ患者、及び緩和ケア対象患者の生活の質や症状マネジメントをグループワークでディスカッションを通して学べるようにした。また、高齢者の胃瘻造設など看護援助に関わる倫理的問題について全体討議を行い、学生が自分で考え発言できる機会を設けた。今後は、更に実践的な学びを支援できるよう教授方法を工夫していく。

母性看護援助論 I

2 年次後期

林猪都子

妊娠期、分娩期の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護について学ぶことを目的に教授した。今年度は妊娠期だけでなく分娩期まで範囲を広げて講義した。知識の定着を図るために、毎回講義の開始前に小テストを実施した。小テストへの学生の取り組み姿勢は良好であった。

精神看護学概論

2 年次後期

影山隆之

健康を心理－社会的側面から理解するために、健康日本 21、精神力動論、心理社会的発達論、ストレス論、及び国際生活機能分類などの考え方と、主な精神症状・精神疾患、アディクションなどのトピックを紹介するとともに、歴史と法制の概要を講義した。前年度試みた授業方法をさらに徹底させ、パワーポイントをほぼ全廃しテキストのハンドアウトを配布、これに記載した発問をめぐる討論を行い、できるだけ自験例を紹介した。出席確認を兼ねたリアクションペーパーに質問や感想を記載させ、理解不十分な点を次回授業で補った。学生による授業評価やリアクションペーパーの記載を見る限り、この方式は好評であり、精神看護への関心を高めスティグマを低下させたと思われる。

地域看護学概論

2 年次後期

川崎涼子、赤星琴美、佐藤愛、小野治子、村嶋幸代、藤内修二、鈴木由美

地域における個人・家族、集団への看護活動を行う意義、看護師に求められる役割について考えることのできる素地を養うため、地域看護の歴史と最新の情報を交えた講義を行った。地域看護の基本的知識として、地域住民が主体的に活動することを支える看護職の発展と今後の展望については地域看護分野の先駆的研究者として村嶋学長による講義を行った。公衆衛生意義、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーションについては、研究と大分県における豊富な実践活動のある藤内修二氏による講義を行った。また、大分県の地域看護活動の実際について学生が豊かなイメージをもてるよう、地域で活動する市の保健師を招いて実際の活動事例を教授した。学生が地域で活動する看護職を具体的にイメージでき、かつ、地域看護についての理解が深められるよう教授した。

家族看護学概論

2 年次後期

川崎涼子、赤星琴美、佐藤愛、小野治子

個人への看護を中心的に学んできた学生に対し、家族単位で看護の対象となることの意義を理解できるように講義を組み立てた。家族看護の概念や家族の機能や構造といった基礎的な知識のほか、家族看護に関連する重要な理論（家族発達理論、家族システム理論、家族適応理論、家族ストレス対処理論）については時間を十分にとって教授した。また、家族看護過程の演習では、グループワークを行い、発表では学生同士が活発な意見交換を行い、家族看護の視野が広がるよう工夫した。家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習を行った。

国際看護学概論

2 年次後期

桑野紀子、丸山加菜

世界の人々を看護の対象として捉え、地球規模の保健医療に関する課題について理解し、その背景や対策について学ぶことを主な目的とし、授業を組み立てた。保健医療における格差や、開発途上国における感染症の現状等、イメージすることが難しい内容については、WHO がホームページで提供している視聴覚教材や具体的事例を活用した。保健医療に関わる国際機関の役割については、講義と併せて、WHO 神戸センターから講師を招聘した。また、海外での看護実践について、担当教員の JICA 体験談を組み込んだ。

看護管理学概論 I

2 年次後期

福田広美、平野互、稗田朋子

看護管理の概念および看護管理を取り巻く社会背景を理解し、看護職として看護のマネジメントについて主体的に学ぶことをねらいとした。学生が、医療政策における看護管理について理解を深め、社会の変化を予測しながら対応できる組織的な看護の必要性を理解し、看護の対象となる人々に効率的かつ質の高い看護を提供するための看護管理に関する基礎的な知識を学ぶことができるよう講義を行った。

看護の倫理

2年次後期

平野 互、小野 美喜

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく判断のための思考訓練を行うことを目的に講義を行った。講義は、「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「Professionの責任と倫理」・「臨床倫理：倫理的判断の方法」・「意思決定の倫理」・「生殖補助医療にかかわる倫理」・「出生前診断と倫理」・「人間の尊厳、個人の尊重と自立支援」・「End of lifeに関わる倫理」・「医療従事者の事故対応と責任」の9回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。講義の中で、「ケースブック医療倫理」(医学書院)をテキストに事例演習を行った。また講義時間中にミニレポートを課して講義内容の整理と質疑、出席管理を行い、ミニレポートと期末の課題レポートにより成績評価を行った。

今年度は倫理に関心を抱く学生が比較的多いと思われ、出席者も多かったが、学生に予習の習慣がないこともあって、事例演習が双方向的な議論の場になりにくいことが今後の課題である。

第1段階看護技術演習

2年次後期

森加 苗愛

本科目は、4つのステップからなる看護技術修得プログラムのファーストステップの位置づけにある演習である。本演習の目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できる能力を身につけることである。

1段階看護技術演習では、学生が実技演習前に主体的に準備し学ぶことができるようにワークノートを準備し、技術の根拠や手順を自ら思考することができるようにした。また、事例は内容を洗練させて統合した。評価は3～4人でグループを組み、公平に選出した1名が実践してグループ評価とした。評価も<技術項目>だけではなく<全体的取り組み>を鑑みて合否判定を行うこととした。学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できたと考える。しかし、本演習では、グループで1名が実践してグループ評価となることに不公平感を感じることや、教員により評価の厳しさが異なるとの意見があがった。オリエンテーションの工夫や教員間での検討など今後の課題としたい。

学校教育心理学

2年次後期

藤田 文

教職課程や心理学における教育心理学の位置づけから入り、発達、知能、パーソナリティ、学習などの

個々の生徒を理解するために必要な知識について教授した。単に知識を吸収するだけでなく、自ら積極的に、教育現場に必要な心理学の知識とは何かを考えていくことを求めた。

教育課程論

2 年次後期

今井航

将来教員として授業を計画する際に、国の定める基準、即ち学習指導要領に則りながら授業内容を自ら構成できるようになるための基礎力の習得を目的とした。「教育課程とは何か（その形態・原理）」及び「学習指導要領とは何か」といった 2 点の問いを持って、授業を進めた。

生体薬物反応論Ⅱ

3 年次前期

吉田成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）を中心に講義した。生活習慣病で使用する医薬品、中枢神経系疾患で使用する医薬品、免疫系疾患に使用する医薬品、救命救急時に使用する医薬品など多岐にわたり临床上使用する医薬品全般について講義した。

2 年次後期により臨床的な実習を行い、本講義で取り扱う医薬品に関し、その重要性を理解しているため、積極的に学習するという意欲が高く、理解度は全般的に高かった。しかし、アレルギー性疾患治療薬、造血薬については、理解度が低く、次年度の課題である。

昨年と比較すると、平均点、最高点、最低点のいずれも上昇した。

履修者（再受験該当者を含む）95 名中、86 名が単位を取得した。単位取得率は上昇したが、3 年次配当科目の本講義科目の単位未修得は 4 年次における履修が必要となり、4 年次において、単位が修得できないと、本講義科目により卒業が不可となる。実際、本年度、該当者が生じたことから、今後、履修者全員が 3 年次において単位修得できるよう期待したい。

成人・老年看護学演習

3 年次前期

小野美喜、森加苗愛、堀裕子、中釜英里佳、佐藤栄治、中村伊都子、原光明

成人期および老年期の人々を対象に、健康問題に応じた看護過程の展開と看護の方法を学ぶことを目的とした。発達段階（成人期、老年期）における特徴を踏まえた上で、様々な健康問題を持つ対象者に必要な看護計画を立案し、臨床現場における看護援助の実践がイメージできるよう演

習を行った。成人看護学演習では、胃がん周手術期の患者事例を用いて看護過程を展開した。術直後の患者観察や看護援助、術前の情報を基に立案した看護計画を術中・術後の患者の状況に応じて評価修正ができるよう指導した。老年看護学演習では、認知症をもつ高齢者に焦点を当て、グループディスカッション、ロールプレイなどを通し学生間の学びの共有を図った。

老年看護学実習

3 年次前期

小野美喜、森加苗愛、甲斐博美、堀裕子、中釜英里佳、佐藤栄治、中村伊都子、岩下恵子、衛藤泰秀、原光明

施設に入所している高齢者の生活の援助・支援を通して、対象を理解し強みを捉え、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題を学ぶ目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設 6 施設、介護老人福祉施設 6 施設の合計 12 施設において 1 週間の実習を行った。各担当教員が巡回しながら指導にあたり、学生は臨地指導者との連携の下で実習を行った。高齢者の生活の質をとらえたリクリエーションの企画や実施などができた。

成人看護学実習 I

3 年次

小野美喜、森加苗愛、堀裕子、中釜英里佳、宿利優子、佐藤栄治、田中佳子、吉川加奈子、岸良達也、後藤智美

成人看護学実習 I は、第 4 段階の専門看護学実習として、成人期の身体的・心理的・社会的特徴を総合的に捉えた上で、急性期・回復期の健康段階にある対象に、チームの一員として適切な看護が実践できる能力や自主性、自律性を養うと共に自己の看護観を発展させることを目的とした。

実習施設は、今年度は大分県立病院 8 病棟および大分赤十字病院 5 病棟とし、各病棟に 3 人ずつ学生を配置して 8 週間の実習（学生 1 人 2 週間の臨地実習）を実施した。

教員の指導体制は常駐型としながらも、学生が自律して看護スタッフとの連携を図ることができるよう指導を行った。実習指導者の協力のもと、指導体制も充実してきた。今後もチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

成人看護学実習Ⅱ

3年次

小野美喜、森加苗愛、堀裕子、中釜英里佳、宿利優子、佐藤栄治、田中佳子、吉川加奈子、岸良達也、後藤智美

成人看護学実習Ⅱは、第4段階の専門看護学実習として、成人期の身体的・心理的・社会的特徴を総合的に捉えた上で、慢性期・終末期の健康段階にある対象に、チームの一員として適切な看護が実践できる能力や自主性、自律性を養うと共に自己の看護観を発展させることを目的とした。

実習施設は、今年度は大分県立病院 8 病棟および大分赤十字病院 5 病棟とし、各病棟に 3 人ずつ学生を配置して 8 週間の実習（学生 1 人 2 週間の臨地実習）を実施した。

教員の指導体制は常駐型としながらも、学生が自律して看護スタッフとの連携を図ることができるよう指導を行った。実習指導者の協力のもと、指導体制も充実してきた。今後もチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。

予防的家庭訪問実習（3年次）

3年次

藤内美保、影山隆之、緒方文子、篠原彩

今年度から単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。各チーム担当教員と学生に対するオリエンテーション（4月12日）で、本実習の理念・目的について時間を取って説明し、その後チーム間で前年度の活動について情報交換する機会を設けた。3年次生は他学年学生とともに4～6名から成る80チームを構成し、各チームが1名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した。3年次生は特に、協力者が在宅生活を維持するために必要な生活の在り方等を、共に考え、提案し、必要な指導等を実施することを主眼とした。学生は一人当たり年4回以上訪問することとし、学生に責任のない事情で予定が変更になって4回訪問できない場合は、代替学習（協力者に手紙を書く、入院先を見舞う、等）で補った。年度末に訪問回数不足が問題となる学生はいなかった。看護研究交流センターからメルマガを月一回程度配信し、諸連絡や他チームの情報紹介の機会とした。学生の年度末レポートからは、本実習を通じて看護学生としての視野を広げ、病院実習で退院後の生活を考える際に応用し、4年生が訪問できない季節には下級生をリードするなど、実習の目的をほぼ達成できた様子がうかがえた。訪問日程や訪問準備についても意見が出ていたが、チーム毎に計画的に対処できる内容なので、次年度オリエンテーションの際に確認を促すこととする。なお次年度は、学生からみて協力者（高齢者）の健康・生活上の変化が気になりな場合は、教員と相談の上、大学から地域包括支援センターや民生委員へ連絡を取りサポートのネットワークを構築できるよう、あらかじめ協力者の同意を得るシステムを開始する。

小児看護援助論

3 年次前期

高野政子、草野淳子、足立綾

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と各期の保育と保健および、小児看護における援助技術や、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な内容は、1)小児期の主要な発達理論、2)小児各期の発達アセスメント、3)乳児期、幼児期の保育理論と技術、4)学童期、思春期の保健と看護、5)病気の子どもと家族、6)小児の健康障害と看護、7)障害のある子どもと療養生活の援助、8)親子関係に問題のある場合の看護ほかを講義した。授業は、看護過程の展開を個人とグループで作業を行い、グループワークで看護過程を完成して、事例を2グループずつ発表し意見交換を行った。

小児看護学演習

3 年次前期

高野政子、草野淳子、足立綾、矢幡明子

演習は2つの課題を設定した。前半は小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。また、後半は臨地実習でよく出会う事例を4事例提供し、グループワークで紙上での看護過程の展開について検討し、まとめてレポートして発表した。2つの課題を実施したが、学生は積極的な参加を求められる学生個々に事例展開を求め、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する方法で行っている。真面目な取り組みが見られた。一部の学生が個人ワークを軽視する傾向もあり、グループワークに全員が取り組んでいるか、適宜グループワークに入り指導した。小児看護技術の演習は、教員4名で、1)高機能シミュレータを用いてバイタルサイン測定の実施と技術、2)静脈点滴の固定、子どもの計測などを実施した。指導の方法や内容は指導者間で統一して、20名ずつの4グループに分けてローテーションする方法で指導した。学生と臨床看護師との相互関係が構築されるようにした。

小児看護学実習

3年次

高野政子、草野淳子、足立綾、矢幡明子、石丸智子

小児看護学実習は、2施設の臨地実習とする。大分県立病院に1グループ学生8～9人で6グループ(合計53人)、別府発達医療センターに学生4～5人で6グループ(合計25人)配置とし、専任教員と担当教員と臨床実習指導者の連携により指導を行った。学生1人に対象児1人の受け持つことを目指した。在院日数の短縮化で困難も多いが、患児を2人の学生が受け持ちすることは避けること

ができた。継続的に関わられた場合は、学生の遊びへの援助に工夫もみられたが、複数の子どもを受け持つことで看護実践まで到達できたという学生もいた。学生一人3日間の保育所実習は、7月末から8月第1週までに実施した。幼児と出会うことが少ない学生には初めて子どもとコミュニケーションを学ぶこと、健康な子どもを理解して、病児と家族への関わりがスムーズに実施できることなど重要な効果がある。保育所実習を夏季に行うことで冬期の感染予防の視点からもメリットがある。病院では7日間のうち外来実習を半日行った。外来診療の場面に立会い子どもや家族の様子、外来看護師の指導のもと、子どもの発達に合わせた看護技術について学ぶことができた。実習では、受け持ち患児のバイタルサイン測定は全員が経験することができた。

実習終了後、実習施設の実習指導者と専任、担当教員で実習反省会を持ち、意見交換を行った。学生の実習到達度や記録に差があると報告された。実習に対して学生が動機づけられ積極的な実習を行えるように指導することが課題と考える。

母性看護援助論Ⅱ

3年次前期

林猪都子、永松いずみ

産科手術と産褥期、新生児の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護を学ぶことを目的に教授した。産褥期の生理と経過、産褥期の看護、新生児の生理と看護について実施した。産褥期・新生児の看護は母性看護学実習で大きな柱となり、産褥期は日々の退行性変化や進行性変化がみられるため、視聴覚教材を用いてイメージができるようにした。

母性看護学演習

3年次前期

林猪都子、永松いずみ、今村知子、樋口幸、大矢七瀬

母性看護の実践に必要な看護技術を理解し基本的技術を習得することを科目のねらいとした。講義は、母性看護技術演習とウェルネス看護診断に基づいた母性看護過程の展開である。看護技術演習は、モデル人形を用いた妊婦腹部触診・計測、胎児心拍数陣痛図モニター装着、新生児計測や沐浴など母性看護を行う上で必要な看護技術の演習を実施した。母性看護過程の展開では、正常2事例、異常3事例をグループワークで学習内容の共有を図り看護過程を展開した。

母性看護学実習

3年次

林猪都子、永松いずみ、今村知子、安部真紀、大矢七瀬

母性看護学実習施設は3施設であり、実習期間は1グループ2週間（延べ12週間）であった。学生および教員の配置人数は、堀永産婦人科医院は学生4～5名配置（合計27名）、大分県立病院は学生4～5名配置（男子学生2名）（合計26名）、アルメイダ病院は学生4～5名配置（男子学生2名）（合計25名）、担当教員は各施設1名配置した。実習は学生1名につき妊婦または褥婦を1名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開を学習した。すべての学生に生命の誕生の場面を通して生命の尊厳や自己を振り返る実習を期待して指導を行った。1週間に帰学日を設けて、帰学日は記録のまとめや看護技術の見直し、最終カンファレンスの準備を行った。

精神看護援助論

3年次前期

杉本圭以子、後藤成人

精神看護の目標と役割を考えられるよう、科目を通して、視聴覚教材、実例を多用し講義した。精神科看護における治療環境、安全管理、権利擁護をはじめ、地域生活を支える支援の理解を深めた。各精神疾患の病態・治療・看護の学習はアクティブラーニングの手法を取り入れ、自己の予習をもとにグループでの話し合いで学びを深める時間を設けた。また、援助技法として社会生活技能訓練（SST）、呼吸法を学び、学生自身が実際に体験することで理解を深めた。

精神看護学演習

3年次前期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人

例年通り、精神疾患をもつ対象者を想定した紙上事例教材を用いて事例検討を行い、学生に個人で取り組ませ、全体シェアリングで振り返りを行った。また、臨床で遭遇しやすい場面（自殺念慮のある人への対応、多飲水の人への対応など）を考慮したロールプレイを取り入れ、学生に臨床での対応がイメージしやすい工夫を行った。精神科医療・地域精神保健と障害福祉サービスの実況（現状）を伝えるため、実習施設等から招いた外部講師による講演の時間を確保した。最終回に、各自が実習を行う障害福祉サービス事業所を訪ね、事業所毎のオリエンテーションを行った。講義を振り返り、後期の実習へスムーズに移行するための準備として、演習の基本的な構造は継続したい。

精神看護学実習

3年次

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人、稗田朋子、丸山加菜

実習期間のうち6日間は大分下郡病院、大分丘の上病院（実習前半のみ）、衛藤病院（実習後半のみ）に分かれて病棟実習を行い、2～3日は4つの障がい福祉サービス事業所（サマンの木、やまねこ工房、泉、ゲニー工房）に学生が分散して実習を行った。病棟実習で学生は、それぞれの受け持ち患者について、全人的な理解とアセスメント、及び患者が受けている看護の理解について指導を受けた。病棟・病院内カンファレンスの意義と参加の仕方について意識付けを強化した。障がい福祉サービス事業所では、利用者と共に各種プログラムに参加しながら、精神障がい者が社会で生活できるための条件、そのために必要な援助、リハビリテーションのニーズを把握するためのアセスメントなどの実際を見て学んだ。実習最終日には学内で、二つの場での学びを統合する最終カンファレンスを行った。全体を通して、前年より学生の参加が積極的になった。学生には、福祉サービス事業所における看護職の役割を考える前に、利用者にとって必要な支援を考える視点を確立する必要がある。

第2段階看護技術演習

3年次前期

森加苗愛

本科目は、4つのステップからなる看護技術修得プログラムのセカンドステップの位置づけにある演習である。本演習の目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できるとともに、専門領域別の基礎的看護技術の実践能力を身につけることである。

第2段階看護技術演習では、今年度演習全体の構造を見直し、第1段階からの流れを考慮して学生が効果的な学びができる様配慮をした。実技演習前に主体的に準備し学ぶことができるようにワークノートを準備し、技術の根拠や手順を自ら思考することができるようにした。また、事例は内容を洗練させて統合した。評価は3～4人でグループを組み、公平に選出した1名が実践してグループ評価とした。評価も＜技術項目＞だけではなく＜全体的取り組み＞を鑑みて合否判定を行うこととした。学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できたと考える。

第2段階看護技術演習では、グループで1名が実践してグループ評価となることへの不公平感を表出する学生はおらず、グループで協力し合い演習を行っていた。引き続きオリエンテーションの工夫や効果的な演習方法を今後の課題としたい。

在宅看護論

3年次

福田広美、平野亙、稗田朋子、吉川加奈子

疾病や障害をもちながら地域で生活する人々とその家族に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。3年次が、これまでの実習で得た学びをもとに、在宅看護の学びを深められるよう、在宅療養者の事例を示しながら教授した。

また、「終末期における在宅看護」では、グループワークにより理解を深めた。

英語Ⅲ

3年次後期

Gerald T. Shirley、宮内信治

講読担当 語源学の知見を基に医療や看護に関連する語彙を習得させた。また、論文構成を確認したうえで、実際に発表された英語の原著論文を読解させた。双方ともに、看護・医療に関連する新しい語彙と知見に触れさせることができた。

教育方法論

3年次前期

佐伯圭一郎、生田淳一、麻生良太

教師による指示や発問、それに対する子どもの考察、話し合い活動、質問行動、説明、新たな課題の発見といった教授や理論の実際を概説した。加えて、情報化社会に対応した教育内容や方法の実際に焦点をあて、各種情報機器の活用について紹介した。

養護概論Ⅱ

3年次前期

赤星琴美、小野治子、堀本フカエ

子どもの健康課題解決に向けた養護教諭の役割や健康相談活動の支援のあり方について教授し養護教諭が行う支援活動について学びを深めた。現職の養護教諭を講師として招き、現代における子どもの健康問題に対して実際に学校で行っている支援を、講義演習をとおして学んだ。

道徳教育と特別活動

3年次前期

鈴木篤

道徳教育および特別活動の特質とその方法について知識・理解を深めることを目的として、学校教育の具体的な場面を取り上げながら説明した。

環境疫学・生物学演習

3年次後期

甲斐倫明、小嶋光明、恵谷玲央

環境疫学・生物学演習は健康と環境との関係についての知見が生まれてくる仕組みを講義している。疫学的な統計によって明らかになってくる知見や分子細胞レベルの生物学的な仕組みを通して明らかになってくる知見を演習・事例を通して理解できるように努めた。演習時間内に課題レポートを作成させて提出するやり方は、学生が主体的に関わる授業は、問題意識を高めるとともに理解を深めることにつながる。

看護探究セミナー（学部）

3年次後期

小野美喜、森加苗愛、堀裕子、中釜英里佳、宿利優子、佐藤栄治、田中佳子、吉川加奈子、後藤智美、岸良達也

成人看護学実習Ⅰ・Ⅱを履修した3年次生名に対し、実習での受け持ち患者1名に対する看護を振り返り、看護をより深く考えることを目的としたケース・スタディのまとめを行った。各担当教員が学生2～10名を担当し、テーマ決定から発表までの過程を指導した。学生は主体的に担当教員の指導をうけながらレポート作成とプレゼンテーションの準備・実施を行い、学びを共有することができた。

健康支援論演習

3年次後期

福田広美、平野亙、稗田朋子、吉川加奈子

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。健康教育が行われる場として、母子保健・学校保健・産業保健・高齢者などライフサイクルに応じた健康支援の場と対象者について

て、個人・集団・地域を対象として健康教育を考えることができるよう講義を行った。後半は健康教育の演習を実施、地域、学校、産業などの保健活動の場での事例を用いて、それぞれの健康問題を明確にして健康教育をどのように行うか、グループワークによる作業を行った。発表は、各事例についてすべてのグループが教育場面のロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、ディスカッションを通して考えることができる場とした。学生は、健康教育の対象となる個人および集団の特性を現実的にとらえアセスメントすることや、様々な条件を考慮して教育プログラムを考えろといった点について、グループワークの過程で学習できていた。また、発表会での討論ではポイントをおさえた質疑が出され、活発な意見交換ができ、学びを深めることができていたと考える。

地域生活支援論

3 年次後期

赤星琴美、川崎涼子、佐藤 愛、小野治子、鈴木由美

地域で生活している人びとの健康課題の特性を理解し、地域看護活動の展開方法について講義と演習を行った。地域看護の実践者として市保健師を招き、実際の看護活動について事例を用いて教授した。母子保健活動や成人・高齢者保健活動、障害者保健活動、難病保健活動などの基本的な知識のほか、コミュニティ・アセスメントの手法を用いて地域を理解する演習を設け、看護職が「地域志向のケア」の視野が広がるよう工夫した。

国際看護比較論

3 年次後期

桑野紀子、丸山加菜

世界の疾病構造の変化や国際保健／国際看護の主要概念について理解を深めること、Universal Health Coverage や Sustainable Development Goals といった保健医療に関する世界的な取り組みについて学ぶこと、母子保健や精神保健といった各分野のグローバルな状況について学びぶことを目的として講義内容を組み立てた。今年度から、海外に渡航する日本人の健康支援として、渡航医療における看護に関する内容を講義に組み込んだ。また、赤十字赤新月社の活動について外部講師の体験談を聞く機会を設け、海外での看護実践について学びを深めることができた。

国際看護学演習

3 年次後期

桑野紀子、丸山加菜

講義で学んだ知識を実践に結びつけてイメージできるように、1) 外国人患者の看護、2) 海外に渡

航する日本人の健康支援、3) 或るの国の健康課題とその背景、および対策について国際機関ホームページ等を情報源として調べ考察する、グループワーク／個人ワークを中心に組み立てた。文化・社会的背景が多様な外国人患者の看護については、外部講師を招聘し、ディスカッションやワークショップを交えた授業を行った後、グループワークによるケーススタディを行った。また、世界の保健医療について複眼的な視点を得ることを目的として、グローバル社会の矛盾と健康格差を描いた映画鑑賞も授業に組み込んだ。

災害看護論

3 年次後期

石田佳代子、福田広美、川崎涼子、石丸智子、吉川加奈子、松久美、佐藤弥生

本科目の目的は、地域や病院等における健康危機管理と災害時の対応について理解し、地域や病院等における災害看護のあり方、考え方とその実際を学ぶことである。講義では、災害の定義、種類、法律、制度、災害サイクル各期における特徴と看護活動、病院における初動体制、地域における災害時保健活動、在宅療養患者に対する災害看護活動など、多面性を有する災害看護の全体像がわかるような内容とし、災害および災害看護の基礎的知識の習得に重点を置いた。演習では、日本 DMAT（看護師）による指導の下で、災害時に必要な技術であるトリアージ（START 法）の習得に重点を置いた。また、災害発生時を想定したシミュレーション・シナリオを使って机上訓練を行った。評価はレポートによって行った。過去の災害で印象に残っている災害について自らテーマを決めて概要を調べ、具体的な問題や課題、看護の役割を考えることなどを通して、災害看護のあり方などについて理解を深めることができたと考える。

看護科学研究

3 年次後期

佐伯圭一郎、市瀬孝道、恵谷玲央、後藤成人、品川佳満、秦さと子、杉本圭以子、福田広美、森加苗愛、渡邊弘己

卒業研究および将来の臨床における看護研究に必要とされる基本的な考え方、知識、技術を修得することを目的としてオムニバス形式の講義・演習を行った。看護研究の意義、研究テーマの設定から文献収集、研究計画書の作成といった過程のすすめ方、研究デザインの決定やデータ解析技法の知識と実践、論文の作成と発表という範囲をカバーしているが、限られた時間のため授業で扱えることも限られている。今後、授業テーマや内容の再検討を行い、より効果的な授業として改善を進めたい。

学校保健学

3 年次後期

赤星琴美、小野治子、堀本フカエ、伊東朋子

児童・生徒の心身の健康維持・増進における学校保健の役割について、保健管理、保健学習、保健指導等を取り上げ、学校保健の重要性について理解させた。具体的には、学習指導要領と教育課程について理解させ、学校保健の意義や内容、保健室経営や学校保健計画が立案できるように取り組ませた。養護教諭としての現場経験が豊富で、大学教育の経験もある外部講師に講義を依頼し、グループワークなども多く組み込むことで、グループダイナミクスの効果も期待して展開した。

教育制度論

3 年次後期

今井航

まず、世界主要国における教育制度改革の動向や、学校の法的な位置づけを問うことにより、教育制度への関心を高めた。その上で、職務内容や遵守事項、免許制度、研修制度を取り上げ、教職員に関する制度の特徴を捉えさせた。加えて、教育委員会の制度の変遷、教員評価の制度、学校支援の制度についても解説した。

養護実習事前事後指導

3 年次後期

吉村匠平、関根剛、赤星琴美

事前指導では、実習生としての遵守事項について学ぶとともに、実習校の概要について、HP や要項をもとに整理した。また、個別の実習目標、実習期間中の具体的な行動目標を策定した。事後指導では、実習目標に沿って、実習の自己評価を行うとともに、他の学生の実習体験を共有する機会を提供した。

養護実習 I

3 年次後期

吉村匠平、関根剛、赤星琴美、伊東朋子、草野淳子

2 月 18 日～22 日内の 5 日間、大分市立佐賀関小学校、東大分小学校、豊府小学校、西の台小学校、植田中学校、植田南中学校で、学校体験を中心とする実習を行った。

応用生体機能反応論

4年次

濱中良志、市瀬孝道、吉田成一

現状において、4年次生は、1年次に学習した生体構造論（解剖学）・生体機能論（生理学）を2年次以降に学習した疾患へのアセスメントの教科とは独立した教科ととらえていた。そのため、生体構造・機能論がどのように代表的疾患の病態生理へ関与しているのか説明しながら、4年次生に生体構造・機能論を教授した。主に、消化器系・循環器系・呼吸器系・神経系に焦点を当てた。

総合人間学

4年次

藤内美保

さまざまな分野で第一線として活躍され、かつ造詣の深い講師を招き開講した。看護学実習や演習を経験した4年次生が各講師の講義を通して物の見方や考え方を学び、人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことができるよう、講師の選定や講義のテーマについて教育研究委員会で検討を重ね実施した。なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報を提供して参加を促している。本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。今年度より、下記講義に加えてこれまでの総合人間学の映像ライブラリーから各自で2回分を映像視聴し、より広範囲の視野を養えるようにした。

- 第1回 9月7日 声のコミュニケーション～声のチカラで自信をつけよう～
キャリアヴォイス®代表 山崎美和
- 第2回 9月15日 看護国際フォーラム
看護のリーダーシップ-保健医療のイノベーションにみる看護科学の将来-
ソウル国立大学校看護大学成人看護学専攻 教授・学部長 スミ・チョイ
看護におけるリーダーシップの進路-効果的なメンタリング関係を通じた
臨床学の発展
ニューヨーク大学校看護大学臨床教授 ジェイムセッタ・A・ニューランド
- 第3回 9月21日 ひとりぼっちを作らない地域を～性的少数者(LGBT)当事者として～
LGBTサポートチーム ココカラ！共同代表 奥結香
- 第4回 9月28日 災害は忘れる暇なくやってくる～防災情報の正しい理解と利用を～
気象予報士・防災アドバイザー 花宮廣務
- 第5回 10月2日 大分市ふれあい市長室（公開講座なし）
- 第6回 10月12日 明るい病院づくりはできる
株式会社麻生 代表取締役会長 麻生泰
- 第7回 10月19日 廣瀬淡窓の心と教を暮らしに活かす
公益財団法人廣瀬資料館 館長 中島龍磨

第 8 回 10 月 26 日 笑い与健康

佐伯市宇目鷹鳥屋神社宮司 矢野大和

地域看護学実習

4 年次前期

赤星琴美、川崎涼子、佐藤愛、小野治子、矢幡明子、福田広美、平野互、吉川加奈子、稗田朋子、桑野紀子

大分県下全域の保健所（保健部支所含む）10 か所、市町村保健センター及び支所 15 か所、合計 25 か所の施設に、それぞれ 2～4 名の学生を配置し 2 週間の実習を行った。地域で生活する人々を理解すること、地域で行われる看護活動の多様さ、多職種との連携の必要性について学んだ。実習指導体制では、それぞれの施設の保健師が実習の現場で直接指導を行い、担当教員は各施設を巡回することで学生と実習指導者双方の状況把握を行いながら、終了カンファレンスでの指導、記録物の指導などを行った。また、金曜日を帰学日とし、学内で教員と学生間で学びを深めた。実習終了後、在宅看護論実習と合同でまとめ会を開催し、実習成果を学生間で共有した。

予防的家庭訪問実習（4 年次）

4 年次

藤内美保、影山隆之、緒方文子、篠原彩

今年度から単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。各チーム担当教員と学生に対するオリエンテーション（4 月 12 日）で、本実習の理念・目的について時間を取って説明し、その後チーム間で前年度の活動について情報交換する機会を設けた。4 年次生は他学年学生とともに 4～6 名から成る 80 チームを構成し、各チームが 1 名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した。3 年次生は特に、協力者が在宅生活を維持するために必要な生活の在り方等を、共に考え、提案し、必要な指導等を実施することを主眼とした。学生は一人当たり年 4 回以上訪問することとし、学生に責任のない事情で予定が変更になって 4 回訪問できない場合は、代替学習（協力者に手紙を書く、入院先を見舞う、等）で補った。年度末に訪問回数不足が問題となる学生はいなかった。看護研究交流センターからメルマガを月一回程度配信し、諸連絡や他チームの情報紹介の機会とした。学生の年度末レポートからは、本実習を通じて高齢者の体調や生活の変化を実感し、下級生に対してリーダーシップを発揮し、自らの成長を実感するなど、実習の目的をほぼ達成できた様子がうかがえた。訪問日程や訪問準備についても意見が出ていたが、チーム毎に計画的に対処できる内容なので、次年度オリエンテーションの際に確認を促すこととする。なお次年度は、学生からみて協力者（高齢者）の健康・生活上の変化が気がかりな場合は、教員と相談の上、大学から地域包括支援センターや民生委員へ連絡を取りサポートのネットワークを構築できるよう、あらかじめ協力者の同意を得るシステムを開始する。

看護管理概論Ⅱ 政策等含む

4 年次前期

福田広美、伊東朋子、吉川加奈子

看護管理の概念を理解し、看護を提供するための「しくみ」について学び、看護職として看護実践のマネジメントについて考えることを主なねらいとした。看護の対象となる人々に有効で良質な看護を提供するための方策である看護管理システムの諸相を学び、管理の概念と看護管理の変遷を振り返りながら、看護領域独自の看護管理のあり方を学び、組織の一員としての関わり方を理解できるようにした。

第3段階看護技術演習

4年次前期

森加苗愛

本科目は、4つのステップからなる看護技術修得プログラムのサードステップの位置づけにある演習である。本演習の目的は、これまでに学んだ基礎看護技術を、e-ラーニングにより主体的かつ計画的に再学習することで、総合的に能力を高めることである。

第3段階看護技術演習では、学生が主体的・計画的にかつ繰り返し学習する環境の提供としてe-ラーニングを行い、知識の習得やレポートを通して看護技術の習得を目指すことができた。

在宅看護論実習

4 年次前期

福田広美、平野互、稗田朋子、吉川加奈子、赤星琴美、川崎涼子、小野治子、佐藤愛、矢幡明子、桑野紀子、山田貴子、後藤智美、岸良達也

在宅看護論実習は、在宅で療養する人々とその家族を対象に、継続した看護が提供されるよう、社会資源を活用したケアマネジメントを通じた訪問看護の実際について、他職種との連携・協働を含めて理解を深めることができた。学生は、事例を受け持ち、看護過程を展開するなかで在宅看護の実践を行った。また、学生は、受け持ち事例以外の症例についても学びを深め、多様な在宅の場で療養生活を送る人々とその家族の看護について考える機会となった。実習最終日には、学生が、在宅看護論実習と地域看護学実習の学びを統合し、地域における看護について学生間の討論を通して、学びを深めた。

総合看護学実習

4年次前期

看護系教員全員

総合看護学実習は4年間の看護学実習の最終段階にあたり、実習の集大成である。本実習の目的は、主体的に実習課題を設定し、看護基礎教育における学びを統合しながらチームの一員として看護を提供するための総合的な看護実践能力、看護の質を保証するマネジメント能力、および看護専門職としての自律性を養うことであり、また、本実習の特徴は、計画から実施・評価までを学生が自律的に取り組む点である。今年度は、4年次生79名が県内39施設において、6月下旬から約3週間の実習を行い、学生は担当教員や臨地指導者の指導・助言のもとに実習目標を概ね達成することができた。実習終了後のアンケートにおいて、9割以上の学生は本実習が実習の集大成であることを意識して実習できたと回答していた。

本実習は看護系教員全員が関わる実習であることも特徴のひとつであるが、指導体制について、専任教員の人数や役割の見直しが課題として挙げられたため、今後検討していく必要がある。

卒業研究

4年次

藤内美保

卒業研究は、研究テーマにおける課題解決や研究仮説を検証するため、研究計画作成から論文作成及び研究発表に至る経験を1人1テーマで研究に取り組み、将来の研究活動の基盤を形成することを目的としている。4年次生79名が卒業研究論文作成、12月5日・6日に講堂で開催した発表会に参加しプレゼンテーションを行った。卒業研究関連のスケジュールは、前年度の12月8日に3年次生を対象に、各研究室の教員が、研究室の特色、研究室で行っている研究テーマやこれまでの卒業研究などを紹介した。その後、学生の希望を考慮し各研究室に配属され、それぞれの研究室において教員の指導のもと、卒業研究のテーマを3月末日までに決定した。4年次に進級し、テーマ決定後は、研究計画に基づき担当教員の指導のもとに研究に取り組んだ。実験研究や調査研究、文献研究など多彩なテーマや方法で興味深いものが多い。今年度の工夫として、本委員会メンバーが卒論発表SGとなり、座長の見直しの提案、要旨集の配布方法、教員の質問方法の見直し、照明の効率化など様々効果的・効率的な運営に向けて改善した。また、卒論の優秀賞の審査方法についても検討し、2日間発表会に参加する審議会メンバーが審査することとした。次年度に向けて、卒業研究の評価方法について1年間通して学生指導にあたる教員が評価する方向で見直す。また、次年度からの卒業式の表彰は、卒業研究優秀賞と科目名称を入れた表彰名に変更することで進めた。

原著講読

4 年次

藤内美保

原著講読は、卒業研究を進めるにあたり、専門領域における英語論文などの文献を正確に読み英語能力を身に付けることを目的としている。4 年次生 79 名は、各研究室に所属し、卒業研究と並行して計画的に進めている。今年度は、全研究室の教員に原著講読の実施状況の実態調査を行った。原著を最高に読んだ研究室の学生は 1 人が 30 件読んでいた。ゼミ回数は平均 4.1 回、学生の原著購読数 4.3 件、原著講読指導時間数 10.4 時間であった。次年度は S 評価導入に向けて成績評価を検討していく。

養護実習Ⅱ

4 年次前期

吉村匠平、関根剛、赤星琴美、伊東朋子、草野淳子

大分市立南大分小学校、荏隈小学校、東植田小学校、王子中学校、植田東中学校、城南中学校、大分県立大分支援学校で、学校安全・保健活動を中心とする実習を行った。

教職実践演習（養護教諭）

4 年次

吉村匠平、関根剛、赤星琴美

学校保健活動を行う現場を念頭に置いた実践的な授業を演習形式で行った。大分県立新生支援学校や県内更生施設でのフィールドワークを実施した。学内演習では、構成的エンカウンターグループのファシリテーター体験、場面指導案の作成と実施、投影的な自己理解促進の手段としてのフォトコラージュ体験などを行った。

看護スキルアップ演習

4 年次後期

森加苗愛

本演習は、今年度から本委員会が運営することとなった。本演習の実施期間が第 4 段階実習期間であり、教員の指導体制を工夫する必要があったため、内容を洗練させ事例数を 5 事例に減らし取り組んだ。看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を統合し、アセスメント能力および看護技術実践能力を養うことをねらいとして

事例をとおしてロールプレイを行い、学生の学びと教職員の指導とが円滑に展開されるよう準備・調整・展開した。

実施後の学生からのアンケートでは、ロールプレイ後のディスカッションの充実や教員からの多くの講評を求める声があげられた。本演習の実施時期として、教員の指導体制や参加が難しくなる時期で課題であるが、人間科学系の先生方にも指導や講評において協力を依頼し、更に充実した運営を検討していきたい。

医療福祉と人権

4 年次後期

平野 互

看護専門職としてだけでなく社会人として必要な基本的人権に関する知識を習得するとともに、人権感覚を身につける目的で開講される選択科目である。人権という概念を整理し、法に規定された事柄だけでなく、その本質的な意義と役割について理解できるよう、「人権 その概念と意義」、「医療福祉における人権課題」、「人格と自由権」、「社会権～生存権と社会保障」、「子どもの人権」、「高齢者の人権」、「患者の権利」、「障がい者の人権」、「差別と優生思想」の講義を行った。

4 年次後期の選択科目のためであろう、久しく履修生がなく、4 年ぶりに開講された今年度も受講生は 1 名であったが、ゼミのように議論しながら、受講生の問題意識に寄り添って講義を進められ、受講生の理解も深まったと思われる。

3-7 大学院科目

3-7-1 博士（前期）課程

生体科学特論

1 年次前期

濱中良志、安部眞佐子、岩崎香子

現状において、1 年次生は臨床経験を有しているため、生体科学（解剖・生理・生化学）の分野の基本的な理解はできていた。よって、各臓器における解剖学・生理学・生化学の復習をした後、関連する重要疾患の病態生理から各臓器の正常の機能について“対話形式”で授業を進めた。

病理学特論

1 年次前期

市瀬孝道

疾病の基本的事項を理解するために生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、また、腫瘍、代謝障害、先天異常などの病気の基礎を講義した。更に系統別の個々の疾患についてプリントとパワーポイントを用いて詳しく講義した。系統別疾患の講義の中では疾患症例について、マクロ病理（解剖時の所見）とミクロ病理（病気の組織像）についてパワーポイントで説明し、病気の理解を深めた。

病態生理学特論

1 年次前期

濱中良志、岩崎香子

重要疾患を論理的に説明できるように指導し、発表・レポート提出を通して、その疾患の病態生理学を教授した。

健康増進科学特論

1 年次前期

稲垣敦、安部眞佐子

はじめに、科学について概説し、測定と評価、運動の強さと量の測定について説明した。臨地で運動メニューの作成や運動指導ができるようにするため、加齢と体力、エネルギー代謝、運動強

度、身体活動量、呼吸循環器系持久力、筋力トレーニング、ストレッチ、運動療法等について講義した。また、エネルギー消費量、身体活動量、柔軟性、最大酸素摂取量、運動強度の測定実習等を行った。

栄養学として、栄養素の基礎の復習をし、著しく解明されてきた脂肪酸の効果について講義した。脂肪酸組成の異なるダイエットの例として地中海式食事の説明をし、メタボリックシンドロームと食事の英語の論文を読んで、解説を加えた。

人間関係学特論

1・2年次後期

関根剛、吉村匠平

本講義はシラバスの構成を中心に、受講者の関心や希望を取り入れて講義テーマのバランスをとりながら内容を決定した。内容に応じて、関根、吉村で担当を分担し、講義および演習を行った。吉村は、行動分析の基本理論や応用を中心に解説しながら、検診受診率をあげる、禁酒禁煙、妊産婦の行動変容、発達障がいへのアプローチなどの現実課題についての対応について解説した。関根は、行動変容の理論である多理論統合モデルについて解説して健康行動を効率的に変容させる方法について教授した。また、グループ指導のための技法と演習、PTSDと被災者・妊婦への対応などについて解説をした。評価は、関根・吉村がそれぞれ独自に課題提出などをさせ、合計による評価を行った。

看護管理特論

1・2年次後期

福田広美、佐藤弥生、甲斐仁美、柿本貴之

看護管理特論では、保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる組織論、人材育成、マネジメントに関する理論とその展開について教授した。学生が、マネジメントプロセスの理解を深め、質の高い看護サービス提供のために組織が備えるべき機能、看護管理者に必要とされる能力について考える機会となった。さらに学生が、看護管理に関するテーマを選び、自らの経験を踏まえて、マネジメント理論や論文等を活用したプレゼンテーションを行い、クラスメンバーとディスカッションを行った。

看護理論特論

1・2年次後期

藤内美保、高野政子、桑野紀子、秦さと子、筒井真優美、伊東朋子

看護実践の基盤となる看護諸理論を理解し、看護実践と理論のつながりを通して、看護を探求させた。また看護と科学的解釈の本質を考究するための導入として外部講師である筒井真優美教授に看護理論の総論の部分の講義を依頼した。各論として、他の4名の担当教員が専門とする内容をチュートリアル形式で講義した。また看護理論のパラダイムの視点から履修学生には課題として調べさせた理論家について発表させて、看護実践を考察させた。

看護教育特論

1・2年次後期

高野政子、藤内美保、梅野貴恵、秦さと子、吉村匠平、山崎清男

看護を担う人材育成が質の高い看護教育の基礎をなすという観点から、教育的機能の基本を理解するために、看護教育の歴史的変遷と看護教育制度を学ぶことから始め、看護学教育の現状を理解するようにした。看護基礎教育のうち、専門分野の看護教育学、看護教育課程、看護教育方法、看護教育評価を含む内容を教授した。外部講師は教育原理、教育心理学を講義している。履修生は、看護管理・リカレントコース、助産学コースの6名であった。後半は、各自の立場で教育的視点に立ち、問題を明確化した。レポート提出と発表を課題として意見交換した。

看護コンサルテーション論

1・2年次後期

杉本圭以子、吉村匠平、関根剛、竹村陽子

看護におけるコンサルテーションの概念と方法、プロセスの概略を講義し看護コンサルテーションの全体像をつかんだ後、外部講師（専門看護師）が現場でのコンサルテーションの実際を講義し、臨床現場に即した現実的なコンサルテーションについて考察した。さらに対象者理解のための心理的アセスメント、効果的な心理教育と心理的援助の方法について講義した。講義での学びをふまえ、後半は学生が経験した事例を持ち寄り、ディスカッションすることで看護コンサルテーションについてさらに理解を深めた。

看護倫理学特論

1・2年次前期

平野互、小野美喜、関根剛

倫理的思考は、専門領域を問わず全ての看護職に不可欠であることから、受講者が専攻する各領域で活かせるよう、必要な生命倫理・医療倫理の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく思考訓練を行うことを目的に講義を組み立てている。11回の講義と担当教員ごとに事例演習を行い、さらに最終回には受講生の事例報告（レポート）による討論を行った。

講義は、「Profession の責任と倫理」・「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「倫理的判断の方法」・「人間の尊厳と自己決定権」・「プライバシー権」・「苦情解決と倫理」を平野、「看護職の責任と倫理規程」・「看護職の価値観と倫理」、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小野、「倫理的行動とコミュニケーション」・「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根が担当した。事例演習は、3名の教員各々が講義と関連付けて行った。最終回の事例報告は、例年同様受講生が20名を超えたので、レポートのテーマをもとに3名の教員で割り振り、それぞれ討論を主宰して評価を行った。

看護政策論

1・2年次後期

影山隆之、小山明夫、小池智子、中西三春、立森久照、村嶋幸代

日本の看護・保健・福祉政策の最新の動向と、これらの政策や事業の評価方法及び評価の実例、及び大分県における看護政策について、オムニバス形式の講義を開講し、一部に演習の要素を取り入れた。履修者のリフレクションでは、政策研究の第一線で活動する外部講師の講義・演習が刺激的で有意義だったと報告された。

看護科学研究特論・健康科学研究特論

1・2年次前期

小嶋光明、村嶋幸代、藤内美保、影山隆之、甲斐倫明、佐伯圭一郎、福田広美、平野互、関根剛、桑野紀子、大田えりか

看護科学研究と健康科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じて実践的能力の育成を行った。実験的研究、質的研究、文献研究などを実際に行っている教員に講義をしてもらうことで研究手法がより理解できるように努めた。

保健情報学特論

1・2年次前期

佐伯圭一郎、品川佳満

保健医療分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術について、演習も交えながら教授した。後半の生物統計学については、事前学習と発表を組み込んだ形式で学習の充実をはかるとともに、事前事後の試験により知識と技術の定着を確認した。

英語論文作成概論

2年次前期

甲斐倫明、影山隆之

テキスト（ボタージュ先生の医学英語論文講座）と作成資料を用いて、英語論文の書き方の概要に始まり英語表現まで、英語論文の作成に際して理解しておくべき項目を教授した。実験系および調査系の英語論文の構造化アブストラクトを書けることを目標に講義を行った。提出されたアブストラクトの添削指導を行った。

Intensive English Study

1年次前期

Gerald T. Shirley, Yume Takano

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their progress was monitored and evaluated by the instructors during the eight-week course. Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructors. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed. The TOEIC-IP test was administered before and after the CALL course, and it was mandatory that students take both tests.

原書講読演習

1 年次前期

宮内信治

発音記号の復習、語源学の知見を基にした医療看護英単語の習得、英文法基礎知識の確認と演習を行ったうえで、看護（Nurse Practitioner）に関する英文原著の読解翻訳演習を行った。各講義のはじめに単語小テストを実施し、学習確認と評価を行った。

健康社会科学特論

1・2 年次後期

平野互

人間の健康に関わる研究や職業的実践においては、個々の人間行動の分析・探求と並んで、社会政策など社会システムに対する分析、社会学や文化人類学等の社会的アプローチが重要である。これら社会科学的思想と方法論の基礎を習得することを目的として、講義と課題演習を行った。

受講生が 1 名であったため、方法論や基本的な理念に関する知識を伝授するための講義のほかは、受講生の視野を拡大することと、キャリアや研究テーマに寄与できることを目的に、受講生の学問的関心に沿った課題に限らず、これまで接してこなかったであろう分野の研究の紹介と討論を行った。課題演習は、受講生の選択したテーマに沿った文献の抄読と討論を行った。

看護アセスメント学特論

1 年次前期

藤内美保、高野政子、伊東朋子、石田佳代子

クライアントマネジメントを遂行するために、看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従った身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。1 点目は、看護過程を展開する場合の看護理論による違いにより、看護診断に違いがあるか、診断過程の違いがあるかなど検討する。2 点目は、小児のフィジカルアセスメント、看護過程の展開を行い、レポートさせた。3 点目は、在宅看護における神経難病の患者理解と看護判断についての演習をした。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

精神保健学特論

1 年次前期

影山隆之

地域・職域における精神保健活動に必要な知識として、精神健康のモデルと評価法、事例のアセスメント、精神保健の法制と政策、最新の自殺対策等について、講義形式で開講した。ただし、広域看護学コースでは昼間開講し、国試必須科目として行政保健師・産業保健師に必要な実践的内容に比重を置いた。研究者・リカレントコースに対しては夜間開講し、受講者の関心が高いトピックスを加味した。

看護管理学演習

2 年次

福田広美

看護管理に関する実践力を高めることを目的に、臨床の現状分析を行い、課題を明らかにしたうえで看護管理演習の計画を立案するよう教育を行った。さらに、立案した計画をもとに演習と文献による考察を行い看護管理の実践向上に繋げることを目指し、演習を行った。受講者は、臨床現場の課題について現状分析を行い、課題解決に繋がる研修ならびに計画を立案、他施設等における研修を行い、看護管理について新たな視点や学びを深めた。最終的に、受講者が演習成果をポートフォリオにまとめ、受講者間で発表と意見交換を行った。

基盤看護学演習

2 年次後期

藤内美保、影山隆之、品川佳満、伊東朋子

基盤看護学における研究の方法について様々な視点から、その手技方策を具体的に解説することを目的に 4 名の担当教員によるチュートリアル形式で展開した。履修学生には与えられたテーマである「精神健康測定法」、「看護師の臨床判断と形成過程」、「自律神経機能とその測定方法」、「看護研究における実験的研究」に沿ってレポートを作成させ、今回は履修学生が 1 名であったので、担当教員との対面での授業を通じて、内容を深めさせた。

成人看護学特論

1 年次前期

森加苗愛

成人期の発達課題や健康問題への理解を深め、健康の段階に応じた看護を実践するための理論と方法を探究することを目的とした。学生の臨床経験に基づき、成人期の看護実践において感じている臨床課題や関心事を深めるための看護理論の講義を行った。その後、学生が実践した「良い看護ができた」と評価した事例、「良い看護ができなかった」と評価した事例に基づき、なぜそのような評価を行ったのかを看護理論において事例を振り返りながら根拠に基づき看護実践とは何かをゼミ形式で探究した。日々の実践に追われる中、自己の看護実践に関する根拠の明確化と意味づけができる講義に繋がったと考える。

生殖看護学特論

1 年次前期

林猪都子

思春期、成熟期、更年期、老年期の各ライフステージにおける女性の身体的、精神的、社会的特徴と看護問題として、性教育や乳がん疾患、中高年女性の尿失禁について、その看護援助の方法およびセルフケアのための教育のあり方について講義し、ディスカッションした。また現在の日本や海外における母性、助産活動の現状と課題として、産後ケアシステムや海外におけるウズベキスタンや米国の看護について探求した。

発達看護学演習

2 年次前期

林猪都子、小野美喜

<生殖看護学領域>

母子保健の動向と助産師の役割について理解を深めた、特に子育て世代包括支援センター、産後ケア事業、健やか親子 21 について学び、自己課題である「地域における新生児訪問」について学習を深め、原著購読を実施した。

<成人・老年看護学領域>

成人の発達課題と学習行動の特性について文献による知見とディスカッションを通して探求した。また青年期・成人期にある看護師の学習行動を促進していくためのアプローチについて事例を用いて検討し、自己の研究課題とも連動した演習を行った。

地域看護学特論

1 年次

赤星琴美、川崎涼子、村嶋幸代、小野治子、緒方文子

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的に看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

特に、産業保健領域で活用可能な理論を用いて事例を理解する方策、職場における看護活動を組織的に展開する方策について討議を行った。地域職域連携の意義や活動事例について最新の情報を活用し、複雑化する地域住民や労働者への看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

国際看護学特論

1 年次後期

桑野紀子

看護の対象を世界中の人々に広げて捉えなおし、グローバルヘルスの課題やそれに対する対策の基本的枠組みについて、また、文化に配慮したケア (Transcultural Nursing) について、ディスカッションを交えながら講義形式で授業を進めた。国際機関のホームページから情報を得る方法と情報解釈に関する内容も組み込んだ。また、受講生の研究テーマに関連した英語論文についてもディスカッションした。

広域看護学演習

2 年次

赤星琴美、福田広美、桑野紀子

公衆衛生看護、看護管理、国際看護および公衆衛生領域における最新のトピックスを扱った論文を取り上げ、各教員が分野ごとにチュートリアル方式により演習を行った。

特に、各保健領域での法改正や事業の見直しなど、常に新しい情報を学生へ提供しつつ、具体的に理解できるように教授した。

広域看護学概論

1年次

赤星琴美、川崎涼子、村嶋幸代、佐藤愛、小野治子、藤内修二

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。さらに個人・家族・集団・地域社会の視点、家庭・職場・学校・国際社会の視点、全てのライフステージの視点という広域的に看護活動の意義、目的、機能、役割を探究した。

地域保健領域で活用可能な個人レベル・集団レベル・地域レベルの理論について、学生がプレゼンテーションを行い、討議を重ねながら複雑化する行政機関における広域看護の役割・機能を具体的に理解できるように教授した。

地域保健特論

1年次

赤星琴美、川崎涼子、大津孝彦、矢幡明子、鈴木由美、清水久美恵、大戸英輔

地域で生活する個人・家族・集団を対象とした保健師がおこなう支援の基本的な考え方を理解し、人びとが生活している地域における看護の役割と機能を理解できるよう講義した。母子保健活動は県および市の保健師を招いて現在の母子保健活動の実際と課題について討議した。さらに、歯科保健やこどもの貧困問題への取り組みについても県の担当者による実践を教授し、現在の課題を理解できるようにした。学生が最新の情報や課題を理解し、今後の展開を検討できるよう討議を含む講義とした。

産業保健特論

1年次後期

川崎涼子、高波利恵、緒方文子、吉田愛

労働環境および作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害を防止し、身体的・精神的・社会的健康と福祉を維持増進するための産業保健システム、活動、看護の位置付けと役割、具体的な活動方法をヘルスプロモーションや産業保健に関する理論およびモデルを用いて教授した。

企業で働く保健師を招き、職域における保健師活動の現状と課題について実際の活動事例を示しながらディスカッションを含めた講義を行った。

学校保健特論

2年次

赤星琴美、岡司和子

学校保健安全法に基づく学校保健のあり方と、学校保健を担当する専門職、特に養護教諭の役割と機能について教授した。また、学校保健の対象の特性を理解し、それぞれの発達段階を踏まえた保健指導、健康教育等の具体的方法について教授した。

養護教諭であり、公立中学校の校長をされていた方を講師に招き、現在の学校が抱えている健康課題や地域の保健師との連携の取り方など実際の状況を教授して頂いた。さらに最新の文献を用い、変化する子どもの健康問題に対応するための地域保健の連携や組織的な解決手段についてディスカッションを通じて考えを深めた。

健康危機管理論

1年次後期

川崎涼子、赤星琴美、本山秀樹、甲斐倫明、若松正人、玉井文洋、小野治子

地域社会における健康危機管理（災害時保健活動を含む）に関する基本的な考え方やリスクマネジメント、保健師活動の展開方法について理解を深めることができるよう、実際の事例を用いた講義を行った。また、健康危機管理における多職種連携について理解を深めるため、県健康危機管理の経験者、県食品課の担当者を講師として招き、地域での健康危機管理の実際や課題、具体的な活動方法について事例を使いながら講義を行った。

また、大分 DMAT で活躍している講師による講義を通して、トリアージの実際を経験し、大規模災害発生時の対応についても学ぶようにするなど、実践に即した学習内容を構成した。

健康増進技術演習

1年次

関根剛、安部眞佐子、稲垣敦

本講義は、対象者の健康レベルに応じた個人・集団の健康と生活を評価し、より効果的な疾病予防・健康増進のための知識と能力を養うことを目的としたものである。疾病予防のためのアプローチとして、運動指導、栄養指導、心理相談という4つの領域を設定し、それぞれ、6回、7回、8回の講義・演習を実施した。

運動指導については、はじめに、科学について概説し、測定（数量化）の重要性を解説してから、タイムスタディや加速度計による身体活動量・強度の測定、自転車エルゴメーターによる最大下負荷法による最大酸素摂取量の測定（推定）、科学的根拠に基づいたストレッチングの効果の実験的検証等を行った。体力や運動機能とその老化、トレーニングについての講義やエクササイズ・

ウォーキングや介護予防運動の実技指導も行った。栄養指導については健康日本 21 の中の食事摂取基準の位置付けや食事バランスガイドについて、また、妊産婦の栄養摂取について講義を行った。さらに、疾病時やライフステージ別の演習を行い、学生が発表したものにコメントをした。心理相談については、集団指導技術として構成的エンカウンターグループの理論を概説し、実際のグループ指導案作りを行った。また、研修目標の立て方、講義スキルの講義とあわせて、実際にグループ指導を行う機会を持った。さらに、細やかな対象者理解のための心理相談技術の演習を行うなどした。

評価はそれぞれの講師がレポートや演習などを課して、3名の合計による総合的な評価を行った。

広域看護アセスメント学演習

1 年次前期

川崎涼子、赤星琴美、村嶋幸代、佐藤愛、小野治子、横山光政

地域の健康課題の抽出および評価の方法として地域看護診断の基礎的考え方や方法論を教授した。既存資料の活用や地区視診を行うことで、対象集団の理解やニーズを多面的にアセスメントし、地域の抱える健康課題、地域住民の健康課題を抽出し、支援方法を立案する演習を取り入れた。また、大分県国民健康保険団体連合会の担当者により、国民健康保険データと KDB システムの理解を深める講義・演習を実施した。さらに、「地域マネジメント実習」を行う対象の市の二次データを用いて地域看護診断演習を行い、2 回の間報報告で学生や教員との討議を重ね、実習科目との連動を図った。

健康教育特論

1 年次前期

川崎涼子、赤星琴美、佐藤愛、小野治子、高波利恵

個人と集団が、自らの健康および福祉の維持増進のための主体的な取り組みが行えるための支援方法について講義を行った。必要な知識・技術を対象者に効果的に伝達できる能力を習得できるよう講義と演習を組み合わせ教授した。また、行動変容理論の活用や、コミュニティオーガニゼーションを用いて個人・集団・組織に教育的に働きかける方策と保健師の地区活動の展開方法について教授した。また、家庭訪問指導や集団に対する健康教育では、一人で企画、指導案の立案、実施デモンストレーションを行い、さらに修正していくという過程を踏むことで学習を深めた。

健康リスクアセスメント演習

1 年次後期

赤星琴美、川崎涼子、佐藤愛、小野治子

個人、家族、集団が抱える潜在的な健康問題（リスク）を的確に予測し、保健師としてのリスクマネジメント、支援のあり方を習得するために講義と演習を行った。さらに、対象者または対象集団がリスクを予測し、自らリスクマネジメントができる支援方を習得するため、具体的な事例を使用して学習を深めた。

疫学特論

1 年次前期

佐伯圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を教授した。テキストの講読とディスカッション、確認のための小テストを組み合わせることで学習の定着をはかった。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。

疫学・保健統計学演習

1 年次後期

佐伯圭一郎、品川佳満

疫学および保健統計学の知識に基づいて、実践する能力を身につけることを目的として演習を行った。保健師業務に必須である ICT 技術を身につけ、情報収集・分析・発信に活用できる能力を養った。

社会保障システム特論

1 年次前期

平野互

保健師の活動に不可欠な知識である社会保障制度について、その意義および理念と構造に対する理解を深めるために講義を構築した。

社会保障の存在理由である生存権の意味と法・行政など社会制度の位置づけ、諸制度の内容と課題を理解することを目的に、総論として法と行政の構造、財政の仕組み、社会保障理念の変遷について論じ、次いで各論として、所得保障の諸制度、医療制度とマンパワー、医療の安全管理、公衆

衛生施策の体系、高齢者の保健とケアの制度、児童福祉、障がい児・者福祉の諸制度について講義した。成績評価は、講義内容に関連して、中間と期末の2回、情報を収集し考察を行うレポートにより行った。

保健医療福祉政策論

1 年次後期

平野互

保健師の職務に必要な政策形成、企画立案の能力を涵養する目的で、保健・医療・福祉の基本的な政策理念と政策上の課題、社会保障財政の現状と課題、障がい論とくに社会モデルの意味と課題、自立支援について講義し、さらに事業評価ならびに地方行政における政策形成については、理解を深めるために、教員自身の経験した実例（保健事業評価、社会福祉事業第三者評価および県条例策定）を基に実務の現実を紹介した。成績評価は、大分県内の保健・医療・福祉に関する基本計画を検索、整理して課題分析を行うレポートにより行った。

疾病予防学特論

1 年次前期

赤星琴美、藤内修二、池邊淑子、三浦源太、増井玲子

さまざまな健康レベルにある個人、集団を取り巻く家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけるために、解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識を教授した。また、疾病予防のためにエビデンスに基づいた保健師としての健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、必要な知識、および実践能力を取得できるように教授した。

実践薬理学特論

1 年次前期

吉田成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。

本年度は受講者が6名であったため、受講者の学習状況に差が認められた。ただし、理解度が

低いということではなく、正確に理解している学生が増えてきていることに起因する。より幅広い内容の講義を行うことを今後検討する必要がある。

薬剤マネジメント学特論

1年次

川崎涼子、平川英俊

地域で治療や服薬指導に関わる看護職として、薬剤コンプライアンスの基礎知識を学ぶとともに、ノンコンプライアンス者とその家族への処方内容・指示に関する指導、家庭での薬剤管理（残薬管理等）と服薬方法などについて実践に繋がる知識が得られるよう教授した。さらに、薬物依存の生理学的メカニズムや健康危機状態にあるハイリスク対象者への薬物の取り扱い方法、内服方法、効能などについての薬剤指導法（抗結核薬、抗うつ・抗不安薬、催眠・鎮痛剤、副腎皮質ホルモン剤などの取扱と服薬方法など）など保健師の保健指導に必要な知識などについて、具体的に理解が深められるよう、資料とパワーポイントを活用した。地域における薬物依存対策や禁煙対策における多職種連携の一つとして地域に拡大する薬局の現状と課題について事例を用いて討議した。

環境保健学特論

1年次後期

甲斐倫明

健康に関する最新のニュースおよび英語原著論文を資料として、健康と物理的要因、化学的要因、生物的要因あるいは社会的要因との関係について講義を行った。個々の問題について、基礎概念の解説を行うと共に、最新のニュースおよび原著論文の結果に対する討論を行い、問題の多面性（自然科学的側面、統計学的側面、社会的側面など）を学生が考えるように努めた。また、社会的側面については、学生の考えを発言する対話形式を導入して行った。

地域生活支援実習

1年次

赤星琴美、川崎涼子、佐藤愛、小野治子、村嶋幸代

開発すべき社会資源や健康政策・保健医療福祉システムについて考察・探求し、地域社会の健康づくりの組織者として、個人のみならず地域社会全体の QOL を向上させる活動を研究的視点を持ちながら実行できる能力を養うことを目的に実習を展開した。

県内の保健所および市において、5週間の合計 25 日で構成した。8名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

12月14日に大学において、実習成果報告会を開催し、実習成果を共有した。

地域マネジメント実習

1年次

川崎涼子、赤星琴美、佐藤愛、小野治子、村嶋幸代

広域看護アセスメント学演習や健康教育特論の演習や発表と連動し実習が効果的に行えるようにした。地域看護診断では、地域全体の健康課題の解決に向けた地域活動支援を実施し、評価ができる能力を養うことと、地区組織化活動や地区管理を通して、関係者・関係機関との連携・調整・交渉などができる能力を養うこと、地域資源の過不足をアセスメントする力を養うことを目的に実習を展開した。県内6か所の市町において、4週間の合計20日で構成した。6名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。

10月4日に実習施設だけでなく、大分県国民健康保険団体連合会、全国健康保険協会大分支部、大分県福祉保健部医療政策課の方々の参加を得て、実習成果報告会を開催し、実習成果の共有とともに各市町の健康課題についての意見交換を行った。

広域看護活動研究実習

1年次後期、2年次前期

赤星琴美、川崎涼子、佐藤愛、小野治子、村嶋幸代

開発すべき社会資源や健康政策・保健医療福祉システムについて考察・探求し、地域社会の健康づくりの組織者として、個人のみならず地域社会全体のQOLを向上させる活動を研究的視点を持ちながら実行できる能力を養うことを目的に実習を展開した。

広域看護活動研究実習Ⅰでは、県内の保健所および市において、準備期間、まとめ期間を含む5週間実習を行った。5名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習地で現在進行形の課題を実習テーマとして取り組んだ。12月13日に大学において、実習成果報告会を開催し、実習指導保健師だけでなく、国保連合会、協会けんぽ等からも参加を得て実習成果を共有した。

広域看護活動研究実習Ⅱでは、県内の企業4か所（大分キヤノンマテリアル株式会社、ダイハツ九州株式会社、旭化成メディカルMT株式会社、株式会社大分銀行）、大分労働衛生管理センターで職域における産業保健実習を行った。また、由布市地域包括支援センターにおいて地域包括支援センターの機能と保健師の役割について学ぶ実習を行った。

助産学概論

1 年次前期

梅野貴恵、林猪都子

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会変化のなかで期待される役割と重要性について、さらに助産師活動に取り組む姿勢や助産師のキャリアラダーについて系統的に教授した。授業は、資料を用いた講義形式と学生が事前課題についてプレゼンテーションし、ディスカッションを行う方法をとった。「出産の満足度」に関する研究論文を各自でクリティークし発表した。また『WHO 勧告にみる望ましい周産期ケアとその根拠』等の資料を用いたディスカッションを通して、助産とは何か、妊産婦が望む出産、社会に求められる助産師の役割について自己の助産観を述べ、他者の考えも知る機会とした。

周産期特論

1 年次前期

佐藤昌司、飯田浩一、豊福一輝、嶺真一郎、後藤清美、梅野貴恵

すべての講義は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師・新生児科医師を講師とした。妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその管理についての基礎知識、さらに周産期における異常の判断をするために、主な疾患の病態・検査・治療や NICU における新生児管理、新生児救急蘇生法について教授された。評価は、筆記試験を実施した。

母子成育支援特論

1 年次前期

梅野貴恵、高野政子、平野互、吉村匠平、桑野紀子、佐藤敬子、井上祥明、上野桂子

母子関係や家族をめぐる問題、女性のライフサイクルにおける不妊や出生前診断、愛着喪失などの心理・社会的問題、子育てを取り巻く問題や虐待、子育て支援制度を理解し、助産師活動を実践する上で基盤となる内容を教授した。各分野の専門性を考慮し、学内外の講師のオムニバス形式で実施した。子育て体験は、育児体験人形を自宅に持ち帰らせ、学生がおむつ交換、授乳やあやすなどの子育てを 24 時間体験した。体験後、夜間に激しく啼泣すると近所迷惑になるなど子育てに不安をもつ母親の気持ちを理解する機会になっていた。

リプロダクティブ・ヘルスト論

1 年次前期

井上貴史、中村聡、嶺真一郎、宇津宮隆史、石井照和、梅野貴恵

すべての講義は性と生殖における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産婦人科医師を講師とした。性分化の機序、生殖器に関する形態機能や主な疾患及び治療に対する基礎知識、遺伝疾患や遺伝カウンセリング、最新の生殖補助医療の現状と課題、ワクチン接種等の予防を含めた子宮頸癌の動向についても教授し、評価は筆記試験を実施した。

ウィメンズヘルスト論

1 年次前期

梅野貴恵、甲斐倫明、市瀬孝道、影山隆之、林猪都子、桑野紀子、實崎美奈

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に関わる健康問題を理解し、健康教育を実施するための知識や技術を教授した。主な内容は、講師の専門性を活かしたオムニバス形式で実施し、発表やレポート課題で各講師からの評価を得た。

妊娠期診断技術学特論

1 年次前期

安部真紀、梅野貴恵、吉田成一、安部真佐子、小嶋光明、渡邊しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する情報収集に必要な基礎的な知識と、薬理、栄養、放射線障害などの知識と実践の手法を教授した。対象理解がすすむよう事例を用いたシミュレーションを行い、適宜グループディスカッションと小テストで知識の確認を行った。正常逸脱を予防するアセスメントと助産技術の重要性及び妊婦とその家族を取り巻く環境の理解を深めた。

分娩期診断技術特論

1 年次前期

樋口幸、安部真紀、生野末子

分娩期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメント・助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術を習得することを目的に、講義と事例を用いたシミュレーション演習を取り入れた。それにより臨床での場面をイメージしながら、母児の生命の安全維持かつ、母親が主体的に分娩に臨み、満足感を得ることができるよう支援するための基本的な

助産の実践能力を習得できた。また、段階的に様々な事例を展開することで、正常からの逸脱を迅速かつ的確に判断し、他の周産期医療専門職種と連携して緊急性の高いニーズにも対応し得る基本的な知識及び技術を習得できるよう講義と演習を行った。

産褥・新生児期診断技術特論

1年次

樋口幸、大矢七瀬

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、助産を実践するための内容を教授した。新生児の講義・演習では、NICUにおけるケアを体験し、「周産期診断技術演習」や「NICU 課題探究実習」の導入とした。授業方法は講義と演習を組み合わせで行った。また、退院後の生活も見据えた退院指導と家庭訪問の充実を目標に、個人で指導案・パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換や自己評価を行った。母乳育児支援に向けて、学内の乳房モデルや模型を使用し、乳房トラブル予防のためのマッサージ（堤式）方法や授乳指導の演習を取り入れ、実際の事例や場面を想定した演習を行った。学生は積極的に講義、演習に参加し、活発なディスカッションとリフレクションを行った。

周産期診断技術演習

1年次

樋口幸、大矢七瀬、佐藤昌司、梅野貴恵、安部真紀

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態をエビデンスに基づいて診断する技術と、具体的な支援方法について教授した。胎児の健康状態の診断については、高機能シミュレーターを用いて胎児の計測や奇形の有無などから成長・発達、健康状態の診断、異常の早期発見に関する知識と技術を習得し、OSCEで到達度チェックを行った。さらに、CTG波形の判読についても実際のモニター波形から学び、総合的に胎児の健康状態を診断できる能力を養った。また、新生児蘇生法については、学内演習で新生児蘇生のアルゴリズムに則り、新生児モデルで出生直後から気管内挿管、薬剤の投与に至るまで、様々な事例に合わせて必要な援助技術の習得を行った。その後日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法「一次」コースを受験し、全員合格した。さらに、マタニティーヨーガやマタニティーピクス、骨盤矯正や産褥体操など、分娩や育児期の身体づくりやマイナートラブル緩和のための方法について、解剖生理も含め理論を教授し実際に体験した。学生は、自分自身の心身と向き合い変化を感じることで、対象者の状態に合わせた保健指導の質の向上について考えることができた。また、宗教的背景や早産児等の様々な状況に合わせて柔軟に対応できるよう、母乳育児支援の他に人工栄養の基礎知識についても教授した。学生はすべての講義・演習に積極的に参加した。

助産保健指導演習

1 年次後期

安部真紀、梅野貴恵、林猪都子、樋口幸、大矢七瀬

女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する問題を実践に応用する思考過程と保健指導案の立案及び実践方法を教授した。小学校における性教育の実践、妊娠期及び産褥期の保健指導の演習を行った。学生自ら創意工夫し教材作成を行い、指導案立案と実践を行った。本年度は模擬患者3名への小集団指導を行い保健相談、健康教育、援助活動の効果的な実践の能力を養った。

助産過程展開演習

1 年次後期

梅野貴恵

助産を実践するための基本的な助産過程の展開についてペーパーペイシエントを用いて、実践に応用する思考過程を教授した。助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授したのち、正常から逸脱した妊婦1事例、正常経過をたどる分娩期事例1例、分娩期ハイリスク事例1例の計3事例を用いて助産過程の展開を実施した。事例の展開方法は各自で自己学習したのち、グループワークを行った。本年度は2名ずつのグループで『実践マタニティ診断』の診断指標についてディスカッションができ、発表時に思考の確認をすると、これまで学習してきた知識を活用して根拠を述べることができていた。実習終了後の2年次生に聴き取りをした結果、この演習が実習中の助産診断過程に活かされていることがわかった。しかし、分娩進行中に医療介入が実施された場合の助産診断の修正が困難との意見が聞かれたことから、今年度は分娩経過中の変化（点滴誘発）を取り入れ、臨床推論力を強化した内容とした。評価は、提出されたレポート、発表内容から行った。

助産マネジメント論

1 年次後期

梅野貴恵、生野末子、戸高佐枝子、安部真紀

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために必要な助産管理を教授した。主な内容は、管理の基本概念、助産管理の概念と助産業務管理、助産に関連する法規、助産所の経営管理と働く場の違いによる助産業務管理の特性、周産期管理システム、周産期における医療事故とリスクマネジメント、母子への災害看護等を取りあげ、オムニバス形式で実施した。

妊娠期課題探究実習

1 年次後期

梅野貴恵、樋口幸、安部真紀、大矢七瀬

妊娠期の助産診断技術を活用し、妊婦と胎児の健康水準を助産師が自律的に判断し、科学的根拠に基づいた助産診断を行い、妊婦のニーズに寄り添い、安全で快適な出産を迎えるための保健指導ができる能力を身につけるための実習としている。10月から8週間で大分県立病院総合周産期母子医療センター産科外来、わたなべ助産院、生野助産院で実習し、12月からは、堀永産婦人科医院、あおい産婦人科、国立病院機構別府医療センターに分かれて実習した。12月中旬に、前半の実習の学びと後半実習の自己の課題を明確にするために中間報告会を実施した。2月第2週からは6~7月に出産予定の妊婦を継続事例として受持ち健診日に実習した。臨地の産科医師や助産師の指導を受けながら、超音波診断装置を用いた妊婦健康診査20例と個別に応じた保健指導の実際12例以上の目標はほぼ到達した。

NICU 課題探究実習

1 年次後期

梅野貴恵、樋口幸

ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し、子宮外生活適応の過程をアセスメントし、個別に応じた看護を展開し、母子分離された母親とその家族への親子関係成立のための支援を実施するために、大分県立病院総合周産期母子医療センターNICUで、2週間ずつ実習を行った。学生はハイリスク新生児（経験者は超低出生体重児）1名を受け持ち、受持ち児と保護者のニーズに応じた看護過程の展開を実施し、保護者への退院指導の一部を実施した。また、NICUに入院中の超低出生体重児の看護や他部門との連携を見学・参加することで、母子分離された両親への愛着形成促進へのケア、家族とのつながりや退院後の生活を考えた育児環境の調整、助産師として妊娠期から果たすべき役割について学ぶ機会となった。

分娩期実践演習

2 年次前期

梅野貴恵、樋口幸、安部真紀、大矢七瀬

産婦に対する助産実践に必要な基本的分娩介助技術を習得することを主な目的に教授した。講義やVTR、デモンストレーションで一通りの分娩介助技術を指導した。1年次より分娩介助時の技術に必要な清潔操作などの基礎看護技術OSCEを終えていることもあり、分娩介助に必要な技術を中心に指導した。学生は全体的に産婦を想定した練習時間の不足があり、初回のOSCEに10名中9名が不合格となった。中には、清潔操作など基本的な技術ができない学生もいた。3回目の

再 OSCE で合格となるものもいたが、全体的に受け身で自律した練習が不十分であった。産婦の陣痛発来時の入院対応や分娩第 1 期の胎児心拍数低下事例などを設定したシミュレーションと振り返り学習を実施した。臨床助産師に報告する場面などは、学生自身の知識とアセスメント不足に気づく機会となったが、ディスカッションでは発言する者が決まっており、全員に浸透していなかった。実習 2～3 週を経験したところで帰学日を設け、産婦の主体性を尊重するフリースタイル分娩の方法を教授した。実習終了後の 9 月に会陰裂傷縫合の技術に、デモンストレーションを行い、実演により学びを深める機会とした。

地域母子保健学特論

2 年次後期

梅野貴恵、赤星琴美、清水久美恵、鈴木由美

日本の地域母子保健の現状について理解を深め、社会に求められる助産師の役割を明確にするための内容を教授した。母子保健の変遷、大分県の母子保健の現状をふまえた母子保健施策と母子保健の水準、育児を取り巻く社会環境や地域における具体的な母子への支援についてディスカッションを取り入れるなどして実施した。

地域母子保健演習

2 年次後期

梅野貴恵、渡邊しおり、鈴木由美、別府市保健師

助産師として地域における母子保健ニーズに対応し、質の高い母子保健活動を展開する能力を養うための演習科目とした。大分市・別府市の母子保健事業の概要と母子保健の水準等を自己学習したのち、大分市・別府市の担当保健師とディスカッションを行い、母子保健環境の特性を理解した。4 か月児健康診査（大分市は個別健診のため、堀永産婦人科の 3 か月児健康診査）、1 歳 6 か月児健康診査に参加し、母親が抱える子育ての問題を理解し、解決へ向けた保健師の対応や地域における取組、他機関との連携を理解した。特に、4 か月児健康診査では、継続事例または助産学統合実習での受け持ち母子の健診に付き添うことで、家族や地域の人に支えられ成長していく母子に対する助産師としての役割を認識する機会とした。

助産マネジメント演習

2 年次後期

梅野貴恵、安部真紀、生野末子

助産業務の行われる病院・助産所において、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割と

責任を認識し、助産の対象者の健康管理や助産マネジメントを実践する能力を習得するための演習科目とした。周産期母子医療センターへの母体搬送事例をもとに、施設助産師として求められる役割と助産ケアについて 3 事例を用いシミュレーション学習を行い、ディスカッションし学びを深めた。また、災害時の避難場所における母子への支援を想定し、シミュレーション学習を行った。さらに、助産院において院長が行う日常的な助産院管理全般を経験し学びを深め、自己の課題と将来の目標を明確にし、助産師としてのアイデンティティを培うことにつなげた。

助産学統合実習

2 年次前期

梅野貴恵、樋口幸、安部真紀、大矢七瀬

人間尊重の基本理念に基づき、新しい命の誕生に携わらせていただくことへの感謝と責任をもって、妊娠期から産褥・育児期まで継続して母子とその家族を受持ち、個別に応じた助産ケア実践能力を養うことを目的に 8 週間+延長 1 週間の実習を行った。実習施設は、診療所 3 施設と地域周産期医療センターである。分娩介助目標例数は 13 例以上としていたが、平均 9.9 例 (9~11 例) の実施となった。実習 2~3 週目に帰学日をもうけ、分娩期実践演習のフリースタイルや情報共有の場とした。学生個々の学習意欲・態度に差があるうえ、夜間・休日の実習や待機、連日の猛暑などによる疲労もあり、学生間のコミュニケーション不足でチーム内の連携が図れないグループがあった。専任教員が施設に出向き面談を実施したが、学生個々の課題を消化することに精一杯の様子であった。中間カンファレンスでは、学生個々の学びの状況は示すことができたが、課題の明確化には至らず担当教員が指導を行った。後半は、就職試験と重なり数名が実習場を抜けるなど、チーム内のコミュニケーション不足が露呈したグループもあった。目標を高く上げた学生は延長実習の希望があり 1 週間延長したが、延長の希望のない学生もあった。継続事例 3 例を妊娠期から産後 1 か月まで受け持ち、家庭訪問を含む助産実践を行うことで、妊産褥婦個々の問題に寄り添いケアを実践することができた学生もいたが、全員の到達度には差がみられた。

ハイリスク妊産婦ケア実習

2 年次前期

梅野貴恵、安部真紀、大矢七瀬

周産期におこる異常やリスクに対して的確な判断力と高い予見性、緊急事態に対応する能力を養うことを目的に総合周産期母子医療センターで 2 週間の実習を行った。臨床指導者や担当教員の指導を受け、受持ち対象者のリスク状況を判断し、母児の安全に配慮し助産過程を展開することができた。一方、受持ち以外の対象者や家族への配慮などハイリスクな対象者が療養する総合周産期母子医療センターの現状を目の当たりにし、現実の厳しさを実感し、助産師としての役割やチーム医療、他職種との連携の重要性について学びを深める機会となった。

NP 実習

1 年次前期

甲斐博美、小野美喜、森加苗愛、中釜英里佳、堀裕子、大嶋佐智子

NP の診療活動に同行し、診察の実際を体験することで NP の役割を理解し、必要な高度看護実践能力と自己の課題を明確にすることをねらいとして、7 名が履修した。病院や老人保健施設など様々な分野で活動する NP に同行し、包括的健康アセスメントと看護的治療マネジメントの実際を理解し、施設内における安全管理体制やチーム医療における NP の役割を学んだ。終了後に、修了生からの講義を受け、NP の役割と NP を目指すために必要な学びと姿勢についてグループワークをしたことが、自己の振り返りと今後の学習における課題の明確化につながった。

老年 NP 特論

1 年次後期

甲斐博美、小野美喜、森加苗愛、庄山由美、高根利依子

EBN に基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、NP としての看護を実践する理論、方法を探究することを目的として講義を行った。NP の看護の対象者は、健康増進や疾病予防を必要とする高齢者や、慢性疾患をもち生活している高齢者であり、各健康レベルにおける看護を専門とする大学教員や臨床で活動する診療看護師などがオムニバス方式で教授した。今年度は、在宅における多職種連携と老年期の対象者の看護実践事例をケースレポートにまとめ、それぞれのテーマ別に事例検討を実施しプレゼンテーションを行った。1 事例ごとの意見交換によってチームマネジメントや看護アセスメントを深め、経験分野の異なる背景を持つ各自の課題や、NP としての看護実践の展開における課題が明らかになり、今後の学び方に影響する到達度であった。次年度も、同様の指導方法を継続し、事例と統合して思考の整理ができ、主体的な学習につながる支援を強化していく。

老年疾病特論

1 年次後期

濱中良志、糸永一郎、工藤欣邦、一万田正彦、財前博文、竹下 泰、甲原芳範、小寺隆元、塩月成則、木村成志

NP としてプライマリーケアを提供するために、老年期によくみられる慢性期の疾病および継続医療における臨床評価について学び、その診断・処方（薬・検査）・治療について知識を教授した。

老年臨床薬理学特論

1 年次後期

吉田成一、伊東弘樹、佐藤雄己

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。

一度提示した処方や注意点については理解できるが、現象を一般化して、多様な条件で判断することに到達しておらず、臨床薬理学という視点での学習内容の習得状況は不十分である受講者が散見された。このため、履修者全員が単位取得するに至らなかった。次年度は、より本質的な理解ができる講義、学習内容としていくことが求められる。

老年診察診断学特論

1 年次後期

濱中良志、岩波栄逸、山口豊、工藤欣邦、糸永一朗、阿部航、安藤優

プライマリーケアから臨床医学の各専門領域にわたって専門医師による講義、演習を行った。

老年アセスメント学演習

2 年次前期

甲斐博美、立川洋一、久保徳彦、宮川ミカ、小野美喜、森加苗愛、濱中良志

老年期の対象者への包括的健康アセスメント及び看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開し、6名が履修した。実習につながるように、臨床推論を記述していく記録様式のオリエンテーションを実施し、慢性疾患や症状を伴う高齢者（成人を含む）の事例を通して、情報を整理しアセスメントを行い、必要な検査の選択と結果の解釈、診断、ケアプランの作成を行った。事例のプレゼンテーションを通じ、基礎知識や求められる能力の確認を行い、学生間での意見交換や医師やNPからの助言で、アセスメント能力の強化やマネジメントに必要な能力の促進ができた。履修者が演習内容で補強が必要な項目に関する項目を自律的に組み込み、同時期に履修する老年薬理学演習とともにアセスメント能力を強化できる科目となった。

老年薬理学演習

2 年次前期

甲斐博美、塩月成則、小寺高元、小野剛志

老年領域における NP の役割を理解し、必要とされる薬理学に関する高度看護実践能力を獲得するために、事例によるシミュレーションを通じて学んだ。症例を通じて、病態の理解や検査や処方判断、治療マネジメントも含めた薬理学の習得をディスカッションによる演習で強化した。特定行為に係る内容も多く含まれ、同時に履修する老年アセスメント学演習との相乗効果で学生の到達度をあげている。

老年 NP 実習 I

2 年次前期

甲斐博美、小野美喜、森加苗愛、大嶋佐智子、濱中良志

プライマリ診療を行う場で実践力を身につけることを目的に NP 実習を展開した。今年度は病院施設 10 週間（老年 NP 実習 I）、診療所 4 週間（老年 NP 実習 II）、老健施設 2 週間（老年 NP 実習 III）の 14 週間で構成した。老年 NP 実習 I は病院実習で基本的な診療を学んだ。1 施設 1～2 名の学生配置で 6 名の学生が履修し、5 名が単位取得した。医師、NP、大学教員ともほぼマンツーマンでの指導体制とした。さらに実習前後に施設長、主指導医、看護部長、修了生（NP）、大学側との合同会議を設け、実習目標と方法の共通理解、評価を共有し大学と各施設との連携を図った。臨床実習では特定行為のみならず、判断やアセスメント、臨床推論の能力強化の指導を強化した。NP に必要な 7 つの能力を客観的に評価できる様式を活用し、適宜、自己の課題を意識できる機会を持つように活用した。医療スタッフとの連携・協働の実践を強化し、看護実践能力の更なる強化と NP に必要な 7 つの能力を伸ばしていくことが引き続きの課題である。

老年 NP 実習 II

2 年次後期

甲斐博美、小野美喜、森加苗愛、大嶋佐智子、濱中良志

外来にて軽微な症状の初期診療、慢性疾患の診療について学び、指導医の訪問診療・往診に同行し、在宅で継続診療について学ぶことをねらいとし、4 週間の診療所実習を 5 名が履修した。指導の下で医療面接や身体診察などを実施し、在宅での継続療養中の患者に対する包括的アセスメントを学んだ。2 週間から 4 週間に実習期間を延ばしたことで在宅療養患者の理解が強化できた。

老年 NP 実習Ⅲ

2 年次後期

甲斐博美、小野美喜、森加苗愛、大嶋佐智子、濱中良志

入所している高齢者およびデイケアに参加する在宅高齢者の包括的アセスメント、看護的治療マネジメント（特定行為を含む）を実施することと、急変を含めた健康状態の変化を早期発見し、医療的処置の必要性判断と実施をすることをねらいとした。2 週間の老人保健施設での実習において、担当となる対象者やご家族に対しての看護的治療マネジメント、医療面接や身体診察を通じて包括的アセスメント能力を強化した。学生のこれまでの教育・就業背景の違いを考慮して、在宅分野の看護実践能力を強化していくことが引き続きの課題である。

老年 NP 探求セミナー

2 年次後期

小野美喜、森加苗愛、甲斐博美、濱中良志

老年 NP コース 5 名が履修した。老年 NP 実習で担当した症例を振り返り、NP としての包括的アセスメントや看護治療的マネジメントを再検討することを目的に個人のワークとグループディスカッションを組み入れて実施した。実習施設の指導医による診療のテーマカンファレンスが学習効果を高め、老年 NP として対象者やチームの中で果たす役割を全体討議し、実習経験を深めることができた。

NP 論

1 年次前期

小野美喜、村嶋幸代、藤内美保、廣瀬福美、光根美保、田村委子、高野政子、草間朋子

NP コースの必須科目として NP の役割、現状について考えるとともに、チーム医療の中で活動するための医療安全や手順書作成についてワークを実施した。最終講義は日本で NP を立ち上げた日本 NP 教育大学院協議会会長（前学長）を招聘した。NP 制度化の動向について最新の情報を共有できた。今後も NP の基本的な考え方を伝え考える科目として組み立てていく。

フィジカルアセスメント学特論

1 年次前期

藤内美保、石田佳代子、濱中良志

クライアントの包括的・全身的な身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教

授した。五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を身につけるため、講義および演習形式で行った。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。演習では異常な状態の把握ができるようにフィジカルアセスメントモデル、高機能シミュレーター、眼や耳のシミュレーターを使用した。確実な知識・技術が身につくように、試験は中間試験と総合試験を実施し、それぞれ筆記試験および OSCE を行った。

放射線健康科学特論 I

1 年次後期

甲斐倫明、小嶋光明

「放射線健康科学」および「現代人のための放射線生物学」の教科書を用いて、放射線物理、放射線の線量、放射線生物（分子、DNA、細胞レベルから組織応答まで）、放射線の健康影響・リスクまでの基礎をマンツーマンでの解説と質問形式で教授した。

放射線リスク学特論

1 年次後期

甲斐倫明、小嶋光明

最新の放射線リスクや放射線療法に伴う皮膚放射線障害に関する原著論文の抄読を課して論文の解説をプレゼンさせるスタイルで進めた。取り上げた内容は、原爆被ばくによる遺伝性影響、造血幹細胞と発がん、放射線白内障、小児 CT 検査と染色異常、マンモグラフィ、甲状腺検査モニタリング、IMRT 放射線療法と急性放射線皮膚炎、原爆被ばく生存者の末梢血単球の影響、さらに、放射線療法に伴う皮膚放射線障害の論文レビューをレポートとしてまとめた。

3-7-2 博士（後期）課程

生命病態学特論

1 年次前期

濱中良志、岩崎香子

重要疾患を論理的に説明できるように指導し、発表・レポート提出を通して、その疾患の病態生理学を教授した。

看護基礎科学演習

1～3 年次

甲斐倫明、市瀬孝道、安部眞佐子、稲垣敦、佐伯圭一郎、影山隆之、吉村匠平

各教員から課題提示および講義指導が行われた。学生の研究領域に配慮した課題が提示され、学生は調査分析を行い、各教員に対してプレゼンあるいはレポートによって報告し指導を受けた。

発達看護学特論

1 年次後期

高野政子、小野美喜

人間発達の段階に応じた発達課題について、基礎的な知識及び最新の研究動向について教授した。その後で、文献検討し、その概要とポイントについてレポートを作成させた。

看護専門科学演習

2 年次後期

高野政子、小野美喜、藤内美保、林猪都子、影山隆之、福田広美、赤星琴美

受講生が希望する領域と博士課程での課題について相談し、発達段階のうち老年看護学の看護教育の動向について文献検討し、その概要と教育上の課題についてレポートを作成し、プレゼンテーションさせた。

放射線リスク学特論

1 年次後期

甲斐倫明、小嶋光明

最新の放射線リスクや放射線療法に伴う皮膚放射線障害に関する原著論文の抄読を課して論文の解説をプレゼンさせるスタイルで進めた。取り上げた内容は、原爆被ばくによる遺伝性影響、造血幹細胞と発がん、放射線白内障、小児 CT 検査と染色異常、マンモグラフィ、甲状腺検査モニタリング、IMRT 放射線療法と急性放射線皮膚炎、原爆被ばく生存者の末梢血単球の影響。さらに、放射線療法に伴う皮膚放射線障害の論文レビューをレポートとしてまとめた。

放射線健康科学特論 II

1 年次

甲斐倫明、小嶋光明

最新の医療被ばくおよび健康影響リスクに関する原著論文を与え、論文の抄読を行った。抄読会形式で行い、抄読の最後に論文の解説を行った。抄読会で取り上げた論文は次の通りである。

1) Noda,S Biochem Biophys Res Commun (2009), 2) Nakamura,N. Radiat Res. (2018), 3) Hamada,N. Cancer Letters (2015), 4) Stephan, G., Int J Radiat Biol (2007), 5) Colin, C., Eur Radiol (2014), 6) Togawa K., Lancet Oncology (2018), 7) Pignol, JP., J Clin Oncol (2008), 8) Yoshida K. Br J Haematol. (2019)

放射線健康科学特別演習

1 年次

甲斐倫明、小嶋光明

研究領域ごとに課題を与え、レポートを提出させる方式で行った。課題 A は、「1990 年代の小児 CT 線量の推定」として、現在のマルチ CT と異なる装置における撮影条件から線量を推定させた。課題 B は、「マンモグラフィ画像の AI による乳腺密度推定の現状調査」として、画像解析技術の現状を調査することで研究の基礎に役だてた。

メンタルヘルス学特別演習

2 年次

影山隆之

メンタルヘルスに関する調査研究を例として、データの収集と分析の手法について、実際の原著

論文を素材に解説とディスカッションを行った。素材は受講者のニーズに応じて選択し、職域メンタルヘルス、がん看護等の文献を取り上げた。

4 学内セミナー

4-1 CALL 英語学習システム講座

Gerald T Shirley、高野友愛

本年度も例年通り前期と後期の2回実施した。前期では学部1年次生が必須科目として受講しているが、前期後期ともに全学部生や院生、教職員等にも呼びかけ受講してもらい、学内全体の英語力向上に努めた。

また、CALLシステムについて、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月のオープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

5 研究・開発、事業助成、業績

5-1 研究・開発

赤星琴美

保健師による 5 歳児健康診断実施の条件—ヘルスアセスメントの活用—. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (分担)

公衆衛生のリーダー養成に資する修士課程保健師教育の強化: 公衆衛生学との連携の可能性. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 挑戦的萌芽研究. (分担)

石田佳代子

災害時における黒タグ者に対する活動モデルの実用化に向けた教育プログラムの開発. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (代表)

市瀬孝道、吉田成一

大陸から越境輸送される有害な空中微生物の検出と実験研究による呼吸器系への影響評価. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (B). (代表)

市瀬孝道

東アジア沙漠地帯における黄砂バイオエアロゾルの発生過程とその越境輸送ルートの解明. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (A). (分担)

伊東朋子

高校までの連続性と現場への連動性をパッケージ化した看護情報倫理教育モデルの開発. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (分担)

看護基礎教育における放射線教育パッケージの製作および教育支援システムの開発. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (分担)

稲垣敦

出前健康・体力チェック! 地方創生大学等連携プロジェクト支援事業 事業 A「学生による地域ブラッシュアップ」プログラム 2018. (代表)

岩崎香子

CKD 病初期の骨脆弱性誘発要因の探索. 日本腎臓財団公募助成 腎不全病態研究. (代表)

梅野貴恵

母乳育児経験のある更年期女性の糖・脂質代謝に対するエクオールサプリメントの効果. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (代表)

恵谷玲央

マウス造血幹細胞の遺伝子変異の継時変化, 放射性物質環境動態・環境および生物への影響に関する学際共同研究. 若手共同研究 (E). (代表)

小嶋光明

放射線誘発バイスタンダー効果による DNA 二重鎖切断の修復過程. 高エネルギー加速器実験機構共同利用支援. (分担)

放射線照射したマウスの骨髄・脾臓内造血幹細胞の細胞動態の解析～放射線誘発マウス急性骨髄性白血病のメカニズムを考える～. 放射線災害・医科学研究拠点共同研究. (代表)

小野美喜

看護師の裁量範囲の拡大により生じる倫理的問題と倫理教育のあり方に関する研究. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (代表)

地域医療に貢献する看護の魅力. 地方創生大学等連携プロジェクト支援事業 事業B「おおいたプロモーション」プログラム 2018. (代表)

甲斐倫明

瀕回小児 CT 診断の検査理由と放射線被ばくの継時的分析による脳腫瘍罹患との関係. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (代表)

WAZA-ARI (CT 検査に伴う被ばく線量を計算するシステム) に関する研究. 国立研究開発法人放射線医学総合研究所. (共同研究)

瀕回小児 CT 診断の検査理由と放射線被ばくの継時的分析による脳腫瘍罹患との関係. 国立成育医療センター. (共同研究)

影山隆之

病院看護師における夜勤時の眠気と先行睡眠・勤務時間・身体活動との関連. 日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (C). (代表)

川崎涼子

結核等の健康課題をもつ刑事施設被収容者等の包括的継続健康生活支援. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (代表)

薬物事犯による刑事施設入所中の累犯受刑者の保健医療ニーズと社会生活定着要件. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 萌芽研究. (分担)

草野淳子、高野政子、足立綾

在宅療養児を支える訪問看護師に対する小児特定看護師の介入教育プログラムの検討. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (代表)

桑野紀子

看護学生の文化的感受性—日本と韓国を比較して— (Comparative study on intercultural sensitivity of Japanese and Korean nursing students) . 蔚山大学医学部看護学科. (代表)

後藤成人

隔離、身体拘束中の精神疾患患者を早期解除するためのアセスメントツールの作成. 衛藤病院. (代表)

精神疾患患者の家族支援. 衛藤病院. (代表)

佐伯圭一郎

看護教育におけるインシビリティー (incivility) 尺度の開発. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (分担)

量的な看護研究における統計手法利用の現状分析と報告のためのガイドラインの提案. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (代表)

定金香里

除菌成分塩化ベンザルコニウムの低濃度吸入曝露がアレルギーに及ぼす影響. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (代表)

佐藤愛

地域在住高齢者のオーラルフレイルの実態調査と口腔・嚥下・咳嗽機能向上の介入の試み. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 若手研究. (代表)

品川佳満

高校までの連続性と現場への連動性をパッケージ化した看護情報倫理教育モデルの開発. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (代表)

保育者養成をベースとした妊娠から始まる子ども子育て支援者養成カリキュラムの開発. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (分担)

秦さと子

加齢による嚥下機能低下予防のための運動方法の検討. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (代表)

血液透析患者におけるシャント血流音の周波数特性と狭窄率の判別. 大分大学工学部共創理工学科知能情報システムコース. (共同研究)

高野政子

小児固形がん患者に対して包括的な認知機能評価と支援を行い、QOL 向上を目指す研究. 大分大学医学部小児科. (分担)

田中佳子

血液透析患者のシャント血流音と狭窄度の関連. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 若手研究. (代表)

血液透析患者におけるシャント血流音の周波数特性と狭窄率の判別. 大分大学理工学部共創理工学科知能情報システムコース. (分担)

藤内美保

高度実践看護師の臨床推論に基づくフィジカルアセスメント継続教育支援プログラム開発. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究(C). (代表)

濱中良志

骨形成を制御する新規分泌調節機構の解明. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究(C). (代表)

次亜塩素水の安全性. (株)鳥繁産業. (受託研究, 分担)

林猪都子

産後骨盤底症状に関する調査研究. 社会医療法人恵愛会大分中村病院産婦人科. (分担)

稗田朋子

看護職員の資質向上を図るための研修: 中小規模病院等看護管理支援事業. 平成 30 年度地域医療介護総合確保基金(医療分)活用事業.

樋口幸, 吉田成一

微酸性電解水の安全性試験. (株)鳥繁産業株式会社受託研究費. (受託研究)

樋口幸

母体環境と新生児の胎脂脂質組成との関連とその過酸化脂質が皮膚に与える影響. 日本学術振興会科学研究費助成補助金 若手研究 (B). (代表)

微酸性電解水の継続噴霧がヒト皮膚に及ぼす影響. (株)鳥繁産業株式会社受託研究費. (代表)

微酸性電解水を用いたディスプレイの開発. (株)鳥繁産業株式会社受託研究費. (代表)

平成 30 年度医療関連機器開発ワーキンググループ活動支援事業. 大分県研究費. (共同研究)

分娩監視装置モニターの開発. 大分県立病院, 日本文理大学, (株)シェルエレクトロニクス. (共同研究)

皮膚測定器の開発. 日本文理大学, (株)シェルエレクトロニクス, 大分県産業科学技術センター. (共同研究)

福田広美

ピアサポートによる中小規模事業所の看護管理者能力開発と地域ネットワーク推進の研究. 日

本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (B). (代表)

大分県中小規模病院等看護管理者支援事業. 大分県地域医療介護総合確保基金. (共同研究)

堀裕子

原子力発電所 UPZ 内の教職員における放射線リスク認知調査. 長崎大学原爆後障害医療研究所
研究費申請獲得金. (代表)

森加苗愛

糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティの看護ケアの質評価基準の検証. 日本学術振興会
科学研究費助成補助金 若手研究. (代表)

山田貴子

熟練訪問看護師の臨床判断モデルの開発－新卒訪問看護師教育の開発に向けて－. 日本学術振
興会科学研究費助成補助金 若手研究. (代表)

高度実践看護師の臨床推論に基づくフィジカルアセスメント継続教育支援プログラム開発. 日
本学術振興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (C). (分担)

吉田成一

PM2.5 構成成分の複合胎仔期曝露による出生仔雄性生殖系・免疫系に及ぼす影響. 日本学術振
興会科学研究費助成補助金 基盤研究 (B). (代表)

5-2 業績

5-2-1 著書

岩崎香子：第2章 CKD-MBD の病態機序 6 尿毒症と骨，深川雅史（監修），濱野 高行／藤井 秀毅／風間順一郎（編集），CKD-MBD 3rd Edition, pp90-93, 日本メディカルセンター，東京. 2018.

岩崎香子，深川雅史：第5章 続発性骨粗鬆症 I 生活習慣病 C)慢性腎臓病 総論：腎性骨症から CKD-MBD へ，稲葉雅彰（編集），骨粗鬆症診療, pp105-108, 医薬ジャーナル社，大阪. 2018.

岩崎香子：特集. 透析患者の骨・カルシウム代謝. 透析患者の骨細胞機能異常，風間順一郎（企画），Clinical Calcium, 2018, 28(8), pp53-58, 医薬ジャーナル社，大阪, 2018.

Kuwano N: Sources of psychological stress for a Japanese Immigrant wife. In Douglas M, Pacquiao D, Purnell L (Eds), Global applications of culturally competent health care: guidelines for practice. pp369-373, Springer, New York, 2018.

関根剛：4章8節 臨床心理士会における被害者支援, 4.8.1-6; 8章2節 研修プログラムの構成, 8.2.1-4. 被害者支援テキスト～支援に関わる人たちのために～【知識編】，公益社団法人全国被害者支援ネットワーク, 2018.

関根剛：8章1節 研修目標と講義の展開, 8.1.1-7 ; 8章5節 プレゼンテーション技術, 8.5.1-4. 被害者支援テキスト～支援に関わる人たちのために～【実践編】．公益社団法人全国被害者支援ネットワーク, 2018.

平野互：患者の権利オンブズマン－拓かれた一筋の道. 池永弁護士追悼集編集委員会編，未来を拓く人 弁護士池永満の遺したもの, pp115-126, 木星社，福岡, 2018.

村嶋幸代，鈴木るり子，岡本玲子. 大槌町 保健師による全戸家庭訪問と被災地復興～東日本大震災後の健康調査から見えてきたこと～. 明石書店，2018

5-2-2 報告書

小野美喜，村嶋幸代，藤内美保，高野政子，福田広美，濱中良志，佐伯圭一郎，森加苗愛，宮内信治，石田佳代子，草野淳子，甲斐博美，大嶋佐智子．平成 29 年度大分県補助事業看護師の特定行為研修支援事業報告書．

福田広美：平成 29 年度厚生労働省看護職員確保対策特別事業大分県版中小規模病院等看護管理者支援事業報告書．

5-2-3 研究論文

赤星琴美, 若竹理沙, 山口忍: 市町村保健師による「特定健診・特定保健指導」検査項目の実施・追加判断の可能性, 看護科学研究, 16 (3), 79-89, 2018.

牧輝弥, 市瀬孝道: 東アジアを越境輸送されるバイオエアロゾル: 韓国龍仁と日本米子における大気浮遊細菌群の比較(Long-range transport of bioaerosols over East Asia: Airborne bacterial communities of continental and island regions). クリーンテクノロジー, 29, 8-12, 2019.

He C, Song Y, Ichinose T, He M, Morita K, Wang D, Kanazawa T, Yoshida Y: Lipopolysaccharide levels adherent to PM2.5 play an important role in particulate matter induced-immunosuppressive effects in mouse splenocytes. J Appl Toxicol 38, 471-479, 2018.

He M, Ichinose T, Yoshida S, Nishikawa M, Sun G, Shibamoto T: The role of iron and oxidative stress in exacerbation of allergic inflammation in murine lungs caused by urban PM2.5 and desert-dust, J Appl Toxicol, 39, 855-867, 2019.

Iwasaki Y, Yamato H, Fukagawa M. TGF-Beta Signaling in Bone with Chronic Kidney Disease. Int J Mol Sci. 2018 Aug 10; 19(8). pii: E2352.

恵谷玲央, 甲斐倫明: 放射性セシウム ^{137}Cs の内部被ばくによる非がん影響—動物実験から得られた知見—, 放射線生物研究, 53, 55-72, 2018.

Ishikawa T, Matsumoto M, Sato T, Yamaguchi I, Kai M: Internal doses from radionuclides and their health effects following the Fukushima accident. J Radiol Prot, 38, 1253-1268, 2018.

安藤敬子, 影山隆之, 小林敏生: 男性交替勤務労働者の深夜勤における眠気と関連する要因—生活習慣および職場ストレス要因との関連. 産業精神保健 27(1), 36-46, 2019.

Iwasaki R, Hirai K, Kageyama T, Satoh T, Fukuda H, Kai H, Makino K, Magilvy K, Murashima S: Supporting elder persons in rural Japanese communities through preventive home visits by nursing students: A qualitative descriptive analysis of students' reports. Public Health Nursing 2019 Mar 7. <https://doi.org/10.1111/phn.12596>.

影山隆之, 竹内一夫, 宮崎博子: コーピング特性簡易尺度思春期版 (BSCP-A) の開発. 学校メンタルヘルス 21(1), 57-64, 2018.

Kawasaki R, Nakao R, Ohnishi M: Contribution of social relationships to self-rated health among Japanese community-dwelling elderly. *J Rural Medicine*, 13(1), 18-25, 2018.

中尾理恵子, 杉山和一, 川崎涼子, 大西真由美, 本田純久: 斜面市街地に暮らす高齢者の主観的健康感に関連する要因. *日本健康学会誌*, 84(4), 130-140, 2018.

草野淳子, 小野美喜, 福田広美, 甲斐博美, 森加苗愛, 宮内信治, 高野政子, 濱中良志, 藤内美保, 村嶋幸代: プライマリケア領域の NP 教育に求められるもの—修了生の意見分析から—. *日本 NP 学会誌*, 2(1), 17-25, 2018.

草野淳子, 高野政子: 在宅療養児への訪問看護師の介入に対する母親の意識と満足の実態. *日本小児看護学会誌*, 27, 91-96, 2018.

後藤成人, 波多野ひかり, 河向勝貴, 三浦千恵, 足立大作, 岡崎敬一郎, 若林美紀, 伊東宏紀, 山崎悦子, 衛藤龍: 隔離早期解除に向けた精神科看護師によるアセスメントの現状—精神科看護師が隔離中の患者を観察している項目とその関連要因について—. *日本精神科看護学術集会誌*, 61(1), 490-491, 2018.

佐藤栄治: 座面高と座面角が立ち上がり動作の筋活動に与える影響. *看護理工学会誌*, 6(1), 2-11, 2019.

品川佳満, 橋本勇人, 伊東朋子: 看護職者が起こしやすい個人情報漏えい事故の原因に関する分析—2017 年の改正個人情報保護法施行までに起きた事故事例をもとに—. *日本看護研究学会雑誌*, 41(5), 1005-1012, 2018.

秦さと子, 高橋香澄, 首藤信通, 小原亜希子, 石丸智子, 麻生優恵, 卷野雄介, 伊東朋子: ケール搾汁粉末溶解液の嚥下機能への影響. *日本健康学会誌*, 84, 151-157, 2018.

杉本圭以子, 藤原朋子, 山本隆生: 精神科デイケアにおける IMR による生活満足度およびリカバリー志向への効果—前後比較対照研究. *精神障害とリハビリテーション*, 22(2), 141-147, 2018.

Higashi D, Tanaka K, Shin S, Nishijima K, Furuya K: Classification of arteriovenous fistula stenosis using shunt murmurs analysis and support vector machine. *Advances Intelligent Systems Computing* 772, 884-892, 2018.

中釜英里佳, 小野美喜: ブログによる闘病記を研究対象にする際の倫理的配慮. *日本看護倫理学会誌*, 10 (1) ,67-72, 2018.

Yano H, Hamanaka R, Nakamura-Ota M, Zhang JJ, Matsuo N, Yoshioka H. Regulation of type I collagen expression by microRNA-29 following ionizing radiation. *Radiat Environ Biophys.* 57, 41-54, 2018.

平野 互 : 医療における苦情解決に関する考察－「患者の権利オンブズマン」の 18 年から. 医学哲学 医学倫理, 36, 63-70, 2018.

淵野万希子, 福田広美, 佐々木真理子, 佐藤弥生, 稲生野麦 : 地域在住高齢者を対象にした機能強化型訪問看護ステーションの看護職による在宅療養啓発活動プログラムの検証, 看護科学研究, 16(1), 13-25, 2018.

Hori H, Orita M, Taira Y, Kudo T, Takamura N: Risk perceptions regarding radiation exposure among Japanese schoolteachers living around the Sendai Nuclear Power Plant after the Fukushima accident. *PLoS ONE* 14(3): e0212917.
<https://doi.org/10.1371/journal.pone.0212917>.

宮内信治 : 『分別と多感』retold 版、完全版、映画版における音調変動の解釈と検討. 日本英語音声学会. 英語音声学, 22, 103-113, 2018.

宮内信治, Gerald T Shirley, 福田広美 : Nurse Practitioner Founding a New Profession – Problems and Solutions: A Conversation with Dr. Loretta C. Ford Dr. Loretta C. Ford からのメッセージ 新しい専門職としてのナースプラクティショナーの創設～課題と解決策～. 日本 NP 学会誌 1(2), 36-41, 2018.

Eto M, Miyauchi S: Relationship between occlusal force and falls among community-dwelling elderly in Japan: a cross-sectional correlative study. *BMC Geriatrics*, 18, 111, 2018, <https://doi.org/10.1186/s12877-018-0805-4>.

Akiyama N, Shiroiwa T, Fukuda T, Murashima S, Hayashida K: Healthcare costs for the elderly in japan: Analysis of medical care and long-term care claim records., *PLOS ONE*, 13(5):e0190392, 2018.

村嶋幸代, 石川貴美子, 大木幸子, 川村尚美, 高橋郁美, 田中由香, 福原円, 三上房枝, 山本光昭, 吉岡京子. 平成 30 年度 厚生労働省先駆的保健活動交流推進事業 自治体保健師のキャリア形成支援事業 市町村保健師の人材育成体制構築の支援に関する報告書. 公益社団法人 日本看護協会, 41-43, 2019.

Hayashi I, Kanda S, Lamaningao P, Mishima N, Nishiyama T : Shared expression of mucin12 in *Ascaris lumbricoides* and the human small intestine, *Molecular and Biochemical Parasitology*, 227, 19-24, 2019

Higuchi S, Yoshida S, Minematsu T, Ichinose T: Detection of inflammatory cytokines by skin blotting as an objective measure of neonatal skin problems. *J Nursing Science Engineering*, 6(1), 33-40, 2019.

Hyodo M, Watanabe H, Seo T: On simultaneous confidence interval estimation for the difference of paired mean vectors in high-dimensional settings, *J Multivariate Analysis*, 168, 160-173, 2018.

5-2-4 その他の論文

伊東朋子, 岡田愛美, 品川佳満 : 事例から考える患者の個人情報 : 取り扱いのポイントと注意点. 看護技術, 64(11), 63-69, 2018.

小野美喜 : 多職種協働時代における「看護倫理」の再考 (巻頭言) . 日本看護倫理学会誌, 11(1), 1-2, 2019.

庄山由美, 甲斐博美, 米城和美 : 連載第 5 回診療看護師活用による業務の効率化・経営改善 インフルエンサーとしての診療看護師～自律的な看護と質向上を目指して, 看護部長通信, 16(4), 107-116, 2018.

Yoshitake T, Ono K, Miyazaki O, Kai M: Analysis of examination reasons for multiple scans in paediatric CT in Japan. 5th Asian & Oceanic Regional Congress on Radiation Protection. Conference Handbook, 82, 2018.

岩井敏, 佐々木道也, 桧垣正吾, 山西弘城, 甲斐倫明 (JAEA 洗プルトニウム汚染事故ワーキンググループ) : プルトニウム摂取事故に関する日本保健物理学会ワーキンググループ活動報告. 保健物理, 53(4):271-281, 2018.

影山隆之 : 大分県立看護科学大学における地域貢献と大学職員の役割, 大学職員論叢, 7, 17-21, 2019.

影山隆之, 緒方文子, 篠原彩, 村嶋幸代 : 看護学生による高齢者への予防的家庭訪問実習. 保健師ジャーナル, 75, 238-244, 2019.

影山隆之 : 学会誌「自殺予防と危機介入」の展開. 自殺予防と危機介入, 38(1), 17-20, 2018.

品川佳満, 橋本勇人 : 知っておきたい医療機関, 看護師の個人情報取り扱い事故の特徴. 看護技術, 64(11), 1082-1086, 2018.

杉本圭以子, 山口奏恵 : 地域で生活する精神障害者に対する災害時の支援. こころの健康, 33(1), 16-22, 2018.

堀裕子, 折田真紀子, 平良文亨, 高村昇 : 原子力発電所 UPZ 内の小中学校教員における放射線リスク認知等の実態調査. 長崎医学会雑誌 93 巻特集号別冊, 127-129, 2018.

村嶋幸代 . 地域の未来を支える地域看護学の構築に向けて. 日本地域看護学会第 20 回学術集会

報告：学術集会長講演．日本地域看護学会誌，21(1)：76-84，2018年4月

村嶋幸代，「看護とモノづくり—大分県立看護科学大学における産学連携推進の取り組み—」，学術の動向 2018年6月号，80-84，2018.

村嶋幸代，中板育美，藤原啓子，國井隆弘，山崎直子．新春座談会 地域をプロデュースする保健師の力．週刊 保健衛生ニュース，第1941号，2-31，2018.

村嶋幸代．平成30年度地域医療介護総合確保基金（医療分）活用事業 大分県中小規模病院等看護管理者支援事業報告書．大分県中小規模病院等看護管理者支援協議会．2-3，2019.3.

村嶋幸代．私の紙面批評 NPの活躍 取り上げて，大分合同新聞，8月5日号，9，2018.

村嶋幸代．健康経営企画 大分合同新聞，9月30日号，12，2018.

村嶋幸代．私の紙面批評 実名公表の在り方とは，大分合同新聞，10月14日号，9，2018.

村嶋幸代．私の紙面批評 「健康経営事業所」認定詳しく，大分合同新聞，12月23日号，9，2018.

5-2-5 学術講演等

市瀬孝道，吉田成一，定金香里，吉田安宏，嵐谷奎一，伊藤智彦，鳥羽陽，He Miao：黄砂とPM2.5の呼吸器系への影響－肺の炎症誘導とアレルギー炎症増悪作用．第59回大気環境学会年会シンポジウム「越境粒子状物質の健康影響」，福岡市，2018.9.

岩崎香子：シンポジウム9慢性腎臓病関連骨粗鬆症の最近の話題．慢性腎臓病における骨代謝異常-骨細胞機能異常に関連した病態形成-．第20回日本骨粗鬆症学会，長崎市，2018.10.

梅野貴恵：シンポジウム助産診断の現状と課題．助産師基礎教育における助産診断の教育の展開．第1回日本助産診断実践学会，東京，2018.9.

小嶋光明：ランチョンセミナー 診療放射線技師に必要な放射線生物の基礎＝放射線被ばくによるがん発生を遺伝子の視点から考える～．第13回九州放射線医療技術学術大会，那覇市，2018.11.

小嶋光明：カロリー制限による放射線誘発マウス急性骨髄性白血病抑制メカニズムの検討．放射線生物影響動向調査委員会主催関西原子力懇談会，大阪市，2018.12.

小嶋光明，井佑美，田代祐子，恵谷玲央，有吉健太郎，甲斐倫明：ワークショップ（カロリー制限が放射線発がんに与える影響）．カロリー制限による放射線誘発マウス急性骨髄性白血病抑制メカニズムの検討～Sfp1 遺伝子変異に着目して～．第61回日本放射線影響学会，長崎市，2018.11.

甲斐博美：プライマリ・ケア領域で活躍する診療看護師 診療看護師（NP）とは．大学院修士課程における診療看護師（NP）教育．第9回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会，津市，2018.6.

Kai M: Disability-adjusted life years (DALY) as an indicator of excess cancer risk following radiation exposure. CRPPH/OECD/NEA workshop, Paris, 2018.4.

Kai M: Radiological protection in the event of a large nuclear accident. 9th International Conference on High Level Environmental Radiation Areas, Hirosaki, 2018.9.

影山隆之：風車騒音等の影響評価と睡眠や精神健康の評価における自覚／他覚データの役割．2018年日本音響学会秋季研究発表会，大分市，2018.9.

影山隆之：コーピング特性，首尾一貫感覚，自殺予防．南山大学社会倫理研究プラットフォーム

ム, 名古屋市, 2018.9.

影山隆之 : 女性の労働時間と睡眠・家事・育児. 第 26 回日本産業ストレス学会シンポジウム「働く女性の働き方改革」, 東京, 2018.11.

宮内信治 : 教育の現場に英語音声学をどのように活かすか : 実践報告と課題. 2018 年度日本英語音声学会第 23 回最終全国大会, 北見市, 2018.9.

村嶋幸代 . 「NP の発展と薬理学の必要性」, 看護薬理学カンファレンス 2018 in福岡, 福岡県, 2018.11.

村嶋幸代 . 「拡大する診療看護師 (NP) の活躍を支える基盤づくりと方策」, 第 3 回九州診療看護師 (NP) 研究会 学術集会, 大分市, 2019.2.

森加苗愛 : 高齢者糖尿病と看護—在宅医療・介護連携と高齢者糖尿病看護における看護職者の役割—. 第 23 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 水戸市, 2018.9.

5-2-6 学会発表

山辺大輔，赤星琴美，川崎涼子，緒方文子，村嶋幸代：自分たちの健康を自分たちでつくるための地域づくり．日本地域看護学会第 21 回学術集会，岐阜市，2018.8.

高木優衣，赤星琴美：3 歳児をもつ母親の育児におけるモバイル端末利用状況とその関連要因の検討．日本地域看護学会第 21 回学術集会，岐阜市，2018.8.

松尾有梨沙，赤星琴美，川崎涼子，緒方文子，村嶋幸代：保健所が行う青壮年期の歯科口腔保健の支援の在り方の検討．日本地域看護学会第 21 回学術集会，岐阜市，2018.8.

高司未由希，赤星琴美，梅野貴恵：助産師による母親への出産・子育て支援のあり方—出産から産後 1 か月までの語りから—．第 59 回日本母性衛生学会総会，新潟市，2018.10.

秋本慶子，吉村匠平：ペア学習参加尺度の開発 (1)．第 25 回大学教育研究フォーラム，京都市，2019.3.

足立綾，高野政子，草野淳子：慢性疾患がある子どもの予防接種に携わる外来看護師の支援の実態．日本小児看護学会第 28 回学術集会，名古屋市，2018.7.

Abe M, The effects of egg and folic acid intake on food allergy onset by the birth season of children, EAACI2018, Munchen, 2018.5.

安部真紀，梅野貴恵，樋口幸，大矢七瀬：助産師学生への超音波診断装置を用いた教育に関する調査研究．日本助産学会第 33 回学術集会，福岡市，2019.2

石田佳代子：災害訓練におけるトリアージ黒エリアでの訓練内容と教育ニーズの検討—全国の災害拠点病院の看護師を対象とした質問紙調査より—，日本災害看護学会第 20 回年次大会，神戸市，2018.8.

市瀬孝道：PM2.5 の炎症誘導因子．フォーラム 2F4『環境因子と生体反応』第 41 回日本分子生物学会年会，横浜市，2018.12.

市瀬孝道，定金香里，牧 輝弥：黄砂時に単離された真菌類のマウス肺におけるアレルギー炎症の比較．第 59 回大気環境学会年会，福岡市，2018.9.

市瀬孝道，吉田成一，伊藤 智彦，鳥羽 陽：加熱分解法による PM2.5 の炎症反応誘導物質の調査．第 139 年回日本薬学会，千葉市，2019.3.

伊東朋子, 朝来野瞳 : NIRS を用いた筋萎縮性側索硬化症患者の課題刺激時の脳血流動態と CT 所見の検討. 第 9 回大分難病研究会, 大分市, 2018.7.

稲垣敦 : 離島住民の健康寿命と食習慣 : 大分県姫島村について. 第 77 回日本公衆衛生学会総会, 郡山市, 2018.10.

稲垣敦 : 大分県立看護科学大学「健康増進プロジェクト」の活動について. 第 10 回大分県スポーツ学会学術大会, 大分市, 2018.12.

稲垣敦 : 介護予防運動機能向上標準プログラム (大分県版) の性別、年代別、家族構成別の効果. 日本体育測定評価学会第 18 回大会, 札幌市, 2019.3.

岩崎香子, 大和英之, 松垣あいら, 中野貴由, 高垣裕子, 深川雅史 : 低代謝回転を伴う腎不全動物の骨力学特性の特徴とその影響因子. 第 38 回日本骨形態計測学会, 大阪市, 2018.6.

足立梨紗, 岩崎香子, 濱中良志, 渡邊博志, 丸山徹, 深川雅史 : 尿毒症物質 p-Cresyl sulfate の FGF23 産生調節を介した心血管病態への関与. 第 61 回日本腎臓学会学術集会, 新潟市, 2018.6.

加木陽香, 梅野貴恵 : 妊娠先行型結婚による妊娠・出産・育児期の問題と年齢別支援の検討. 第 59 回日本母性衛生学会, 新潟市, 2018.10.

坂元彩乃, 梅野貴恵 : ベビーマッサージ前後における母親の児への愛着形成と母親自身への影響. 第 15 回大分県母性衛生学会, 大分市, 2018.10.

姫野綾, 梅野貴恵 : 骨盤支持ベルト装着による月経時痛・腰痛の自覚についての検討. 第 49 回日本看護学会学術集会ヘルスプロモーション学術集会, 岡山市, 2018.9.

恵谷玲央, 小嶋光明, 下田優輝, 甲斐倫明 : X 線 CT による部分照射が造血幹細胞に与える影響 -マウスの染色体異常 (FISH 法) の観察から. 日本保健物理学会第 51 回研究発表会, 札幌市, 2018.6.

恵谷玲央, 小嶋光明, 下田優輝, 甲斐倫明 : 動物用 X 線 CT を用いたマウス造血幹細胞に与える影響 -全身照射と部分照射の比較. 日本放射線影響学会第 61 回大会, 長崎市, 2018.11.

山本真悠子, 緒方文子, 川崎涼子 : 市町村保健師が多胎児妊婦・家族へ行う支援活動における重要性の認識. 第 77 回日本公衆衛生学会, 郡山市, 2018.11.

小嶋光明, 廣内篤久, 恵谷玲央, 有吉健太郎, 甲斐倫明 : 低線量率放射線長期連続照射によるマウス急性骨髄性白血病の起因となる Sfp1/Pu.1 遺伝子変異の線量率依存性の解析. 第 55 回放射線影響懇話会, 久留米市, 2018.7.

小嶋光明, 廣内篤久, 恵谷玲央, 有吉健太郎, 甲斐倫明 : 低線量率放射線長期連続照射によるマウス急性骨髄性白血病の起因となる Sfp1 遺伝子変異の線量率依存性の解析. 第 61 回日本放射線影響学会, 長崎市, 2018.11.

小嶋光明, 川俣陽平, 伊藤敦, 宇佐美德子, 甲斐倫明 : マイクロビームを用いた放射線に対する細胞集団の応答～照射面積の違いによる DNA 損傷応答の変化～. 日本保健物理学会第 51 回研究発表会, 札幌市, 2018.6.

小野美喜, 甲斐博美, 森加苗愛, 中釜英里佳 : 訪問看護における特定行為介入の現状と看護師の認識. 第 38 回日本看護科学学会学術集会, 松山市, 2018.12.

小野美喜 (企画者・座長), 藤内美保, 甲斐博美 (発表者), 森加苗愛, 高野政子, 中釜英里佳, 草野淳子, 村嶋幸代 : 地域医療の課題に取り組むプライマリ領域の診療看護師 (NP) の教育と活動 : 教育開始から 10 年の実績評価. 第 38 回日本看護科学学会, 松山市, 2018.12.

生田有沙, 甲斐博美 : 認知症高齢者を支える家族介護者にとっての家族会の役割. 第 19 回認知症ケア学会, 新潟市, 2018.6.

甲斐倫明 : Risk and benefit consideration of pediatric CT examinations. 日本放射線影響学会第 61 回大会, 長崎市, 2018.11.

甲斐倫明, 恵谷玲央, 小嶋光明 : 低線量・低線量率における線量率効果の推定値の課題:動物実験データの分析. 日本保健物理学会第 51 回研究発表会, 札幌市, 2018.6.

影山隆之, 小林敏生 : 三交替勤務に就く女性病院看護師の夜勤中の眠気と職場環境要因の関連. 第 91 回日本産業衛生学会, 熊本市, 2018.5.

影山隆之, 平井和明, 岩崎りほ, 巻野希和, 緒方文子, 篠原彩, 村嶋幸代 : 看護学生による予防的家庭訪問実習(第 6 報)高齢者の生活機能と健康への関心の追跡. 第 77 回日本公衆衛生学会総会, 郡山市, 2018.10.

古屋敷明美, 田渕啓二, 影山隆之, 乗越健輔, 池之上和隆, 小林敏生 : IT 企業社員を対象とした滞在型転地勤務がもたらす生理機能および睡眠感への影響. 第 77 回日本公衆衛生学会総会, 郡山市, 2018.10.

小林敏生, 古屋敷明美, 田淵啓二, 増田敦子, 田中亜希子, 影山隆之 : IT 企業社員を対象とした滞在型転地勤務によるメンタルヘルスへの影響. 第 91 回日本産業衛生学会, 熊本市, 2018.5.

川崎涼子, 大西真由美, 河津理沙 : 結核に罹患した刑事施設被収容者への包括的継続支援のための連携. 第 77 回日本公衆衛生学会, 郡山市, 2018.11.

深水志帆, 川崎涼子 : A 県内の消防吏員の食習慣と生活習慣病指摘経験との関連. 第 77 回日本公衆衛生学会, 郡山市, 2018.11.

竹中弥和, 藤沢さとみ, 川崎涼子, 赤星琴美, 村嶋幸代 : 院内感染対策強化のための保健師による地域医療機関の関係づくり. 日本地域看護学会第 21 回学術集会, 岐阜市, 2018.8.

坂口みさと, 川崎涼子, 影山隆之 : 大分県内の中小企業における健康経営事業担当者のヘルスリテラシー. 第 77 回日本公衆衛生学会総会, 郡山市, 2018.10.

Yoshida T, Kuwano N, Kai H : Nurse's roles and assignments at health clinic in remote areas based on community culture. 21st EAFONS & 11th INC (21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conferences), Seoul, Korea, 2018.1.

草野淳子, 高野政子 : 重症心身障害児(者)施設における看護管理者の特定行為に関する認識. 第 44 回日本重症心身障害学会学術集会, 東京, 2018.9.

草野淳子, 高野政子, 足立綾 : 小児 NP を講師とした在宅療養児訪問看護師研修会の実施後の評価. 第 65 回日本小児保健協会学術集会, 米子市, 2018.6.

草野淳子, 高野政子, 足立綾 : 医療的ケアが必要な在宅療養児の訪問看護師研修会に小児診療看護師 (NP) が介入する試み. 日本小児看護学会第 28 回学術集会, 名古屋市, 2018.7.

草野淳子, 小野美喜, 福田広美, 甲斐博美, 森加苗愛, 宮内信治, 高野政子, 濱中良志, 藤内美保, 村嶋幸代 : 修士課程 NP コース教育モデルにおける E ラーニングシステム導入の試み. 日本 NP 学会第 4 回学術集会, 仙台市, 2018.11.

後藤成人, 波多野ひかり, 河向勝貴, 三浦千恵, 足立大作, 岡崎敬一郎, 若林美紀, 伊東宏紀, 山崎悦子, 衛藤龍 : 隔離早期解除に向けた精神科看護師によるアセスメントの現状. 第 43 回日本精神科看護学術集会, 名古屋市, 2018.6.

佐伯圭一郎, 西川浩昭, 李廷秀, 宮里暁乃, 大城真理子, 金城芳秀 : 看護学生の考える教員の civility—計量テキスト分析による検討—. 日本健康学会第 83 回総会, 前橋市, 2018.11.

金城芳秀, 宮里暁乃, 佐伯圭一郎, 西川浩昭, 大城真理子, 李 廷秀: 看護学生を対象としたグループインタビューにおける教員の incivility と civility (その 1). 第 38 回日本看護科学学会学術集会, 松山市, 2018.12.

宮里暁乃, 金城芳秀, 佐伯圭一郎, 西川浩昭, 大城真理子, 李 廷秀: 看護学生を対象としたグループインタビューにおける教員の incivility と civility (その 2). 第 38 回日本看護科学学会学術集会, 松山市, 2018.12.

定金香里, 市瀬孝道: ミスト状塩化ベンザルコニウムの吸入曝露がアレルギー性気道炎症に及ぼす影響. 第 49 回日本職業・環境アレルギー学会. 横浜市, 2018.7.

定金香里, 市瀬孝道, 牧輝弥: 黄砂から単離した真菌を加熱黄砂と複合曝露したときの肺アレルギー増悪影響. 第 59 回大気環境学会年会, 春日市, 2018.9.

品川佳満, 岡田愛美, 伊東朋子, 橋本 勇人: 看護師のための個人情報漏えい事故事例集の作成. 第 19 回日本医療情報学会看護学術大会, 高知市, 2018.7.

Sakomura M, Ueno Y, Takagi Y, Shinohara A, Ogata A, Kawasaki R: Elderly residents' perception of a call for ambulance in a hilled rural area of Oita prefecture, Japan. The 20th International Symposium of Geospatial Information Science and Urban Planning. Chuncheon, Korea, 2018.11.

杉本圭以子: 精神科デイケアにおける IMR によるリカバリーゴールの変化とリカバリーゴールを達成するための行動の変化. 日本精神障害者リハビリテーション学会第 26 回東京大会, 東京, 2018.12.

高野政子: 小児がん患児に対して小学校教員が ICT を用いて復学を支援するプロセス. 第 16 回日本小児がん看護学会学術集会, 京都市, 2018.11.

高野政子, 足立綾: 通常学校における医療的ケアを必要とする児童生徒に関する文献レビュー. 第 65 回日本小児保健協会学術集会, 米子市, 2018.6.

Tonai M, Sudo S, Yamada T: Differences in assessment of patient condition between nurses and nursing students. 2nd International Conference and Exhibition on Nursing, San Diego, USA, 2018.11.

安部涼子, 佐々木真理子, 藤内美保: 高齢の心不全患者に対する訪問看護ステーションにおける診療看護師の介入ーアドヒアランスが向上し再入院を回避できた事例を通して. 第 4 回日本

NP 学会学術集会, 仙台市, 2018.11.

久保田彩加, 徳丸由布子, 林猪都子 : 妊娠期・退院時・産後 1 ヶ月での母乳育児に対する意識の変化と実際. 第 59 回母性衛生学会総会・学術集会, 新潟市, 2018.10.

矢野博之, 濱中良志, 西田欣広, 甲斐浩一, 松尾哲孝, 吉岡秀克 : 放射線誘起線維に関わる長非コード RNA の発現解析. 第 41 回日本分子生物学会年会, 横浜市, 2018.11.

西田欣広, 矢野博之, 太田三紀, 北村裕和, 檜原久司, 花田俊勝, 濱中良志 : β セクレターゼ欠損マウスにおける胎児発育不良と細胞外マトリックスの発現解析. 第 41 回日本分子生物学会年会, 横浜市, 2018.11.

後藤麻乃, 林猪都子, 徳丸由布子 : 出産後の会陰部痛の経日的変化及び日常生活動作との関係. 第 59 回母性衛生学会総会・学術集会, 新潟市, 2018.10.

稗田朋子 : 人が“自己存在の意味を問う”とは何か—スピリチュアリティの視点から考える—. 日本社会福祉学会第 66 回秋季大会, 名古屋市, 2018.9.

樋口幸 : ヒト正期産新生児における胎脂中の過酸化脂質 (ヘキサノイルリジン) の経時的変化, 第 33 回日本助産学会学術集会. 福岡市, 2019.3.

樋口幸, 品川佳満 : 画像解析を用いた新生児皮膚状態評価の試み—画像による皮膚状態評価と皮膚バリア機能 (TEWL・pH) との関連—. 第 6 回看護理工学会学術集会, 東京, 2018.10.

樋口幸, 品川佳満, 福島 学, 市田秀樹 : マイクロスコブ撮影画像を用いた新生児皮膚状態評価の解析手法の検討. 第 6 回看護理工学会学術集会, 東京, 2018.10.

大塚奈々, 樋口幸 : 妊娠期の栄養補助食品 (サプリメント) 摂取の実態と背景要因. 第 33 回日本助産学会学術集会, 福岡市, 2019.3.

松延朋実, 樋口幸 : 周産期医療施設におけるペリネイタル・ロスのグリーフケアに関する実態. 第 33 回日本助産学会学術集会, 福岡市, 2019.3.

大里一矢, 福島学, 樋口幸, 河合修平, 上原正志, 市田秀樹, 森竹隆広, 風間道子, 柳川博文 : 筋音計測 (MMG) による微小筋肉活動計測に関する一検討. 日本音響学会 2018 年秋季大会, 大分市, 2018.9.

福田広美 : 中小規模病院等の看護管理者支援. 平成 30 年度公立大学協会看護・保健医療部会総

会 分科会 I : 「地域が抱える課題への公立大学としての取り組み」, 大分市, 2018.8.

甲斐優子, 池田裕美, 福田広美, 村嶋幸代 : 保健所を核とする「看護の地域ネットワーク」を活用した看護管理者支援の取り組み. 日本公衆衛生学会第 77 回学会総会, 郡山市, 2018.10.

竹中愛子, 大戸朋子, 原田千鶴, 福田広美, 村嶋幸代 : 大分県版中小規模病院等看護管理支援事業を行って. 日本看護管理学会第 22 回学術集会, 神戸市, 2018.8.

堀裕子, 折田真紀子, 平良文亨, 高村昇 : 原子力発電所 UPZ 内の小中学校教員における放射線リスク認知等の実態調査. 第 59 回原子爆弾後障害研究会, 長崎市, 2018.6.

大畠夕奈, 堀裕子, 小野美喜 : もの忘れ外来における初回受診から診断、ケアサービスを受けるまでの看護. 日本看護倫理学会第 11 回年次大会, 東京, 2018.5.

丸山加菜 : 地域医療に取り組む診療所に通院するコントロール良好な高齢糖尿病患者の特徴と病状コントロールの影響要因. 日本地域看護学会第 21 回学術集会, 岐阜市, 2018.8.

宮内信治 : Jane Austen Emma の談話音調の検討 : 直接話法疑問文における下降音調の示唆するもの Discourse intonation in Jane Austen's Emma: Implicature of falling tones in direct interrogative speech. 第 19 回日本英語音声学会関西・中国支部研究大会, 広島市, 2018.5.

宮内信治 : Emma の自由間接談話における音調の解釈. 近代英語協会第 35 回大会, 京都市, 2018.6.

宮内信治 : 直接話法疑問文における発話音調の比較. 第 23 回日本英語音声学会最終全国大会, 北見市, 2018.9.

片穂野邦子, 高比良祥子, 吉田恵理子, 山田貴子 : 成人看護学でのシミュレーション演習における学生の学習経験. 日本看護研究学会第 44 回学術集会, 熊本市, 2018.8.

吉田成一, 鳥羽陽, 市瀬孝道 : 加熱式タバコの気化蒸気抽出物がマクロファージ様細胞株の遺伝子発現に与える影響. 第 139 年回日本薬学会. 千葉市, 2019.3.

吉田成一, 村木直美, 伊藤剛, 市瀬孝道 : PM2.5 由来有機化学物質の胎仔期曝露が出生仔の免疫系に及ぼす影響. フォーラム 2018 : 衛生薬学・環境トキシコロジー, 佐世保市, 2018.9.

吉田成一, 村木直美, 伊藤剛, 嵐谷奎一, 市瀬孝道 : PM2.5 の胎仔期曝露が雄性胎児発育に及ぼす影響. 第 59 回大気環境学会年会, 春日市, 2018.9.

5-3 受賞

日本 NP 学会第 4 回学術集会ポスター部門優秀賞

草野淳子，小野美喜，福田広美，甲斐博美，森加苗愛，宮内信治，高野政子，濱中良志，藤内美保，村嶋幸代：修士課程 NP コース教育モデルにおける E ラーニングシステム導入の試み，
仙台市，2018.11.24.

6 地域貢献

6-1 講演等

赤星琴美

教育研修保健師助産師看護師実習指導者講習会. 大分県看護協会, 大分市, 2018.6
大分県教育委員会免許法認定講習会. 大分県教育庁. 大分市, 2018.7-8
平成 30 年度子育て講演会. 大分市教育委員会. 大分市, 2018.10
運営. 全国いきいき公衆衛生の会サマーセミナー. 日本公衆衛生学会. 大分市, 2018.7

安部真紀

大分県母性衛生学会事務局. 第 15 回大分県母性衛生学会総会・学術集会役員会. 大分市, 2018.10.

石田佳代子

基礎看護技術 I. 中津ファビオラ看護学校.
臨床に役立つフィジカルアセスメント実践編. 平成 30 年度大分県看護協会研修会. 大分市, 2018.6.
看護診断の基礎. JCHO 南海医療センター看護部講演会. 佐伯市, 2018.8.
看護過程. 平成 30 年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会. 大分市, 2018.8.
看護診断とアセスメント講義・演習. 平成 30 年度豊後大野市民病院看護師研修会. 豊後大野市, 2018.9.
フィジカルアセスメント (心音・呼吸音・全身皮膚). 平成 30 年度看護力再開発講習会. 大分市, 2018.11.

石丸智子

救護班・健康チェック. 森林セラピートレイルランニング大会 in のつはる. 大分市, 2019.3

伊東朋子

第 24 回総会及び患者・家族のつどい. 日本 ALS 協会大分県支部. 大分市, 2018.6
平成 30 年度総会. 全国膠原病友の会大分県支部. 大分市, 2018.6
第 42 回収穫祭. 福祉農場コロニー久住. 竹田市, 2018.11
介護職員等による吸引等研修会. 大分県・大分市, 2019.3.

稲垣敦

みんなでしよう! 夏バテ予防運動! 姫島村健康づくり事業研修会. 姫島村, 2018.8.
健康スポーツ学概論. 大分県スポーツ学会平成 30 年度スポーツ救護講習会, 大分市, 2018.8.
健康チェック. 大深度地熱温泉と上野エリアウォーキング in 大分市. 大分市, 2018.5.

健康・体力チェック．大分市社会福祉協議会世代間交流健康づくり事業．大分市，2018.7.
富士見が丘団地夏祭り．富士見が丘連合自治会．大分市，2018.7.
健康・体力チェック．大分トリニータホームゲーム．大分市，2018.7.
健康・体力チェック．若葉会サロン．大分市，2018.9.
健康チェック．富士見が丘会体育祭．大分市，2018.10.
健康・体力チェック．ゆふいんスポーツレクリエーション大会．由布市，2018.11.
健康チェック．ななせの里まつり．同実行委員会．大分市，2018.11.
健康・体力チェック．大分市社会福祉協議会世代間交流健康づくり事業．大分市，2018.11.
健康・体力チェック．総合型地域スポーツクラブ交流会．津久見市，2018.11.
健康・体力チェック．RUN+FITNESS．津久見市，2019.1.
健康・体力チェック．RUN+FITNESS．佐伯市，2019.2.
健康・体力チェック．森林セラピートレイルランニング大会 in 野津原．大分市，2019.3.
健康チェック．森林探検ウォーキング．大分市，2019.3.
必見！お手軽に効果的に血圧を下げちゃう運動特集！ 姫島村健康づくり事業研修会.姫島村，
2019.3.

梅野貴恵

助産師教育課程．平成 30 年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会．大分市，2018.6
第二次性徴と妊娠．平成 30 年度大分市立三佐小学校「いのちの教育」．大分市，2018.10
経腹産科超音波検査．第 2 回助産師能力強化研修．大分市，2018.10.
大分県母性衛生学会事務局．第 15 回大分県母性衛生学会総会・学術集会役員会．大分市，
2018.10.

恵谷玲央

放射線業務従事者のための教育訓練．平成 30 年度大分県立病院講習会．大分市，2018.4.
看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング．日本アイソトープ協会（文部
科学省「国際原子力人材育成イニシアティブ事業」）．大分市，2018.7.
看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング．日本アイソトープ協会（文部
科学省「国際原子力人材育成イニシアティブ事業」）．大分市，2018.12.

大矢七瀬

大分県母性衛生学会事務局．第 15 回大分県母性衛生学会総会・学術集会役員会．大分市，
2018.10.

小嶋光明

放射線被ばくによる”がん発生”を遺伝子の視点から．第 1 回放射線被ばく相談員フォローアッ
プセミナー．東京，2018.6.
看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング．日本アイソトープ協会（文部

科学省「国際原子力人材育成イニシアティブ事業」．大分市, 2018.7.
放射線被ばくによる”がん発生”を遺伝子の視点から．第 2 回放射線被ばく相談員フォローアップセミナー．大阪市, 2018.12.
看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング．日本アイソトープ協会（文部科学省「国際原子力人材育成イニシアティブ事業」）．大分市, 2018.12.

小野美喜

離島看護学．鹿児島大学医学部保健学科．鹿児島市, 2018.6.
様々な場面での意思決定支援—ジレンマをどう解決するか．大分東部地区看護ネットワーク研修会．大分市, 2018.11.
第 2 回専任教員継続研修会．大分市, 2018.12.
看護専門職論: 看護実践における倫理．認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修．大分市, 2018.6.
実習指導計画・指導案作成の実際．大分県看護協会実習指導者講習会．大分市, 2018.9.
看護倫理の理解（基礎編）．大分県看護協会．大分市, 2018.8.
看護倫理の理解（実践編）．大分県看護協会．大分市, 2018.11.
人間と倫理．中津ファビオラ看護専門学校．中津市, 2018.8.
実習指導者養成短期プログラム．大分県立病院．大分市, 2018.8.
NP 教育における実習の進め方．佐久大学大学院教育研修．佐久市, 2019.3.

甲斐博美

救護班・健康チェック．森林セラピートレイルランニング大会 in のつはる．大分市, 2019.3.
健康チェック．ゆふいんスポーツレクリエーション大会．由布市, 2018.11.
地域医療を活性化する看護の魅力—診療看護師（NP）の活躍．地方創生大学等連携プロジェクト支援事業 B「おおいたプロモーション」プログラム 2018．臼杵市, 2018.10.
大学院看護学研究科看護学専攻修士課程（実践者養成）NP 診療看護師コース．長崎県立長崎南高校 SSH 未来デザインスクール．長崎市, 2018.10.
ハートクリニック．認知症カフェ．大分市, 2018.8.
手をつなごう．認知症カフェ．大分市, 2018.8.
ふれあいカフェ．認知症カフェ．大分市, 2018.8.

甲斐倫明

看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング．日本アイソトープ協会（文部科学省「国際原子力人材育成イニシアティブ事業」）．大分市, 2018.7.
CT における患者線量の管理．公益財団法人放射線影響協会 ICRP セミナー．東京, 2018.9.
看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング．日本アイソトープ協会（文部科学省「国際原子力人材育成イニシアティブ事業」）．大分市, 2018.12.

影山隆之

職場のメンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター平成 30 年度マネジメント研修. 大分市, 2018.5.

職場のメンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター平成 30 年度新任課長級研修. 大分市, 2018.5.

睡眠と健康. 大分産業保健総合支援センター産業医研修. 大分市, 2018.6.

睡眠と健康. 大分産業保健総合支援センター衛生管理者研修. 大分市, 2018.7.

自殺対策の基本的な知識～地域での支え合い. 豊後大野市自殺対策ゲートキーパー養成研修. 豊後大野市, 2018.10.

惨事ストレスー消防団員が知っておきたいこと. 消防団員災害救援ストレス対策研修会. 伊万里市, 2018.10.

睡眠が健康をつくる. 別府リハビリテーションセンター労働安全衛生研修会. 別府市, 2018.10.

生きる力を信じる力. 東御市精神保健講演会. 東御市, 2018.10.

過重労働・睡眠負債と生きる習慣. 大分労働局過労死等防止対策推進シンポジウム. 大分市, 2018.11.

自殺対策の基本的な知識～地域での支え合い. 豊後大野市自殺対策ゲートキーパー養成研修. 豊後大野市, 2018.11.

認知症介護者のメンタルヘルスケア. 豊後大野市あんしん研究会. 豊後大野市, 2018.11.

平時のストレスマネジメントと惨事ストレス対策. 大分県消防学校中級科研修. 由布市, 2018.11.

平時のストレスマネジメントと惨事ストレス対策. 大分県消防学校上級幹部科研修. 由布市, 2018.11.

仕事とメンタルヘルス・睡眠. 津久見中央病院職員研修会. 津久見市, 2018.11.

自殺念慮者の心理と行動及び家族に対するメンタルヘルスという見方. 平成 30 年度豊後大野市民生委員児童委員協議会研修会. 豊後大野市, 2019.2.

人が自殺に傾きやすい条件ー心の健康とストレス、周囲との絆のあり方. 北海道家庭生活総合カウンセリングセンター特別研修講座：よりよく生きるための支援者研修. 札幌市, 2019.2.

心の危機に向き合うときー電話相談のあり方、臨み方. 北海道家庭生活総合カウンセリングセンター 相談員研修. 札幌市, 2019.2.

予防的家庭訪問実習. 熊本県看護学生県内定着促進事業講演会. 熊本市, 2019.2.

健康と眠り. 上詰地区サロン健康教室. 大分市, 2019.3.

川崎涼子

地域ケアシステム構築における保健師の役割. 平成 30 年度大分県中堅保健師研修会. 大分市, 2018.12.

草野淳子

たんの吸引の演習（口腔・鼻腔内）. 平成 30 年度大分県医療的ケア教員研修会. 大分市, 2018.8.

胃ろう・腸ろうによる経管栄養の実施手順及び評価方法. 平成 30 年度大分県医療的ケア看護師研修. 大分市, 2018.8.

小児の訪問看護の現状と課題. 訪問看護ステーションかがやき勉強会. 別府市, 2018.7.

小児の訪問看護の現状と課題. 別府市訪問看護連絡協議会研修会. 別府市, 2019.3.

桑野紀子

外国人診療における看護実践. アルメイダ病院研修. 大分市, 2019.1.

中国・四国・九州・沖縄ブロック研修会企画・運営. 日本国際看護学会. 大分市, 2019.3.

後藤成人

運営委員. 第 20 回大分アディクションフォーラム. 大分市, 2018.10.

ボランティア. 大分丘の上祭. 大分市, 2018.10.

ストレスチェック. こころの日. こころとからだの相談支援センター. 大分市, 2018.11.

定金香里

COC+協働開発科目 担当. 大分大学. 大分市, 2018.5.

夏休み子供サイエンス. 大分大学. 大分市, 2018.8.

佐藤愛

世代間交流健康づくり事業. 大分市社会福祉協議会. 大分市, 2018.11.

佐藤栄治

失語症の会「なし会」活動支援. 大分県言語聴覚士協会. 大分市.

品川佳満

看護研究の基礎及びデータ解析入門. 鹿児島大学医学部保健学科公開講座. 鹿児島県, 2018.7.

やってみよう看護研究 2 量的研究と分析. 大分県看護協会教育研修. 大分市, 2018.7.

ヘルスケアサービス管理論. 看護協会認定看護管理者教育課程セカンドレベル研修. 大分市, 2018.9.

篠原彩

健康チェック. 野津原多世代間交流事業. 大分市, 2018.7.

健康チェック. 富士見が丘団地わかば老人クラブ. 大分市, 2018.9.

秦さと子

出張講義. 大分県立中津北高校. 中津市, 2018.10.

出張講義. 大分県立大分南高校. 大分市, 2018.10.

杉本圭以子

やってみよう看護研究 1—テーマの絞り方から研究開始まで. 大分県看護協会教育研修. 大分市, 2018.5-6.

出前講座「看護職を知ろう」. 大分県立臼杵高等学校. 臼杵市, 2018.6.

やってみよう看護研究 3—看護研究のまとめ方とプレゼンテーション. 大分県看護協会教育研修. 大分市, 2018.8

関根剛

アイスブレイク. 大分県新採用職員研修. 大分市, 2018.4.

職場のメンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター「新任監督者研修」. 大分市, 2018.5.

地域のコミュニケーションから始める健康づくり. 大分県北部保健所・愛育会研修会（自殺予防対策研修）. 豊後高田市, 2018.5.

カウンセリングの理論と実際(1). 大分いのちの電話相談員養成研修会. 大分市, 2018.5.

危機時の心のケア総論. 大分県心の緊急支援チーム研修会. 大分市, 2018.5.

スーパーバイズ. 大分市男女共同参画支援センター. 大分市, 2018.5.

対話の基本・カウンセリングの基礎. 大分県警察学校「警察安全相談実務専科教養」. 大分市, 2018.6.

犯罪被害者支援とは何か. 紀の国被害者支援センター「被害者支援活動員養成講座」. 和歌山市, 2018.6.

犯罪被害者の心理. 大分県警察学校「犯罪被害者支援専科教養」. 大分市, 2018.6.

コーディネーター. 大分県犯罪被害シンポジウム. 大分市, 2018.6.

カウンセリングスキルの基礎ほか. 山口被害者支援センター. 山口市, 2018.7.

メンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター「新任係長研修会」. 大分市, 2018.7.

面接技術. 大分県看護協会「訪問看護 e ラーニングを活用した訪問看護師養成講習会」. 大分市, 2018.7.

スーパーバイズ. 大分いのちの電話協会. 大分市, 2018.7.

カウンセリングの原理と実際. 大分県看護協会「保健師助産師看護師実習指導者講習会」. 大分市, 2018.7.

支援員のストレスとサポート. 岡山被害者支援センター. 岡山市, 2018.7.

国民の期待に応える警察活動—警察官目線の見直し. 大分県警察学校リフレッシュ研修. 大分市, 2018.8.

地域の住民だからこそできる自殺予防. 大分市保健所ゲートキーパー養成研修会. 大分市, 2018.8.

メンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター「新任係長研修会」. 大分市, 2018.8.

地域の住民だからこそできる自殺予防. 大分市保健所ゲートキーパー養成研修会. 大分市, 2018.8.

被害者を取り巻く状況. 大分被害者支援センター養成講座. 大分市, 2018.8.

あなたの市や町の犯罪被害者をどう支援するか. 山口県犯罪被害者等相談窓口担当者研修会. 山口市, 2018.8.

傾聴とロールプレイ. チャイルドラインおおいた「電話受け手ボランティア養成講座」. 大分市, 2018.9.

スーパーバイズ. 大分いのちの電話協会. 大分市, 2018.9.

スーパーバイズ. 香川被害者支援センター. 高松市, 2018.9.

支援技術・支援スキル・ロールプレイ. 香川被害者支援センター. 高松市, 2018.9.

コーディネーター. 全国被害者支援ネットワーク「シンポジウム・被害者支援センターのこれから」. 東京, 2018.10.

スーパーバイズ. 大分市男女共同参画支援センター. 大分市, 2018.11.

信頼関係を築くコミュニケーション. 大分県教育庁体育保健課「大分県食育指導者研修会」. 大分市, 2018.11.

日常のコミュニケーションが防止する惨事ストレス. 広島県消防長会研修会. 広島市, 2018.11.

ちょっとだけ、コミュニケーション上手になってみよう. 大分工業高等専門学校特別活動. 大分市, 2018.12.

心と身体の健康についての特別講演. 大分市, 2018.12.

高野政子

特別支援学校における医療的ケアの実施について—たんの吸引と評価方法—. 平成 30 年度大分県教育委員会主催第 1 回医療的ケア看護師研修. 大分市, 2018.4.

医療的ケアの安全管理. 平成 30 年度医療的ケア実施校担当者等研修会. 大分市, 2018.5.

実習の意義・実習指導者の役割. 平成 30 年度臨地実習指導者短期教育プログラム. 大分市, 2018.6.

重度・重複障がいのある児童生徒の摂食指導. 平成 30 年度大分県教育委員会主催重度・重複障がい教育研修. 大分市, 2018.7.

てんかん発作について—けいれんの理解と発作時のケア—. 大分県立別府支援学校校内医療的ケア研修会. 別府市, 2018.7.

経管栄養の基礎—経管栄養と評価方法—. 平成 30 年度大分県教育委員会主催第 2 回医療的ケア看護師研修. 大分市, 2018.8.

医療的ケア—呼吸と緊急時の対応、たんの吸引の基礎—. 平成 30 年度大分県教育委員会主催第 2 回医療的ケア研修会. 大分市, 2018.8.

医療的ケア—健康状態の把握と嚥下機能、経管栄養の基礎—. 平成 30 年度大分県教育委員会主催第 3 回医療的ケア研修会. 大分市, 2018.8.

児童生徒のてんかん発作に係る対応と留意点—てんかん発作！どう対応する—. 大分県立大分支援学校校内医療的ケア研修会. 大分市, 2018.8.

重度心身障がい児の基本的理解と医療的ケア. 大分県立中津支援学校校内医療的ケア研修会. 中津市, 2018.8.

医療的ケアの基本的な知識・理解と子どもの健康観察のポイント。大分県立日出支援学校校内医療的ケア研修会。日出町, 2018.8.

小児看護学。平成 30 年度大分県看護協会主催実習指導者講習会。大分市, 2018.9.

医療的ケア・ヒヤリハット事例の共有・分析。平成 30 年度大分県教育委員会主催第 3 回医療的ケア看護師研修。2018.12.

学校における医療的ケアの現状と対応について。平成 30 年度大分市養護教諭後期研修会。大分市, 2019.1.

藤内美保

臨床に役立つフィジカルアセスメント。大分県看護協会。大分市, 2019.6

フィジカルアセスメント - 高めようアセスメントの能力 事例を中心に- 大分県看護協会, 大分市, 2018.8

観察力を高めよう -呼吸器系・循環器系のフィジカルアセスメント- 大分赤十字病院看護師研修会, 大分市, 2018.8

実習指導案・指導計画 大分県看護協会実習指導者講習会, 大分市, 2018.8

フィジカルアセスメント能力を高めよう 別府医師会看護師研修会, 大分市, 2018.9

看護研究にチャレンジしよう 西部地区看護研究学会、日田市, 2018.

看護研究 竹田地域看護研究学会, 竹田市, 2018.10.

知っておきたい基本的なフィジカルアセスメント, 福岡県医師会看護師卒後研修会, 福岡市, 2018.10.

チーム医療 認定看護管理者制度ファーストレベル教育課程, 広島市, 2018.10

樋口幸

大切ないのち。大分県助産師会, 大分市, 2018.10.

第 2 回助産師能力強化研修「超音波画像診断研修」。大分県立看護科学大学, 大分市, 2018.10.

平野亙

発達障がい児の将来を考える～親のできること・備えるべきこと～。大分県親なきあと問題研究会第 11 回オープンセミナー。大分市, 2018.2.

特別支援教育に望むことー障がい児の生きる力を育てるためにー。大分県教育センター平成 30 年度特別支援学校新任者研修。大分市, 2018.4.

障がいのある人もない人も心豊かに暮らせるまちづくりのために。杵築市心豊かなまちづくり条例制定に伴う職員研修。杵築市, 2018.5.

A S D 児の未来のために～専門職に寄せる親の願い～。大分県平成 30 年度発達障がい者支援専門員養成研修初級。別府市, 2018.6.

「親亡き後」の問題と対策をどう考えるか? ～別府市の取り組みから。富山市親亡き後の準備と支援を考えるセミナー。富山市, 2019.3.

福田広美

- 実習指導者講習会研修. 大分県看護協会. 大分市, 2018.7.
- 認定看護管理者ファーストレベル講義. 大分県看護協会. 大分市, 2018.7.
- 認定看護管理者ファーストレベル演習. 大分県看護協会. 大分市, 2018.8-10.

堀裕子

- 看護職の原子力・放射線教育のためのトレーナーズトレーニング. 日本アイソトープ協会. 大分市, 2018.7
- 被ばく者健康講話「もの忘れ外来について～もの忘れ外来ってどんなところ？認知症かも…と思ったら」. 長崎市, 2019.2

村嶋幸代

- 「社会に新風を吹きこむ看護のリーダーシップ」－大分県立看護科学大学の活動から－, 大分県立看護科学大学創立 20 周年記念講演会, 別府市, 2018.9
- 「保健師の人材育成を推進するために～保健師のキャリア形成について考える～」, 平成 30 年度第 2 回保健師研修会, 鹿児島県, 2018.9
- 「看護看護基礎教育検討会の経過報告」, 第 7 回全国保健師教育機関協議会秋季教員研修会, 福島県, 2018.10

森加苗愛

- 糖尿病に関する集団教育技術. 平成 30 年度 徳島文理大学地域連携センター糖尿病看護認定看護師教育課程. 徳島, 2018.6.
- 看護記録の基礎. 公益社団法人 大分県看護協会新人看護職員研修. 大分市, 2018.6.
- 糖尿病患者及び家族・重要他者への援助方法. 平成 30 年度徳島文理大学地域連携センター糖尿病看護認定看護師教育課程. 徳島, 2018.7.
- 糖尿病と成人期男性のセクシュアリティ. 第 37 回糖尿病プラクティス研究会. 長崎県, 2018.8.
- 看護研究を始めよう. 大分赤十字病院研究支援講演. 大分市, 2019.1.
- 糖尿病教室活動支援. 国東市民病院糖尿病患者会. 国東市, 2018.5.
- 生活習慣病予防は裏を読もう！－好物を美味しくヘルシーに食べるコツ－. 姫島村健康推進事業研修会. 姫島村, 2018.8.
- 敬老会健康チェック活動支援. 日出町高齢者健康推進事業. 日出町, 2018.9.
- ウォークラリー活動支援. 国東市民病院糖尿病患者会. 国東市, 2018.10.
- 健康チェック. 第 44 回富士見が丘体育祭. 大分市, 2019.10.
- 地域医療を活性化する看護の魅力－診療看護師（NP）の活躍. 地方創生大学等連携プロジェクト支援事業 B「おおいたプロモーション」プログラム 2018. 日出町, 2018.10.
- 健康チェック. 第 33 回ななせの里まつり. 大分市, 2018.11.
- 健康・体力チェック. RUN+FITNESS. 大分市, 2019.3.
- 健康チェック. 森林探検ウォーキング. 大分市, 2019.3.

血管に優しい生活してますか？～知っ得!血圧管理のこつ～. 姫島村健康推進事業研修会. 姫島村, 2018.3.

山田貴子

フィジカルアセスメント I 確実に身につくフィジカルアセスメント（呼吸・循環編）. 平成 30 年度大分県看護協会教育研修. 大分市, 2018.6.

看護診断とアセスメント研修. 平成 30 年度豊後大野市民病院看護職員研修会. 豊後大野市, 2018.2.

吉川加奈子

災害医療ボランティア. 平成 30 年 7 月豪雨, 呉市, 2018.8.

吉村匠平

九重町立淮園小学校 1 年生保護者会. 九重町, 2019.2.

九重町立飯田子ども園保護者後援会. 九重町, 2018.4.

社会福祉法人皆輪会職員研修. 福岡市, 2018.4-10.

九重町特別教育支援員研修会. 九重町, 2018.4-8.

大分県立病院実習指導者短期教育プログラム. 大分市, 2018.6.

アルメイダ病院新入職員研修. 大分市, 2018.6-11.

アルメイダ病院プリセプター研修. 大分市, 2018.7.

大分県安全運転管理講習会. 国東市, 2018.9.

大分県安全運転管理講習会. 杵築市, 2018.9.

大分県安全運転管理講習会. 大分市, 2018.11.

大分県専任教員継続研修会. 大分市, 2018.12.

6-2 研究指導

衛藤病院	小嶋光明	後藤成人
大分県立病院	秦さと子	田中佳子
大分市医師会立アルメイダ病院	関根剛	石丸智子
大分赤十字病院	平野亙	定金香里

6-3 学会その他の役員等

村嶋幸代

厚生労働省看護基礎教育検討会 委員
日本看護系大学協議会 監事
全国保健師教育機関協議会 監事
日本 NP 教育大学院協議会 副会長
日本地域看護学会 理事 代議員 教育委員長（6月まで） 監事（6月から）
日本公衆衛生学会 理事 代議員
日本在宅ケア学会 監事 代議員
日本看護科学学会 理事（6月まで） 監事（6月から）
日本 NP 学会 監事
厚生労働省健康安全・危機管理対策総合研究事業事前評価委員会 委員
国立保健医療科学院 評価委員会 委員
公立大学協会 理事
公立大学協会第2委員会 委員
公立大学協会 看護・保健医療部会 部会長
ヘルシー・ソサエティ賞 審査委員
宮崎県地方独立行政法人 評価委員会 評価委員
日本看護協会 保健師のキャリア形成支援検討委員会 委員長
社会福祉法人三井記念病院 評議員
大分県国民健康保険団体連合会保健事業支援・評価委員会 評価委員（学識経験者）
健康寿命日本一おおいた創造会議 委員
生涯健康県おおいた 21 推進協議会 委員
大分県国民保護協議会 委員
大分県公私立学校教育協議会 委員
おおいたホームタウン推進協議会 委員
大分市国際都市交流親善会議 会員

赤星琴美

大分県介護保険審査会 委員
大分県国民健康保険審査会 委員
大分県後期高齢者医療審査会 委員
大分市高齢者福祉計画委員会 委員
大分市介護保険事業計画策定委員会 委員
大分市建築審査会 委員
大分市風俗関連営業建築物審議会 委員
大分市からだが喜ぶ食育応援店普及推進協議会 委員

大分市社会福祉審議会 委員
大分市地域福祉計画策定委員会 委員
大分県国民健康保険団体連合会情報公開および個人情報保護審査会 委員
大分県国民健康保険団体連合会介護サービス苦情処理委員会 委員
大分県国民健康保険団体連合会介護給付費等審査委員会 委員
社会福祉法人大分市社会福祉協議会地域福祉活動計画策定委員会 委員
日本公衆衛生看護学会 代議員
日本公衆衛生看護学会学術実践開発委員会 委員
日本地域看護学会教育委員会 委員
大分県看護協会 代議員
大分県看護協会通常総会 議長団
全国保健師教育機関協議会研修委員会 委員
日本学校保健学会第 65 回学術大会 実行委員
佐賀大学大学院 非常勤講師

安部真紀

大分県助産師会 教育委員
大分県母性衛生学会 幹事
助産師能力強化研修（地域医療介護総合確保基金助成）.運営

安部眞佐子

大分大学福祉健康科学部理学療法コース 非常勤講師

石田佳代子

第 49 回日本看護学会急性期看護学術集会抄録選考委員会 委員

石丸智子

第 49 回日本看護学会急性期看護学術集会抄録選考委員会 委員

市瀬孝道

環境省 黄砂問題検討委員
環境省 黄砂による健康影響調査検討業務委員
福岡市 PM2.5 と黄砂の健康影響検討会 委員

伊東朋子

大分県看護協会 学会委員会 委員長
日本 ALS 協会大分県支部 運営委員

稲垣敦

日本体育測定評価学会 会長
大分県スポーツ学会 代表理事
日本体育学会 代議員 測定評価専門領域代表 学会賞選考委員
浅田学術奨励賞 選考委員
2020 横浜スポーツ学術会議 学術企画委員
大分県介護予防市町村支援委員会運動機能向上専門部会 委員
大分県リハビリテーション協議会 委員
大分市ななせの里まつり 実行委員
大分市森林セラピートレイルランニング 実行委員
熊本大学 非常勤講師
大分医学技術専門学校 非常勤講師

岩崎香子

日本骨粗鬆症学会 評議員
日本 CKD-MBD 研究会 評議員
ROD21 研究会 幹事
第 19 回日本骨粗鬆症学会学術集会 プログラム委員
大分大学福祉健康科学部理学療法コース 非常勤講師

梅野貴恵

大分県母性衛生学会 理事 副会長 事務局長
日本助産診断実践学会 理事 編集委員

恵谷玲央

若手放射線生物学研究会 (YRBAJ) 副運営委員

小嶋光明

大分大学医学部附属病院 臨床研究審査委員
日本放射線影響学会 災害対応委員
日本放射線影響学会 論文紹介企画小委員
放射線生物研究 編集委員

小野治子

日本学校保健学会第 65 回学術大会 実行委員

小野美喜

日本 NP 学会 理事

日本 NP 教育大学院協議会 理事 NP 資格認定試験委員 診療報酬改定 WG
日本看護倫理学会理事 評議員 政策検討委員
日本看護協会 ナースプラクティショナー制度検討委員会 委員
地域医療支援病院 運営委員（大分県立病院）委員長
大分岡病院 特定行為研修管理委員

甲斐博美

日本 NP 学会 理事
日本 NP 教育大学院協議会 診療看護師継続教育研修「高齢者総合医療・認知症診療」研修担当
日本 NP 教育大学院協議会 第 9 回 NP 資格認定試験準備・監督

甲斐倫明

国際放射線防護委員会(ICRP)主委員会 委員
国際放射線防護委員会(ICRP)Task Group93 座長
原子力規制委員会 放射線審議会 委員
原子力規制委員会 国立研究開発法人審議会 委員
原子力規制委員会 国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構部会 部会長
環境省 環境回復検討会委員
環境省環境回復検討会除去土壌の処分に関する検討チーム 座長
文部科学省 原子力損害賠償審査会 委員
人事院安全専門委員会 委員
大分県防災会 委員
大分県防災対策推進委員会 原子力災害対策部会 委員
福岡県防災会議原子力部門専門 委員
鳥取県原子力安全 顧問
鹿児島県環境放射線モニタリング技術委員会 委員
日本学術会議連携 会員
日本保健物理学会 会長
日本放射線影響学会 評議員
放射線影響研究所 科学諮問委員
国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構 放射線リスク・防護研究基盤委員会 委員長
国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構 放射線防護分野における課題解決型ネットワークとアンブレラ型統合プラットフォームの形成事業代表者会 委員
九州大学 非常勤講師
福井大学 非常勤講師

影山隆之

日本精神衛生学会 理事長

日本精神衛生学会 編集委員
日本自殺予防学会 常務理事
日本自殺予防学会 編集委員長
日本学校メンタルヘルス学会 評議員
日本学校メンタルヘルス学会 編集委員
日本産業ストレス学会 評議員
日本産業衛生学会 編集委員
日本看護科学学会 編集委員
大分県自殺対策連絡協議会 副会長
大分県精神疾患医療連携協議会 委員
大分県アルコール健康障がい対策推進協議会 委員
大分県医療ロボット・機器産業協議会看護関連機器開発部会 会長
大分県環境影響評価技術審査会 委員
大分県社会福祉協議会日常生活自立支援事業契約締結審査会 審査委員
大分市民のこころといのちを守る自殺対策行動計画策定推進検討委員会 会長
別府市自殺対策計画策定推進委員会 委員長
豊後大野市自殺対策連絡協議会 助言者
日出町自殺対策連絡協議会 委員
広島大学医学部保健学科 非常勤講師
別府大学人間学部 非常勤講師
別府市医師会看護専門学校 非常勤講師

川崎涼子

日本公衆衛生学会 代議員
大分県保健師連絡会議 委員
特定非営利活動法人 長崎斜面研究会 理事
日本 ALS 協会長崎県支部 運営委員

桑野紀子

大分県看護協会 実習指導者講習会運営委員会 委員長
日本国際看護学会 理事会研究委員会 評議員

後藤成人

日本精神科看護協会大分県支部 副教育委員長
DPAT 隊員

佐伯圭一郎

日本健康学会 評議員

日本看護科学学会 和文誌編集委員
大分県情報公開・個人情報保護審査会 委員
中津ファビオラ看護学校 非常勤講師

定金香里

日本生理学会 評議員 エducator
大気環境学会健康影響分科会 幹事
大分県理科化学教育懇談会 幹事
大分県環境影響評価技術審査会 委員
大分県リサイクル認定製品審査会 委員
大分リハビリテーション専門学校 非常勤講師

佐藤愛

大分県公衆衛生協会 評議員

品川佳満

別府医療センター附属大分中央看護学校 非常勤講師

秦さと子

大分県看護協会教育委員会 委員
大分県脳卒中懇話会 世話人

杉本圭以子

第 49 回日本看護学会急性期看護学術集会 抄録選考委員

関根剛

大分地方裁判所 裁判所委員会 委員
消防庁 緊急時メンタルサポートチームメンバー
大分県災害時公衆衛生対策チーム(DPAT)活動運営委員会 委員
大分県こころの緊急支援活動運営委員会 委員
全国被害者支援ネットワーク 理事
大分県被害者支援センター 副理事長
大分いのちの電話 スーパーバイザー
大分大学医学部医学科 非常勤講師
大分大学医学部看護学科 非常勤講師
大分医療技術専門学校 非常勤講師

高野政子

日本小児看護学会 評議員
九州沖縄小児看護教育研究会 幹事
大分県小児保健協会 理事
日本小児看護学会災害対策委員会 委員
第 49 回日本看護学会急性期看護学術集会 抄録選考委員会 委員
日本小児看護学会研究奨励賞選考委員会 委員
大分県医療的ケア連絡協議会 委員長
大分県特別支援学校第三者評価委員会 委員
大分県小児在宅医療連絡会 委員
大分市特別支援教育メディカルサポート事業委託事業者選定委員会 委員長

藤内美保

大分県看護協会 理事
大分県医療計画策定協議会 委員
大分県医療費適正化推進協議会 委員
日本 NP 学会 理事
日本 NP 教育大学院協議会 社員
大分県立看護科学大学特定行為研修管理委員会 委員
看護師の特定行為に係る指定研修機関連絡会 幹事施設代表者
COC+ 教育開発部会 委員
広島大学 客員教授
名城大学大学院 非常勤講師
中津ファビオラ看護学校 非常勤講師

永松いずみ

大分県看護協会 助産師職能委員
平成 30 年度健やか家族博覧会事業「いのち輝く いいお産の日」事業. 運営協力.
第 49 回日本看護学会（急性期看護）学術集会. 運営協力.
平成 30 年度大分県助産師職能交流集会. 分科会企画運営.
平成 30 年度大分県看護職連携強化交流会. 企画運営.

林猪都子

大分県母性衛生学会 理事
大分県母性衛生学会 学術集会実行委員
大分県助産師会 県中地区理事
大学コンソーシアムおおいた 運営委員
大分県准看護師 試験委員

大分市おおいた都心まちづくり 委員

樋口幸

大分市産学交流サロン事業検討委員会 委員

大分県母性衛生学会 事務局庶務

平野亙

大分県自閉症協会 会長

大分県障がい者差別解消支援地域協議会 委員

大分県特別支援連携協議会 委員

大分県立特別支援学校第三者評価委員会 委員

杵築市障がい者差別等事案解決委員会 委員長

医療事故防止・患者安全推進学会 理事

大分県発達障がい研究会 理事

大分県発達障がい者支援センター連絡協議会 委員

大分県発達障がい者療育専門員養成研修運営委員会 委員

大分県合理的配慮推進事業に係る専門家チーム 委員

大分県立病院治験審査委員会 委員

大分健生病院倫理委員会 委員

大分大学福祉健康科学部 非常勤講師

福田広美

日本看護協会認定看護管理者 教育運営委員

大分地方労働審議会 委員

大分県社会福祉審議会 委員

中小規模病院等看護管理者支援協議会 委員

堀裕子

第 49 回日本看護学会（急性期看護）学術集会. 実行委員

宮内信治

日本英語音声学会 常任理事

大分県高等学校教育研究会英語部会 顧問

大分市立横瀬小学校 学校評議員

大分市立横瀬小学校学力向上委員会 委員

大分大学経済学部 非常勤講師

大分県立芸術文化短期大学 非常勤講師

第 67 回大分県高校英語弁論大会. 審査委員長.

森加苗愛

日本糖尿病教育・看護学会編集委員会 委員
日本糖尿病教育・看護学会表彰委員会 委員
日本糖尿病協会編集委員会 委員
慢性看護学会 評議員

吉川加奈子

一般社団法人 日本NP教育大学院協議会. 卒後研修窓口担当.

吉田成一

日本薬学会 代議員
日本アンドロロジー学会 評議員
精子形成・精巣毒性研究会 評議員
フォーラム 2018 プログラム委員
第 59 回大気環境学会 プログラム委員

吉村匠平

九重町教育支援センターほっとスペース 教育相談員
大分県合理的配慮推進事業に係る専門家チーム 委員 (大分地区)
大分県合理的配慮推進事業に係る専門家チーム 委員 (日田地区)
日本学校心理士会大分支部 支部長
放送大学 非常勤講師.
佐伯豊南地区高等学校養護教諭部門 研究指導

7 国内・国外研修派遣

草野淳子

研修先 : Jhons Hopkins University School of Nursing (アメリカ、メリーランド州ボルチモア)

研修形態 : J1 Vissiting Scholar

2018年12月1日～12月30日

8 役員及び審議会委員名簿

役員

理事長（学長）		村嶋幸代
理事	学部長	藤内美保
理事	研究科長	稲垣敦
理事	事務局長	清末敬一郎
理事（非常勤）	大分大学医学部附属病院長	門田淳一
理事（非常勤）	社会医療法人小寺会理事長	小寺隆
理事（非常勤）	大分経済同友会恒久幹事	高橋靖周
監事（非常勤）	大分県看護協会参与	神品實子
監事（非常勤）	公認会計士	福田安孝

経営審議会

学内委員	理事長	村嶋幸代
学内委員	理事	藤内美保
学内委員	理事	稲垣敦
学内委員	理事	清末敬一郎
学内委員	理事（非常勤）	門田淳一
学内委員	理事（非常勤）	小寺隆
学内委員	理事（非常勤）	高橋靖周
学外委員	弁護士	千野博之
学外委員	立命館アジア太平洋大学 副学長	吉松秀孝
学外委員	大分合同新聞社特別顧問・論説委員	松尾和行
学外委員	大分県看護協会会長	竹中愛子

教育研究審議会

学内委員	学長	村嶋幸代
学内委員	学部長	藤内美保
学内委員	研究科長	稲垣敦
学内委員	事務局長	清末敬一郎
学内委員	生体科学教授	濱中良志
学内委員	生体反応学教授	市瀬孝道
学内委員	健康運動学教授	稲垣敦
学内委員	人間関係学准教授	吉村匠平
学内委員	環境保健学教授	甲斐倫明
学内委員	健康情報科学教授	佐伯圭一郎

学内委員	言語学教授	G.T.Shirley
学内委員	基礎看護学准教授	伊東朋子
学内委員	成人・老年看護学教授	小野美喜
学内委員	小児看護学教授	高野政子
学内委員	母性看護学教授	林猪都子
学内委員	助産学教授	梅野貴恵
学内委員	保健管理学教授	福田広美
学内委員	地域看護学准教授	赤星琴美
学内委員	国際看護学准教授	桑野紀子
学外委員	大分大学名誉教授	犀川哲典

9 教職員名簿

9-1 専任教員

生体科学	教授	濱中良志		
	准教授	安部眞佐子		
	学内講師	岩崎香子		
生体反応学	教授	市瀬孝道		
	准教授	吉田成一		
	学内講師	定金香里		
健康運動学	教授	稲垣敦		
	准教授	吉村匠平		
	准教授	関根剛		
人間関係学	非常勤助手	秋本慶子		
	教授	甲斐倫明		
	准教授	小嶋光明		
環境保健学	助教	恵谷玲央		
	教授	佐伯圭一郎		
	准教授	品川佳満		
健康情報科学	助手	渡邊弘己	H30.11.1	採用
	教授	G.T.Shirley		
	准教授	宮内信治		
言語学	非常勤助手	高野友愛	H30.4.1	採用
	准教授	伊東朋子		
	講師	秦さと子		
基礎看護学	助教	石丸智子		
	助教	田中佳子		
	臨時助手	岸良達也	H30.4.1	採用
			H31.3.31	退職
看護アセスメント学	教授	藤内美保		
	准教授	石田佳代子		
	助教	山田貴子		
	臨時助手	後藤智美	H30.4.1	採用
			H31.3.31	退職
成人・老年看護学	教授	小野美喜		
	准教授	森加苗愛		
	助教	堀裕子		
	助教	中釜英里佳		
	助教	宿利優子		

	助手	佐藤栄治		
	臨時助手	中村伊都子	H30.5.31	退職
(NP コース担当)	助教	甲斐博美		
	非常勤助手	大嶋佐智子		
小児看護学	教授	高野政子		
	准教授	草野淳子		
	助教	足立綾		
母性看護学	教授	林猪都子		
	助教	永松いずみ	H30.4.1	採用
	助教	徳丸由布子		
	臨時助手	今村知子	H31.1.31	退職
助産学	教授	梅野貴恵		
	助教	安部真紀		
	助教	樋口幸		
	助教	大矢七瀬	H31.3.31	退職
精神看護学	教授	影山隆之		
	准教授	杉本圭以子		
	助教	後藤成人		
保健管理学	教授	福田広美		
	准教授	平野互		
	助教	稗田朋子	H30.4.1	採用
	助教	吉川加奈子		
地域看護学	准教授	赤星琴美		
	准教授	川崎涼子		
	助教	小野治子	H30.4.1	採用
	助教	佐藤愛		
	臨時助手	矢幡明子	H30.4.1	採用
国際看護学	准教授	桑野紀子		
	助手	丸山加菜	H30.8.1	採用
看護研究交流センター	助教	緒方文子	H31.3.31	退職
	臨時助手	篠原彩		

9-2 就職相談員

就職相談員 小川三代子

9-3-1 非常勤講師 (学部)

松田美香 言語表現法
 朴貞蘭 韓国語
 西英久 哲学入門
 二宮孝富 法学入門 (日本国憲法)

石本田鶴子	大学ナビ講座
大杉至	社会学入門
足立恵理	文化人類学入門
松本昂	微生物免疫論
麻生 良太	教職概論、教育方法論
横山秀樹	教職概論
小川伊作	音楽とこころ
澤田佳孝	美術とこころ
堀本フカエ	教職概論、学校保健学、養護概論Ⅰ、養護概論Ⅱ
鈴木篤	教育学概論、道德教育と特別活動
長谷川祐介	生徒指導
中島暢美	教育相談
飯田法子	教育相談
河野伸子	教育相談
藤田文	学校教育心理学
今井 航	教育課程論、教育制度論
生田淳一	教育方法論
松久美	災害看護論
佐藤弥生	災害看護論

9-3-2 非常勤講師
(大学院)

岩波栄逸	老年診察・診断学特論
山口豊	老年診察・診断学特論
阿部航	老年診察・診断学特論
安東優	老年診察・診断学特論
工藤欣邦	老年診察・診断学特論、老年疾病特論
糸永一朗	老年診察・診断学特論、老年疾病特論
永瀬公明	老年診察・診断学特論
古川雅英	老年実践演習、小児実践演習
佐藤博	老年実践演習
山本真	老年実践演習
迫秀則	老年実践演習
前田徹	老年実践演習
竹内山水	老年実践演習
藤谷悦子	老年実践演習
財前博文	老年疾病特論
小寺隆元	老年疾病特論、老年薬理学演習
甲原芳範	老年疾病特論

一万田正彦	老年疾病特論
平井健一	老年疾病特論、老年実践演習
木村成志	老年疾病特論
竹下泰	老年疾病特論
伊東弘樹	老年臨床薬理学特論
佐藤雄己	老年臨床薬理学特論
廣瀬福美	NP 論
田村委子	NP 論、老年実践演習
草間朋子	NP 論
光根美保	NP 論
黒木雪絵	NP 論
菅谷愛美	NP 論
庄山由美	老年 NP 論
高根利依子	老年 NP 論
増井 玲子	疾病予防学特論
三浦源太	疾病予防学特論
池邊淑子	疾病予防学特論
平川英敏	薬剤マネジメント特論
藤内修二	広域看護学概論、健康危機管理論、疾病予防学特論
横山光政	広域看護アセスメント学演習
清水久美恵	地域母子保健学特論、地域保健特論
佐藤昌司	周産期特論、周産期診断技術演習
飯田浩一	周産期特論
豊福一輝	周産期特論
後藤清美	周産期特論
中村聡	リプロダクティブ・ヘルス特論
嶺真一郎	リプロダクティブ・ヘルス特論、周産期特論
井上貴史	リプロダクティブ・ヘルス特論
宇津宮隆史	リプロダクティブ・ヘルス特論
石井照和	リプロダクティブ・ヘルス特論
戸高佐枝子	助産マネジメント論
生野末子	分娩期診断技術特論、助産マネジメント論、助産マネジメント演習
上野桂子	母子成育支援特論
井上祥明	母子成育支援特論
佐藤敬子	母子成育支援特論

實崎美奈	ウイメンズヘルスト論
立川洋一	老年アセスメント学演習
久保徳彦	老年アセスメント学演習
宮川ミカ	老年アセスメント学演習
塩月成則	老年薬理学特論、老年疾病特論、病態生理学特論、 老年実践演習、老年薬理学演習
小野剛志	老年薬理学演習
甲斐仁美	看護管理学特論
柿本貴之	看護管理学特論
佐藤弥生	看護管理学特論
山崎清男	看護教育特論
小山秀夫	看護政策論
小池智子	看護政策論
中西三春	看護政策論
立森久照	看護政策論
大田えりか	看護科学研究
阿部実	保健医療福祉政策論
式田由美子	小児看護学特論
本山秀樹	健康危機管理論
若松正人	健康危機管理論
玉井文洋	健康危機管理論
大津孝彦	地域保健特論
大戸英輔	地域保健特論
鈴木馨	病態生理学特論
鈴木由美	地域保健特論、地域母子保健学特論
高波利恵	産業保健特論
吉田愛	産業保健特論
関司和子	学校保健特論
巻野雄介	病態生理学

9-4 事務職員

総務グループ

事務局長	清末敬一郎	H30.4.1	採用
課長補佐	高橋勝三		
主幹	矢部美香		
副主幹	矢野昌哉		
副主幹	衛藤美樹子	H30.4.1	転入
主任	久保紘子		

教務学生グループ	主事	廣瀬法子	H30.4.1	採用
			H31.3.31	退職
	事務職員	奈須真由美	H30.7.31	退職
	事務職員	宮川眞美		
	主幹	坂本晴生	H30.4.1	転入
	副主幹	染矢哲朗		
	主査	近藤亜矢		
	主任	神崎正太		
	事務職員	石橋菜穂	H30.4.1	採用
			H31.3.31	退職
図書館管理グループ	保健師	奥梢	H30.4.1	採用
			H31.1.31	退職
	臨時職員	今村知子	H31.2.1	採用
	事務職員	神崎純子		
	事務職員	安部浩	H31.3.31	退職
	非常勤職員	白川裕子		
	非常勤職員	斧田智恵	H30.4.18	採用
	非常勤職員	工藤信二		